
デジモンセイバーズ /SLASH/

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンセイバーズ / SLASH /

【Nコード】

N9942T

【作者名】

不知火

【あらすじ】

アドベンチャー、ティマーズの世界を冒険してきた主人公が次に向かうのはセイバーズの世界。

元の世界に戻るため、神珠を見つけるために、この世界の事件に関わるようになっていく。

この小説は、以前連載していた「デジモンセイバーズ SLASH」を新たに書き直した物になります。

おかしいところ、多々あると思いますが、それでも構わない方のみ
お読みください。

プロローグ（前書き）

この小説は、以前連載していた「デジモンセイバーズ SLAS
H」を新たに書き直したものになります。

約1年間連載をとめておりましたが、気持ちを新たに1からやり直
したいと思います。

よろしくお願いします。

プロローグ

「・・・きつと、きつとまた会えるよ。ダイチ、元気だね！」

「ああ、ムンモン。絶対にまた会おうぜ！」

パートナーとの別れ。

そして、『デジモンテイマーズ』という話の終わり。

今度こそ、元の世界に戻るのだろうか……？

今の現状を説明する前に、まずは、俺のことについて説明しようか。

俺の名前は、一菅原大地　すがわらだいち　。

今、いる世界とは別の世界からこの世界にやってきた。

俺は、自分が生まれた世界では、「デジモン」が大好きで仕方なかった。

ゲームも漫画もほとんど持っていたし、アニメも毎週欠かさず見て

いた。

『デジモンフロンティア』が終わって、次のアニメがデジモンじゃないと知ったときは落ち込んだりもしていた。

そんなある日、コンビニで雑誌の立ち読みをして、デジモンのアニメが復活することを知った。

『デジモンセイバーズ』という名前らしい。

俺はその雑誌を迷わず購入し、家へと走り出した。

俺は、アニメのことで頭がいっぱいで浮かれていたんだろう。

安全も確認せずに道路へ飛び出した俺は、車に轢かれて意識を失った。

気が付くと、辺り一面に何も無い、真っ白い空間だった。

そこには、一人の老人が立っていた。

その老人はこちらのほうを向くと話しかけてきた。

その老人曰く、自分は神様だということ。

そして、俺は、車に轢かれ、体は病院に運ばれ、今は精神だけの存在だということ。

いずれ目を覚ますのだが、それまで自分の暇つぶしに付き合ってくれないかということ。

信じられないような話だったが、老人が白い珠を取出し、そこに俺の体の現状を映し出したので、俺は信じるしかなかった。

そして、俺はその老人の暇つぶしに付き合うということで返事をした。

老人が、俺の返事に満足そうになずくと、先ほどの白い珠があたり一面をまぶしく照らした。

俺はあまりにもまぶしくて、目を閉じていたが、再び目を開けると、そこは森の中だった。

そこが『デジモンアドベンチャー』の世界のデジタルワールドだと知ったのはそれからしばらくしてからだ。

初めは戸惑ったりもしたが、だんだんと嬉しいという気持ちのほうが強くなってきた。

だって、俺の好きなデジモンが実際にいる世界に飛ばされたんだから。

俺は、そこで自分のパートナー、ルナモンに出会い、太一たち選ばれし子供たちとも仲良くなって、一緒にデジタルワールドを冒険した。

辛いこともあったけど、その度にみんなで乗り越えてきた。

俺のパートナーは、ルナモン。ウサギに似たデジモンで、一番の親友ともいえるやつだ。

俺は、ルナモンや、他の選ばれし子供たちと協力し、アポカリモンを倒すことができた。

その後、『デジモンアドベンチャー02』の時代になっても、太一たち、そして新たな選ばれし子供である大輔たちと協力してベリアルヴァンデモンも倒すことができた。

数日後、気が付くと、俺はあの何もない真っ白な空間にいた。

老人から話を聞くと、俺が目覚めるまでにはまだ時間がかかるということ。

『デジモンアドベンチャー』の世界で4年くらい経っているのだから、こっちではほとんど時間は進んでいないらしい。

それならと、もう少し暇つぶしに付き合ってくれんか？という老人

に俺はうなずいた。

そうして飛ばされたのが今いる世界、『デジモンテイマーズ』の世界である。

この世界で、タカトと仲良くなり、カードで対戦や交換をしたりと楽しく過ごしていた。

原作が始まり、タカトはギルモンとパートナーになった。

ジェンやルキとも仲良くなって、共にデーヴァと戦った。

クルモンがさらわれてしまって、デジタルワールドの冒険にでた。

クルモンを救出し、リアルワールドに戻ると、今度はデリーパーと戦った。

タカトたちや、デジタルワールドで増えた新たなテイマー、そして大人たちの協力を得てデリーパーを初期まで退化させることに成功した。

しかし、デリーパーを退化させるプログラムには一つの欠点があり、デジモンたちはデジタルワールドへと帰らなければいけなくなった。

冒頭の会話はそのときのものだ。

ルナモンとの別れはとても辛いものだった。

きつとまた会える。ルナモンのその言葉を信じ、俺は涙を拭いた。

.....

.....

.....

パートナーとの別れから2週間が過ぎた。

ティマーの中には、まだ悲しんでいる人もいるが、表向きには、デジモンがいなかったころの日々に戻ろうとしている。

学校から帰る途中で、俺は、まばゆい光に包まれた。

気がつくと、見覚えのあるあの白い空間だった。

そこにいた老人は、俺がきたのに気づくと、俺のところに来て

「申し訳ない！」

と土下座をしながら謝ってきた。

「おぬしの体はもう目覚める用意はできておる。しかし、おぬしの精神を体の方に送るには神珠しんじゅが必要なんじゃ。」

続けて老人は言う。

老人の話をまとめると、

- ・神珠は、俺を別の世界に送るのに使ったあの白い珠のことらしい
- ・神珠がないと、神は本来の力が発揮できないらしい。
- ・俺をここに呼び戻すときに神珠を使ったのだが、そのときに神珠が暴走してしまい、どこかの世界に飛んでしまった。

- ・俺にその神珠を探してきてほしい

とのことだった。

「どこかの世界っていつでも、どこに行けばいいんだよ。だいたい、神珠とやらがないと別の世界にいけないんだろ？」

俺がそう言つと、

「どこの世界にいったのかはすでに分かっている。その世界に送ることだけなら、神珠を使わなくても可能じゃ。とても疲れるがの」と返してきた。

（せっかく元の世界に戻れると思ったのに……）

しかし、この頼みを断ると、元の世界に戻れないどころか、ずっとこの何も無い空間で過ごさなければいけないことになる。

そんなのはごめんだ。

「はあ、仕方ない。分かった。その頼み受けるよ」

「おお、やってくれるか。すまんのう。神珠さえ見つければ、すぐにでもおぬしの精神を体にもどしてやるからの」

老人はそういうと、両手を合わせ、なにやら呪文のようなものを唱え始めた。

すると、老人の手が光りだし、俺はまぶしい光に包まれた。

「おお、言い忘れておった。わしが送る世界はおぬしらの世界でいう『デジモンセイバーズ』というアニメに似た世界じゃ」

薄れゆく意識の中、老人の声が聞こえた。

物語はここから始まる。

主人公紹介

【主人公】

菅原 大地 （すがわら だいち）

小学5年生（外見）

デジモンが好きなごく普通の高校生だった。

ある日、事故で意識不明の重体になる。

気がつくと、意識だけの状態で神のいるところに呼ばれていた。

目が覚めるまでという条件で、神の暇つぶしに付き合うことになり、『デジモンアドベンチャー』の世界へと移動し、そこで太一やルナモンたちと出会う。

その時の年齢は、太一と同じ年齢になっていた。

一緒にデジタルワールドを冒険し、紋章も手に入れる。

主人公の持つ紋章は「信頼の紋章」

デジタルワールド冒険中のある事件が原因で、原作を変えることに恐怖を抱いている。

協力して、アポカリモンを倒し、『デジモンアドベンチャー02』の時代では、中学生となる。

あまり関わることもないかと考え、ほとんど太一たちと一緒に大輔たち新たな選ばれし子供たちのサポートにまわっていた。

ベリアルヴァンデモンを倒した後、まだ本体は目覚めないということとで引き続き、神の暇つぶしに付き合うことにした。

今度移動したのは『デジモンテイマーズ』の時代。

パートナーであるルナモンは一緒についてきており、主人公の体は再び小学生になっていた。

タカトたちと仲良くなれたが、ルキは少し苦手だった。

もうそろそろ本体も目覚めるだろうと思っていたのだが、思わぬアクシデントで、別の世界へと移動することになった。

デジヴァイスは、『アドベンチャー』『02』のときは、初期のデジヴァイスのままだったが、『テイマーズ』の世界に移動するときにディーアークへと変わった。

【パートナー】

ルナモン

成長期 哺乳類型 データ種

ウサギのような体をしており、耳がいいデジモン。

寂しがりやな性格ではあるが、とても人懐っこい。

月光浴が好きで、月がよく見える晩は、大地と一緒に散歩することも多い。

主人公が異世界から来たことを知っており、『アドベンチャー』から『ティマーズ』の世界には、一緒に飛び立った。

『アドベンチャー』では、完全体までしかなることはできなかったが、『ティマーズ』の世界で、大地と共に進化することで究極体に進化できるようになった

〔必殺技〕

>ティアーシュート< 頭の触覚に力を集中させて綺麗な水球を放つ技

>ルナクロー< 闇の力が込められた爪でひっかく技

〔得意技〕

>ロツプイヤーリップル< 耳をくるくると回し、発生させたシャボンの渦で相手を巻き込む技

レキスモン

成熟期 獣人型 データ種

ルナモンが進化したデジモン

驚異的なジャンプ力を持ち、素早い動きで相手を翻弄しながら戦うのが得意である。

〔必殺技〕

>ムーンナイトボム< 両手から催眠効果のある水の泡を飛ばして相手を眠らせる技

>ティアアロー< 背中突起から氷の矢を引き抜いて放つ技

〔得意技〕

>ムーンナイトキック< 持ち前のジャンプ力で高く跳躍し、上空から急降下キックを放つ

主人公紹介（後書き）

ルナモンが進化するたび追加していきます

第1話 異世界

「ん……」

気がつくと、俺は茂みの中に倒れていた。

立ち上がって周りを見回すと、どうやらここは公園のようだ。

別の世界にいたらしい。

「あの神様の最後の言葉……。『デジモンセイバーズ』の世界って言ってたけど……」

『デジモンセイバーズ』、たしか今度始まる予定だったデジモンアニメのタイトルだったはずだ。

「困ったな……。どんな内容が分からないぞ」

俺は一人つぶやくと、

『どうしたのー？ダイチー』

と、やや高めの声が聞こえてきた。俺は驚いて回りを見回すけど、誰もいない。

『こっちだよー。ディーアークの中』

また、声が聞こえてくる。俺は言われるままにディークの画面を見ると、そこには俺のパートナーであるルナモンの姿があった。

『えへへ。やっぱりまた会えたね』

ルナモンは笑顔でそういった。

「ルナモン！ああ、また会えてとってもうれしいよ」

俺はルナモンにそう返す。

あれだけ、涙を流しながら別れたっていうのに、たった2週間でまた会えるなんて、ちよっと気まずい気もした。

だけど、そんなことより、またルナモンと一緒にいられるという気持ちの方が圧倒的に勝っている。

この世界にもデジモンがいるからということ、俺のパートナーも連れてきてくれたようだ。

「ところでさ、なんでルナモンはディークの中に入ってるんだ？」

『なんかね。神様がディークにいろいろと機能を追加してくれたんだ。わたしにはそれくらいしかできないからとか言って。』

「あのじいさんがねえ。せつかく戻れると思ったのに戻れなくなっただけだから少しは責任感じてるのかな。」

ルナモンに話を聞くと、神様は大きく分けて2つのことをしてくれたようだ。

1つ目は、ディークの機能の追加。

これは、ルナモンをディーク内に入れることで、人目につきにくいようにすることができる。

また、ディークにデジタルゲートを開く機能も追加してくれたようだ。この世界のデジタルワールドはどうなってるのか気になるから、今度行ってみることにしよう。

2つ目は、生活面での補助だ。

『アドベンチャー』や『ティマーズ』の世界に行くとき、主人公と年齢をあわせるという意味で、俺は小学生の体になっていた。

『ティマーズ』の世界から戻ってきたときも小学生のままだったが、これは神珠を失って、元の姿に戻すことができなかったそうだ。

そのため、この世界でも俺は小学生の姿のままだ。

だから、小学生の姿でも生活できるよう、家と、ある程度の金を用意してくれたらしい。

さらには、戸籍なんかも作って、俺の小学生への転入手続きもしてくれそうだ。

小学校には、元の世界、アドベンチャー、ティマーズと3回行っているの、これで4回目になる。

余計なことを……とも思ったが、少しでも怪しまれないようにという配慮なのだろう。

(……でも、今度会ったとき一発殴るくらいは許されるはず)

俺は握りこぶしをつくってそう思った。

ルナモンとの再会を終え、一通り話した後、俺は今いる公園を見回した。

あたりには誰もいない。この公園は、いつも人がいないのか、それともたまたまなのか。

よくわからない。

「……この世界自体、まったく知らないしなあ。とりあえず、あのじいさんが用意したっていう家に向かうとするか。」

俺はそうつぶやいて、歩き出そうとしたとき、

『ダイチー、向こうにデジモンがいるみたい。』

ルナモンが、そういった。

「デジモン？どんなやつか分かるか？」

『分からない。でも、一匹だけみたいだよ。』

1匹か、ならルナモンだけでもおそろくなんとかなるだろう。

この世界のデジモンについても何か分かるかもしれない。

「よし、分かった。とりあえず、様子を見に行ってみよう」

俺はルナモンにそう答え、デジモンの気配がするという方向へと歩き出した。

.....

.....

.....

公園の奥に進むと、そこにはたくさんのガラの悪そうな人達が倒れていた。

「これって……もしかして、デジモンにやられたのか!？」

『多分そうだと思う。人間とデジモンじゃ、力に差があるから。』

この世界でも、デジモンは人を襲う存在なのだろうか？

なんにせよ、無視するわけにはいかない。

「ルナモン、そのデジモンはどこにいるんだ？」

『その階段の下だよ』

ルナモンがいった方向には階段があり、その下から何か声が聞こえる。

この人たちを襲ったデジモンだろう。

俺は、その階段を下りようとすると、いきなり後ろから肩をつかまれた。

「キミ、ここで何してるの？ここは避難勧告が出されているのよ」

俺が振り向くと、俺より背の高い女の人がそういつてきた。

避難勧告？そんなこと言われてもさっきこの世界に来たばかりだし、知るわけがない。

俺が首をかしげているのを見た女の方は、

「はぁ、聞こえなかったのね。」

とため息をついて言ってきた。

「すみません。でも、そんなことより、その階段の下に何かいるみたいなんです。」

「なんですって？」

俺の言葉に、女の人は階段のほうを向き、そのまま降りていった。

俺も気になるのでその後を追う。

「なんだテメエ。俺の喧嘩の邪魔しやがって・・・！どこのどいつか知らねえが、俺の島を荒らす奴は許さねえ！日本一の喧嘩番長、だいまんまさる大門大様がなあ！！」

「うるさい！ごちゃごちゃ言いやがって。テメエこそ、人間の分際で生意気なんだよ！！」

階段の下では一人の男と一匹のデジモンがにらみ合っていた。

「（おい、あれってアグモンだよな）」

『（う、うん。アグモンだけど、太一のアグモンとは何か違う気がする）」

男のほうは知らないが、デジモンはアグモンのようだ。俺とルナモンが小声で話していると

「ラプター1だわ」

女の人がそうつぶやく。

「ラプター1？」

「っ！あなた、まだこんなところにいたの！？ここは危険よ、はやく離れなさい！」

「でも・・・」

「あーもう、分かったわ。いい？絶対ここから動いちゃダメよ」

女の方はそう俺に言うと、マサルにアグモンから離れるように言った。

マサルはそれを無視すると、アグモンと喧嘩を始めてしまった。

マサルとアグモンの喧嘩はほぼ、互角のように見える。

「（・・・なあ、ルナモン。さっき、デジモンと人間じゃ力に差があるって言ったよな？）」

『（うん、言ったね）』

「（なら、あのマサルとかいうやつがアグモンと互角に戦ってるのはなぜだ？）」

『（喧嘩番長って名乗ってたし、すごく強いんだよ）』

そういうものなんだろうか？

俺とルナモン、そして女の方は、喧嘩している二人に驚き、ボーッと眺めていることしかできなかった。

いつの間にか、喧嘩が終わり、友情を育み、アグモンはマサルの子分になると言っている。

「そこまでよ！」

女の方はハッとして、そう叫んだ。

「ララモン、リアライズ！」

女の方が、小型の機械をとりだしてそういつと、ピンク色の植物型デジモンがでてきた。

（デジモン！？）

あの人にもパートナーがいたのか。

先ほどの小型の機械がこの世界のデジヴァイスのようだ。

俺のディーアークと同様、デジモンを中に入れることができるらしい。

「さあ、私たちと一緒に来てもらいましょうか」

女の方は、マサルとアグモンにそっくり。

マサルはアグモンを背負った。どうやら逃げるようだ。

「>ベビーフレイム<！」

「>ナッツシュート<！」

二体のデジモンの必殺技がぶつかり合って爆発を起こす。

あたり一面に爆煙が広がり何も見えなくなった。

しばらくして、爆煙が収まると、そこにマサルとアグモンの姿は無かった。

それどころか、ここから動くなと言っていたあの女の人もいなかった。

「……もしかして、俺忘れられてる？」

『は……はは。多分……』

俺は、仕方がないので、じいさんが用意してくれたという家に向かうことにした。

第1話 異世界（後書き）

以前の小説を書いていたときに思ったのですが、自分はあまり長文を書くのは得意ではないようです。

そのため、1話は大体このくらいの文章になると思います。
短いかもしれませんが、ご了承ください。

第2話 傍観

じいさんが用意してくれたという家は、俺とルナモンだけが住むにはちよつと大きい家だった。

家に入り、ルナモンをディーアークから出してやろうとおもったが、やり方がわからない。

「さっきの女の人、リアライズって言ってたっけ……。よし、ルナモン、リアライズ！」

俺はさっき女の人やっていた方法を真似てディーアークを前に突き出す。

画面がひかりだし、その光が収まると、俺の目の前にルナモンがいた。

「ルナモン、会いたかったよ」

「僕もだよ。ダイチー」

さっきはいろいろあって、あまり話せなかったけど、ここならゆつくりできる。

俺とルナモンは、お互いのことを話し始める。

この2週間どうしていたのか、仲間はどうしているのか。そんな話

だ。

たった2週間だというのに、俺たちはもう何年もあっていなかったように感じていた。

話のネタは尽きることなく、気がつくと思いは、暗くなっていた。

「ダイチー、おなかすいたー」

「ずっと話してたからな。俺も腹減ったし、何か買ってくるよ。ちと待ってるよ」

俺は、ルナモンがうなずくのを見て、家を出た。

適当にスーパーで何か買ってくるでしょう。

家を出て、住宅街を抜けると、何かと騒がしい。

すぐ近くでサイレンの音も聞こえる。

「もしかして、あのアグモンのことかな？」

よくわからないけど、あのアグモンは追われているようだった。

この世界では、デジモンはどんな存在なのか、まだよく分からないから判断しづらい。

「俺らはどうすればいいんだろうな。……ん？あれは……」

俺が一人考え事をしていると、公園内に設置している噴水のところに見覚えがある二人を見つけた。

昼間の大門大っていう人と、ピンクのデジモンを持っていた女の人だ。

少し近づいてみると、重要参考人とか連行とか穏やかではない単語が聞こえてくる。

（何話しているんだ？）

俺はそう思って、草陰に隠れてこっそりと近づく。

距離が縮まるにつれて、二人の会話の内容が聞こえてきた。

「あんた、何者だ？」

「デジタル Digital アクセシブル Accessible タクティクス Tactics スクアッド Squad、DATSの藤枝淑乃^ド」

「なんだって？」

「デジタルワールドからやってきた未知なる生命体、デジモンを取り締まるのが私たちDATSの仕事よ」

その後も二人の話は続いていく。

よく聞き取れない部分もあったが、あの女の人の名前が藤枝淑乃っていうことは分かった。

DATSっていう組織があつて、『ティマーズ』の山木さんの組織のようなことをしているようだ。違いのは、組織内にデジモンをパートナーに持つ人がいるってことか。

淑乃さんの話の要点をまとめると、アグモンが組織から逃げ出した。

デジモンは特定の餌しか食べない。

そういう食べ物があるのはDATSだけ。

飢えて餓死されたくないのなら、アグモンの居場所を教える。

とのことだった。この世界のデジモンは、人間の食べ物食べられないのか。

ルナモンは何でも食べるけどね。好きなものは、チーズケーキ。

（そうだ。せっかくだし、チーズケーキも買っていこう。ルナモン喜ぶぞ）

俺がそう考えていると、二人はすっと立ち上がって公園から出て行った。

どうやら、マサルがアグモンのエサを貰うためにDATSに行くことにしたようだ。

俺も早く食料を買って帰ることにしよう。

家に帰ると、ルナモンに遅いと怒られてしまった。

チーズケーキを見せたらすぐに機嫌がよくなったが。現金なやつだ。

食事が終わるってゆっくりとくつろいでいると、近くで爆音が聞こえた。

「ダイチ！デジモンだ！」

「何！？分かった。すぐに向かうぞ。」

俺は、ディーアークとカードホルダーを腰に取り付け、ルナモンと一緒に家から飛び出した。

デジモンが現れたのは、近くのハンバーガーショップのようだ。

周囲を警官が封鎖しており、中に忍び込むのに時間がかかってしまった。

デジモンがいるところについたときに、目に入ったのは、大きなコカトリモンと、そいつに向かって殴りかかっているマサルの姿だった。

「アグモンと喧嘩してるときにも思ったけど、デジモンにダメージを与えるなんてなんてやつだよ。」

「すごいねー」

俺のつぶやきにルナモンが答える。

状況判断のために周囲を見回すと、アグモンが倒れていて、その近くには釣竿を持ったおじいさんがいた。向こうは俺たちに気づいていないようだ。

マサルも、そのおじいさんに気がつく。何か話しているようだが、ここからではよく聞こえない。

一言二言マサルとおじいさんが会話したあと、おじいさんはマサルに小型の機械を投げ渡した。

「あれって……デジヴァイス？」

俺がつぶやくと、マサルは、受け取ったデジヴァイスにもう片方の手をかざした。

そのとき、辺りにまぶしい光が広がった。

これは……

「アグモン進化！ ジオグレイモン」

「アグモンが進化した！？でも、グレイモンじゃないのか？」

「太一のアグモンとは違うんだから、進化が違ふことだってあるよ。」

俺の問いにルナモンが答えた。

グレイモンとよく似ているが細部が異なっている。

俺は、ディーアークを向け、情報を映し出した。

『ジオグレイモンモン 成熟期 恐竜型 ワクチン種

必殺技は口から超高熱火炎を吐き出し全てを焼き払う>メガフレ
イム<』

「必殺技は同じなのか……」

俺らがそんなことをしているうちに決着がついたようだ。先ほどの女の人、淑乃さんがコカトリモンのデジタマを回収していた。気がつくとも夜も明けている。

俺らの出番はなしか。帰ろうと思ったとき、

「ちょっと待ちなさい」

と声が聞こえた。

俺か？と思って振り向いたが、どうやら違ふようだ。淑乃さんが、マサルに話している。

「確かにハンバーガーショップを襲ったのは別のデジモンだった。けどね、そいつはすでに13人も生徒に怪我を負わせているのよ。見逃すわけにはいかないわ!」

「ごめん。それやったの俺」

「は?」

「隣町の不良なんだけどさ。何が気に入らなかったのか呼び出されたんで返り討ちにしてやったってわけ」

あの公園にいたガラの悪そうな男たちはマサルの仕事だったのか。喧嘩番長って名乗るだけのことはあるな。

「すごいねー」

ルナモンがそういつて目をきらきらさせている。

いつの間にかマサルと淑乃さんはどこかへ行ったようだ。DATSにでも帰ったのだろうか。

「俺らも帰るか」

「うん!」

俺らも家に帰ることにした。

【Side DATSの隊長】

あのデジモンと心を通わせるだけでなく、進化までさせてしまうあの少年をなんとしてもわがチームに入りたいものだ。そう考えていると

「あら？」

オペレータの一人がそういった。

「どうかしたのか？」

「いえ、デジモン反応が一匹増えているんです。」

どういうことだ？あそこにはラプター1とコカトリモンしかいなかったはずだが・・・

「どんなデジモンか分かるか？」

「いえ、今はそのデジモン反応も消えております。おそらく機械の誤作動かと」

そうか、デジモン反応が消えているなら仕方ない。深く考えないことにしよう。

そう考えた私は、淑乃と例の少年を待つことにした。

第2話 傍観（後書き）

アニメ1話の話が終わりました。

しばらくの間主人公は表立って活躍しませんが、皆さんに楽しんでもらえるよう頑張ります。

第3話 転入

「……行きたくない。」

今日は、俺の小学校転入の日だ。

変に思われないように、周りに合わせるのって結構疲れるからな。

以前の世界でも、小学校に通っていたからある程度慣れたと思うが、嫌なもの嫌だ。

俺は、重い足取りで学校へと向かう。

一応、何があってもいいようにルナモンはディーアークの中に入っている。

『ダイチー、そんなにゆっくり歩いてたら遅刻しちゃうよー』

ルナモンは、俺の気も知らないでそんなことを言うてくる。

「……はあ」

俺は、今日何度目になるか分からないため息をついた。

『ダイチ、あれ何かな?』

ルナモンの言葉で俺は前を見る。

いつのまにか学校近くまで来ていたようだ。

見ると、学校の隅の方に人だかりができていた。

「行ってみよう。」

俺は、ルナモンにそう言って、人だかりの方へと向かった。

人だかりの隙間から、中を覗いてみると、飼育小屋が壊されていた。明らかに自然に壊れたものじゃない。ひどいことをするやつもいたもんだ。

『（ダイチ、デジモンの気配がする。）』

ルナモンが、小声で俺に話しかけてくる。こんな人だかりのところだし、当然か

つられて俺も小声になる。

「（つてことは、これはデジモンの仕業なのか？）」

『（多分、そうなんじゃないかな。そこの建物の裏だよ）』

ルナモンに言われた建物を見る。これは倉庫だろうか？

そこの裏にデジモンがいるらしい。

こっそりとその倉庫に近づく。

「知香ー！飼育小屋荒らした犯人は兄ちゃんたちが必ずぶっ飛ばしてやるからなー！」

いきなり聞こえた大きな声にびっくりして倒れそうになる。

何とかこらえてそっと倉庫の裏を見る。

そこには、昨日見た、自称喧嘩番長のマサルと、アグモン、そして淑乃さんの姿があった。

どうやら、ルナモンが感じたデジモンの気配はアグモンのものらしい。

「（っていつか、こんなところでデジモン外に出していいのかな？）」

俺は思わず、つぶやいた。

DATSっていう組織があるくらいなんだから、デジモンは一般的なものじゃないんだろう。

俺が、そんなことを考えていると、

「（ねえねえダイチー。チャイム鳴ってるけど行かなくていいの？）」

「

と、ルナモンに言われた。

気がつくと、いつの間にかチャイムが鳴っている。飼育小屋の周りの人だかりも無くなって、ほとんどの人がいなくなっていた。

登校初日から遅刻なんて最悪だ。

俺は急いで、学校の中に入っていた。

「はじめまして。菅原大地です。」

転校初日ということで、皆の前で挨拶をする。クラス全員から好奇の目で見られる。

このイベントだけは、何度やっても慣れないな。

「じゃあ、大地君はあの知香さんの隣ね。」

担任の先生は、そういつて一つの席を指す。俺は、言われるままに、その席に向かい、腰を下ろした。

「大門知香です。よろしくね」

「う、うん。よろしく。」

いきなり声を掛けられ戸惑いっつも返事を返す。

大門ってあのマサルと同じ苗字だな。それに今朝、マサルも知香っ

て言っただよな。もしかして、妹か？

「えー、皆さんも知っているとありますが、飼育小屋が荒らされ、鶏やウサギがすべていなくなっていました。荒らした犯人は見つかっていませんが、近くにいるかもしれません。皆さん気をつけてくださいね」

今朝の飼育小屋のこのような。飼育係であるタカシ君が朝、飼育小屋を見たときにはすでにそうなっていたらしい。タカシ君は今も元気がない。

先生の話が終わって、先生は教室から出て行った。

休み時間、俺は、他の生徒から質問攻めにあっていた。どこから来たの？とか、どうして転校してきたの？とか答えづらい質問ばかりだ。

「異世界」とか「神様に転入手続きされて」なんて答えられるわけがない。変な人と思われるのが落ちだ。だから俺は、あいまいに答えておいた。

（それにしても、飼育小屋荒らした犯人って何なんだろうな）

授業中、簡単でつまらない授業を無視して、俺はずっとそのことばかり考えていた。

十中八九あれは、デジモンの仕業だろう。

だとしたら、一体何のために？

分からないことだらけだ。

犯行は夜、行われたらしいし、ルナモンと相談して、今晚行ってみよう。

そんなことばかり、考えていると、俺が授業を聞いてないことに気づいた先生が、俺を指名して、黒板の問題を解かせる。

もともと中学校に通っていた俺からすれば、この程度の問題は、難なく解ける。

あっさりと解いた俺に、先生は悔しそうな顔を、そしてクラスの皆は驚いた顔をした。

俺は、席に戻り、再び考え事を始めた。

.....

.....

.....

夜、俺がこっそりと学校に忍び込むと、すでに先客がいた。

「あれは、マサルと淑乃さん？どうしてこんなところに？」

俺はそっとつぶやく。やはりこれがデジモンの仕業だからだろうか。

「でも、どうするの？見つからない方がいいんだよね？」

ルナモンが俺に尋ねる。ちなみに、ルナモンはディーアークの外だ。もし、戦闘になった場合のことを考えると、ディーアークの中にいたら危険だからだ。

「DATSっていう組織がどんな組織なのか具体的に分かってないし……。ここは遠くから様子を見よう」

アグモンに対しては捕まえようとしていたし、ルナモンが見つかった場合、どうなるか分からない。

俺とルナモンは、校舎の裏に周り、カードホルダーから一枚のカードを取り出した。

「>カードスラッシュ<！白い羽！！ルナモン、俺を連れて屋上まで運んでくれ」

俺が使ったのは、白い羽だ。ルナモンに飛行能力を与えることができる。

ルナモンは、俺の言葉に大きくうなづくと、背中から生えた白い羽を使って、ゆっくりと俺を持ち上げた。

屋上に着いた俺は、飼育小屋のほうを見ると、大きな虫が飛んでいるのが見えた。

「ダイチ、フライモンだよ！」

ルナモンが隣で叫ぶ。どうやら、俺らが校舎裏に回り込んでいた時に現れたようだ。

俺は、首からぶら下げていた双眼鏡を手に取り、覗き込んだ。この双眼鏡は、俺が元いた世界で父さんに買ってもらったものだ。俺の一番の宝物とも言えるもので、いつも肌身離さず持ち歩いている。

覗き込んで見たものは、淑乃さんと大きなデジモンが倒れているところだった。

フライモンにやられたのだろうか？マサルが近づいて何か言っているようだがここからではよく聞こえない。

「アグモンは……っと。なんで飼育小屋に入っているんだ？」

どういう状況なのかまったく分からない。しかし、おそらくこれはピンチなのだろう。

「仕方ない、ルナモン。行くよ！」

俺は、カードを一枚取り出した。

「>カードスラッ……って何やってるのあいつ!？」

俺は目に入ってきた光景に思わず叫んでしまった。

マサルが、フライモンに突っ込み、そのまま殴り飛ばしたのだ。

「かつこいー！」

ルナモンは目をきらきらとさせて感動しているが、俺は開いた口が塞がらなかった。

俺が呆然としているうちに、マサルは、アグモンをジオグレイモンへと進化させ、フライモンを倒してしまった。

「俺らの出番なかったな。まあ、無くてもいいんだけど。帰るか？
ルナモン」

俺はルナモンにそう声をかけた。しかし、ルナモンは空を見上げたまま返事をしない。

「ダイチ！またデジモンが現れた！」

その言葉に俺も空をみると、そこにはゲートと思われる穴と、そこから出てくるデジモンの姿だった。

「あれは……スナイモン！？下の二人は、フライモンとの戦いで疲れているっていうのに……。仕方ない。行くよ、ルナモン！」

俺は、気を引き締めカードをディーアークに通した。

「>カードスラッシュ<！超進化プラグインS！！」

「ルナモン進化！レキシモン！！」

俺は屋上に残り、レキシモンは、スナイモンがいるグランドへと跳

んだ。

【side マサル】

まさか、デジモンがもう一匹いるとは思わなかったぜ。ジオグレイモンはアグモンに戻ってしまったし、淑乃は倒れたままだ。

こうなったら、もう一度アグモンを進化させるしかねえ！

俺はそう考え、カマキリに似たデジモンに殴りかかる。しかし、カマキリの野郎はさっきのデジモンよりも素早く、高いところを飛んでいるため、俺の拳が当たらない。

「くっそー！おいこら！カマキリ野郎、降りてきやがれ！」

「アニキ、俺に任せて！>ベビーフレイム<！」

アグモンが、炎を放つが、両手の鎌に弾かれてしまう。

俺がもう一度と、カマキリ野郎へ向かって走り出すと、俺の前に白と紫のウサギのようなデジモンが立ちふさがった。

「なんだ、てめえは！」

俺はそのデジモンに向かって叫ぶ。

しかし、そのデジモンは何の反応もしない。

「アニキ、どうしよう。デジモンが増えちゃった。これじゃ勝ち目ないよ!」

「あきらめんな! 相手が多ければ多いほど燃えてくるじゃねえか!」

弱気なアグモンの発言に俺はそういつて、このウサギ野郎へと殴りかかった。

ウサギ野郎は、俺の攻撃をひらりとかわすと、両手を前に出した。

「>ムーンナイトボム<!」

ウサギ野郎の両手から水の泡が飛んできて、俺の横を通り抜けていった。

「へっ、どこ狙ってるんだ。俺たちはここだぜ!」

「アニキ! 後ろ見て!」

アグモンに言われるままに後ろを見ると、あのカマキリ野郎が倒れていた。

様子を見るからに寝ているようだ。まさか、あの水の泡は俺たちを狙ったものじゃ無かったって言うのか?

「>ムーンナイトキック<!」

眠っているカマキリ野郎めがけて、ウサギ野郎は跳躍し急降下キックを放った。

眠ったままでどうしようもない、カマキリ野郎はその蹴りを受け、デジタマへと戻っていった。

「おい！そのウサギ野郎！待ちやがれ！！」

俺は、ウサギ野郎に向かって叫んだ。しかし、ウサギ野郎は、こつちをちらっと見たあと、学校を跳び越え、どこかへ行ってしまった。

「あのウサギ野郎はいつたいたんだっただ？」

俺のつぶやきに答える人は誰もいなかった。

第4話 逃走

【side マサル】

俺は、あの飼育小屋での事件のあと、DATSに入ることを決意した。

強い奴らと思いつきり戦えると思っただからだ。

だけど、それだけじゃない。あのウサギ野郎について何か分かったからだ。

だが、

「知らないだつて！？　なんでだよ！」

「知らないものは知らないのよ。大体ウサギみたいなデジモンってだけじゃ、分かるわけがないじゃない。そもそも、そんなデジモン、本当にいたの？」

淑乃がいうには、あのウサギ野郎はDATSのデジモンではないらしい。淑乃は気絶していたし、ウサギ野郎を見ていたのは俺とアグモンだけのようだ。

「確かに事件時、あの区域でお前たちを除いて3体のデジモン反応が確認された。しかしだ、3つとも消えてしまったのだ。私はてっきり、お前たちが倒したものだと思っただけ……」

隊長の首に巻きついているデジモン、クダモンがそういった。

じゃあ、あのデジモンは一体なんだったんだ？ちくしょう、ここに来れば会えるかとも思ったのに。

まあいい、俺が絶対見つけ出してやるぜ。借りを作っただままっていうのも癪だしな！

【side 大地】

小学校に転入して、3日が過ぎた。

新しい学校にも少しずつ慣れ始め、友人もできた。

勉強は簡単すぎて退屈だけど、まあまあ4度目の小学校生活を楽しんでいる。

今日は、休日だから、俺はのんびりと街中を探索している。

学校に通っていて、このあたりの建物など、よくわからないからなついでに、じいさんが言っていた神珠とやらも探しておこう。こんな街中に転がっていたら苦労はしないが。

『ダイチー。近くにデジモンの気配がするよ。それもたくさんのだ』

ジモンの気配！』

ディーアークの中でルナモンが言ってきた。

「休日くらいゆっくりとさせてほしいな……」

俺はぼそっとつぶやいた。

『どうするの？』

「行く。どっちだ？」

ルナモンは、苦笑して聞いてきたので、俺は答えた。

そして、ルナモンが指示する方向へと駆け出した。

………

………

………

ルナモンの指示通りに行くと、橋の上についた。

ルナモンに橋の下だと言われ、橋の下を見る。

そこには、倉庫がたくさん並んでおり、大量の火の玉と、二本足で立つ青い犬が対峙していた。

「あの火の玉って……プチメラモンだよな？ 犬の方は見たことがないデジモンだ」

俺はそうつぶやいて、ディークをその青い犬の方へと向ける。

『ガオモン 成長期 獣型 データ種』

必殺技は体を回転させ両腕で叩きつける>ダブルバックハンド<』

青い犬はガオモンというらしい。

あ、近くに人影も見える。ここからでは遠くてぼんやりとしか見えないが、あの後ろ姿は淑乃さんだろうか？ その近くには金髪の男の人もいた。

もしかして、ガオモンは、この男の人のパートナーなのかな？

俺の予想はあっていたようで、男の人は、デジヴァイスらしきものをガオモンに向けた。光があふれ、ガオモンは、大きな犬に進化した。

俺は再びディークを向ける。

『ガオガモン 成熟期 獣型 データ種』

必殺技は口から渦巻状の強力な風を一気に放つ>スパイラルブロ<』

「ガオモンに、ガオガモンね。」

俺の目の前には、ガオガモンが口から渦巻きのような風を放ち、たくさんいるプチメラモンたちを巻き込んでいく光景があった。

プチメラモンたちは、その攻撃で、デジタマへと変わっていく。

『ダイチ、僕たち全然出番なかったねー』

「まあ、仕方ないかな。買い物したら、帰ろうぜ」

俺は橋の下で、デジタマを車に運んでいる淑乃さんたちから目を離して、そういった。

.....

.....

.....

「どうしてここにもいるんだよ.....」

俺はつぶやく。

俺の目の前には、プチメラモンが5体と、レキシモンの姿があった。レキシモンは、プチメラモンに出会ったとき、ディーアークからルナモンを出して進化させた。

どうして、こうなったのかというと、単純な話、買い物帰りに空き地で出くわしたただけだ。

なんでこんなにプチメラモンがいるんだよ。あれで終わりじゃなかったのか！？

買ったものの中にはアイスとかもあるから早く帰らないといけない

って言うのに……

「レキシモン、さっさと決着をつけるぞ！　アイスが溶けてしまう」

「任せて、ダイチ！　<ティアアロー>!!」

俺の言葉にレキシモンはうなづくと、氷の矢を取り出して放った。

相手は5体いようともし詮は幼年期

レキシモンの敵じゃない。レキシモンの氷の矢に当たったプチメラモンたちはあっという間にデジタマに戻っていった。

俺がレキシモンに近づこうとすると、

「ダイチ、あれってさっき見た車じゃない？」

そういつてある一点を指差した。俺が、そこを見ると、一台の車がこっちに向かってきているのが見えた。

「ってことは、あれってDATSの車ってこと！？　見つかったらまずいじゃん！」

普通に逃げるだけじゃ、見つかってしまう恐れがある。ここら辺にはあまり隠れる場所もない。

「ダイチ！　僕が注意を引くからその隙に逃げて!!」

レキスモンがそういつて、車の方へ向かった。

心配だけど、レキスモンならきつと大丈夫だろう。

俺は、そう信じて、買い物袋を持ち、車が来ている方向と逆の方向へと走って逃げた。

【side 淑乃】

私とトーマは、マサルのせいで大量発生してしまったプチメラモンを回収するために、町中を走り回っていた。

戦いはほとんどトーマだけでやって、私はデジタマの回収という役割だ。

『次、E・23地区にデジモン反応。プチメラモン5体です。』

通信機から連絡が入る。

『ちょっと待ってください。E・23地区、デジモン反応さらに一匹増えました。』

「どっということ?」

『分かりません。プチメラモンではないようです。と、とにかく至急現場に急いでください。』

よくわからないけど、プチメラモンの他にもデジモンが現れたらしい。

「トーマ、飛ばすわよ。しっかり掴まってて!」

私は、トーマにそういうと、アクセルを踏み込んで指示されたE - 23地区へと向かった。

.....

.....

.....

指示があつたE - 23地区に着いた私とトーマが見たのは、5つのデジタマと、1体のデジモンだった。

「まさか、プチメラモンはこのデジモンがやったのか?」

隣にいたトーマがつぶやく。状況からみて、このデジモンがプチメラモンを倒したのは間違いないでしょう。

そのデジモンは、白と紫を基調にしており、月の絵がかいてあるグローブをつけていた。

『淑乃。もしかして、マサルが言っていたデジモンってこのデジモンのことじゃないかしら?』

デジヴァイスの中にいた私のパートナー、ララモンが言ってきた。

……確かに、色も同じだし、ウサギのような耳もある。マサルが言っていたことは本当だったのね。

警戒態勢の私とトーマを前に、この謎のデジモンは何もしようとしてこない。

私たちは、このデジモンが何をしてくても対処できるように気を引き締めた。

ふと、謎のデジモンは後ろを振り返った。つられて、私もデジモンの後ろのほうを見るが、何もない。

「？ よくわからないが、チャンスだ。いけ！ ガオモン！！」

「イエス、マスター！ >ダブルバックハンド<！！！」

謎のデジモンの隙をみたトーマは、ガオモンに指示を出す。

ガオモンは、回転しながら、このデジモンの方へと突っ込んだ。

いける！ と思ったけど、このデジモンは、ガオモンの攻撃が当たる直前にひらりとかわして、近くの屋根に飛び乗った。

まさか……逃げる気！？

「ま、待て……！」

トーマが叫ぶが、もう遅い。謎のデジモンは屋根から屋根へと飛び移ってあっという間に離れていった。

『E-23地区、デジモン反応消失しました。』

通信機越しにオペレータの声が聞こえた。完全に逃げられたってことね。

「仕方ないわ。このデジタマだけでも回収しましょう。あのデジモンは、隊長に報告ね。」

私は、トーマにそう伝える。トーマは私の言葉にうなづくと、私と一緒にデジタマを車の中へと運んだ。

【side 大地】

レキシモンのおかげで、見つからずに済んだ。

見つからなかったのは良かったんだけど……

「アイスは全滅かよ」

プチメラモンは幼年期でも火だしな。近くにいたことでアイスは全部溶けてしまっていた。

はあ、また買ってこないとな

第5話 電子世界

【Side 薩摩（DATSの隊長）】

『僕一人ならミスは無かった。』

『なんだと！？ 俺のせいだって言うのか？』

『そうだ。僕のプラン通りだったら、被害も最小限で収めることができた。君の無鉄砲な行動が僕のプランを台無しにしたんだ。』

通信機越しにマサルとトーマの二人が言い争っているのが聞こえる。

プチメラモンの事件以降、この二人にはチームを組ませた。

お互いに相手のことを理解してもらったためだ。

先ほど、淑乃を含め3人でヌメモンの討伐に行ってもらった。

その結果が、この言い争いだ。まだまだ二人の関係が良くなる傾向はない。

まあ、まだこの二人は出会ってから間もない。きっと、いつかうまくいくだろう。

私が、そう考えているとDATSの非常アラームが鳴り響いた。

「C・38地区にデジモン反応。3体です。至急向かってください」
デジモンが現れたらしい。オペレータが、マサルたちに連絡を入れている。

『こんなのと争っていても仕方ない。ガオモン、すぐに向かうぞ』

『ああ？ こんなのはずいぶんな挨拶だな。やんのかてめえ！』

デジモンが現れたと言っても、二人は言い争ってばかり。

マサルも少しは状況を考えてほしいものだ。

「言い争ってないで、早く向かいなさい！！」

オペレータの一人がそう叫んだ。

二人は、その言葉に驚いたのか、一瞬息を詰まらせた。

その後、二人は、言い争いをやめ、淑乃と共に、デジモンが現れたというC・38地区の方へと向かった。

.....

.....

.....

【side 淑乃】

『C-38地区、デジモン反応、1体を残して消滅しました。おそらく例のデジモンかと思われます。』

デジモンが現れたという場所に車で向かう途中、通信機から連絡が入る。

例のデジモン、あのウサギのようなデジモンのことだ。

突然現れ、デジモンを倒しては、いつの間にかいなくなっている。

その後、デジモン反応を調べてもまったく反応しない。

そのため、ここ最近のDATSの話題は、そのデジモンのことばかり。

一体、何が目的なの？

「淑乃！ まだ着かないのか？」

「うるさいわね。こっちだって結構飛ばしてるんだから。黙ってて！！」

後ろから怒鳴ってきたマサルに私は大声で答えた。

『デジモン反応、すべて消滅しました。』

目的地寸前というところで、通信機から連絡が入る。

くう……間に合わなかったわ。

私は車を止めてから降りた。

マサルたちも一緒だ。

「くそつ、あのウサギ野郎、もう逃げちまったか！ 隠れているなら出てこい！！」

マサルは大声で叫んだ。どうせ、自分の獲物を奪いやがってとかそんなこと考えてるんでしょけど。

「おい、淑乃。もっと早く走れなかったってのかよ！」

「何よ。私のせいだっていうの？ あのデジモンに逃げられたからって八つ当たりはやめてよね」

マサルの言葉に私は噛み付くように言い返す。

私だって、あのデジモンから逃げられて悔しいんだから。

あのデジモンにもう一度会って、何が目的なのか。どうしてここにいるのかを知りたい。

「マスター、あれを」

私がそんな思いに耽っていると、ガオモンが、ある一点を指して言

った。そこには、デジタマ2つが、隠されて置いてあった。

「また……か。」

私はそつとつぶやく。あのデジモンは、他のデジモンをただ倒しているだけ。倒した後のデジタマは、すぐには見つからないように隠してある。

デジタマそのものが目的というわけではない。それに、デジタマが隠してあるっていうことは、少なくともデジモンを公にするつもりはないということ。

それならば、なぜ……？ あのだジモンの目的が分からない。

「……こちら、淑乃。C-38地区、デジタマ2つ発見しました。」

『了解。デジタマを回収して、本部に戻ってね』

首を振って、気持ちを切り替えて、本部に連絡を入れる。

その後、私たちは通信機からの指示通り、デジタマを回収してから、本部に戻ることにした。

【side 大地】

「昨日の夜、隣町のめだか銀行に強盗が入ったようです。おかしな

ことに何も盗まれていませんでしたが、犯人が近くにいるかもしれません。皆さん、気をつけてくださいね。」

ショートホームルーム
朝のSHRで、担任の先生からそう言われる。

銀行強盗ね……。

神珠は見つからないし、デジモンには襲われるし、この上普通の犯罪まで気にしていたら身がもたないよ。

昨日も神珠探しということで、町を歩き回っていたらデジモン2体に襲われた。

それなのに、今度は銀行強盗か。世の中って物騒だよな。

昨日倒したのはギザモンとガニモンの2体。両方成長期だったので、楽に倒せたが、その後のデジタマの処理が困った。

毎回、デジモンを倒した後のデジタマは、近くに隠しているのだが大丈夫なんだろうか？

後でこっそりと見に行くけど、そのときにはなくなっている。

きっと、DATSが回収しているのだろう。というより、そうだと信じたい。

まあ、あんな奇妙な卵を持ち帰ろうとする人なんているわけ無いよな。

ましてや、食べようとする人なんて……。

きっと大丈夫なはずだ。

「ふあゝ……。眠い……」

あくびをした俺は、机にうつぶせになってそのまま寝ることにした。

……授業中に起こされてしまったけど。

……

……

……

あっという間に退屈な授業も終わって、下校の時間となった。

何か買ってから帰るとしよう。

俺はそう考え、ゆっくりと商店街のある方へと歩き出した。

「今日は、魚が安かったな。焼き魚にして食べるとするか」

俺は買い物袋を手に持ちながらそうつぶやく。

『ダイチー。主婦みたい』

「うるせえ」

ディーアークの中にいるルナモンがからかってきたので俺はそっぽを向いた。

俺は、こう見えても多少料理ができる方だ。『アドベンチャー』の時、太一たちとデジタルワールドを冒険していた時にヤマトからいろいろと教えてもらったからな。

はじめは、調味料の量を間違ったりとひどいものだったが、今ではそれなりにおいしいものが作れると思っている。

「ただいまー」

俺は、家に帰るとまずルナモンをディーアークから出した。

いつも窮屈なんじゃないかと思っていたが、聞いてみると案外そうでもないらしい。

「じゃあ、飯作るからちょっと待ってるよ。……ん？ 何だこれ？」

俺は、ルナモンに声をかけると、玄関の横に大きなダンボールが置いてあることに気づいた。

箱には何も書いていない。

持ち上げてみると、それなりの重量がある。

「あけてみたら？」

ルナモンにそう言われて、俺は、不安になりながらもあけることに

した。

恐る恐るあけてみると、中に入っていたのは一台のパソコンと、一通の手紙だった。

俺は、まず、この手紙を読むことにした。

「元気にしておるか？　今まで、なんの連絡もしてやれんで、申し訳なく思う。しかし、あの神珠がないと、ワシ等の力もうまく発揮できないため、思うように連絡できないのじゃ。」

神珠はまだ見つかっていないようじゃが、慌てなくても良い。神珠が見つければ、その世界にいく前の時間に戻すことも可能だからの。

忘れておったが、パソコンを送ろうと思う。これがあれば、いつでもデジタルワールドに行くことができるからの。もしかしたら、神珠はデジタルワールドの方にあるのかもしれん。迷惑ばかりかけるが、がんばってくれ。

神より」

手紙は、あのじいさんからだった。

そういえば、ディーアークでデジタルワールドのゲートが開けるって言ってたっけ。

いろいろありすぎて、すっかり忘れていた。

「ルナモン、夕飯が終わったら、デジタルワールドに行ってみよう。何があるか分からないから必要なもの用意しといて」

「分かったー」

そして、俺は夕飯の準備を、ルナモンは、デジタルワールドに行くための準備を始めた。

.....

.....

.....

夕飯が終わり、俺とルナモンはパソコンの前に立っていた。

「この世界のデジタルワールドってどんな感じなのかな？」

「さあね。何があるか分からないから気をつけようぜ」

俺とルナモンは期待に満ちた表情でお互いを見る。

「よし、行くぞ！ デジタルゲート、オープン！」

俺がデューアークをパソコンの画面に向け、そういうと、画面がまばゆく光りだした。

（選ばれし子供達、出勤！）

そんな空耳が聞こえた気がした。この台詞は『アドベンチャー02』の時、京が言っていたものだ。今では懐かしくさえ思う。

眩い光に包まれて、目を開くと、そこは広い草原のようだった。

辺りを見回すと、ツノモンやタネモンたちが移動しているのが見えた。

「ここがこの世界のデジタルワールドか」

俺はそうつぶやいた。

今までの世界とも違う、新しい世界。なんだか、わくわくしてきた。

「ダイチー、う、後ろ！」

ルナモンが、俺の服を引っ張ってそういった。

人がせつかくこのデジタルワールドを眺めてたつて言うのに。

「どうした？ モノクロモンの群れでもいたのか？」

俺はルナモンに、そういった。『ティマーズ』のデジタルワールドの冒険で、皆と逸れた時、ルナモンはモノクロモンに追い掛け回されたことがある。それ以来、ルナモンはモノクロモンを見ると、逃げ出すようになった。

俺は、笑いながら後ろを振り返った。

「お前、誰だ？」

後ろを振り返った俺が見たものは、大門マサルと、アグモンの姿だ

つ
た。

なんで二人がデジタルワールドにいるんだよ!?

第5話 電子世界（後書き）

ここら辺は、あまり修正する箇所が少なく、以前の作品を読んだことがある人にとってはつまらないかも知れません。

しばらくは、前作と変化が少ない話が続くかと思われます。
申し訳ありませんが、お付き合いいただけたら幸いです。

第6話 初会話

なんで、マサルがデジタルワールドに？

「あ……あの……」

俺は、驚きでうまく言葉が出なかった。

「ん？ ああ、悪いな。なんか驚かせちゃったみたいで。俺は、大門マサルだ。こっちは子分のアグモン」

「よろしくな！」

俺が、口をパクパクさせていたら、マサルは自己紹介をしてきた。

俺は、深呼吸をして、一旦落ち着く。そして、こっちも自己紹介を返した。

「俺は、菅原大地です。それで、こっちはルナモンです。」

「よろしくー」

一応丁寧な言葉で話す。精神年齢はこっちの方が上だと思うけど、肉体は小学生だしな。

怪しまれないように気を付ける。

俺らが挨拶すると、マサルは、首をかしげた。

「ん？ お前らってパートナーなのか？」

「はい。 そんなところです。」

「ってことは、お前らもDATSの関係者なのか？」

「い、いえ。 違いますが……」

俺が、そう答えると、マサルは腕を組んで何か考えてはじめた。

まずい。 何か怪しまれているような気がする。

まあ、自分で言うのもなんだけど、こんなところに人間が居たらおかしいもんな。

ここは、話題を変えてごまかそう。

「あの……マサルさんは、なぜここに？」

俺が尋ねると、マサルは首をこちらに向けて

「俺か？ 俺は、ドリモゲモンを追ってるんだ」

と答えた。

ドリモゲモンって、あのモグラみたいなデジモンだよな？

俺が詳しく話を聞いてみた。

隣の銀行に強盗が現れ、そこに偶然デジタルゲートが開いて、ド

リモゲモンが現れてしまったらしい。

強盗は、ドリモゲモンをつれて逃げようとした。

DATSのメンバーは、当然、ドリモゲモンを捕獲しようとしたんだが、あと一步のところで、トーマに邪魔されてドリモゲモンを逃がしてしまった。

強盗の方は捕まえたのだが、ドリモゲモンは、再度、偶然開いたデジタルゲートから、こっちのデジタルワールドに逃げ込んでしまった。

マサルは、無理やり淑乃さんに頼んで、このデジタルワールドへのゲートを開いてもらったらしい。

トーマって誰と思ったけど、あのガオモンのパートナーのことらしい。

「いけ好かない野郎だ。俺よりも先にデジタルワールドに来たみたいだが、あの獲物は絶対渡さねえ」

マサルは、不機嫌そうにそう言ってそっぽを向く。

「でもよ、アニキ。淑乃からトーマを探せって言われてなかったか？」

「ほつとけ。あいつはあいつでなんとかやってるだろ」

それで、いいのか？ とも思ったが、俺が突っ込むことじゃないし、気にしないことにしよう。

それよりも、問題なのは、マサルに見つかってしまったということだ。

今まで、DATSには見つからないようにと気をつけていたんだが、それも限界。

あきらめよう。DATSに見つかったら、いけないって訳じゃないし。ただあまり関わりたくなかっただけだ。

まあ、それもマサルに見つかった時点でもうだめなんだろうけど。

「じゃあよ。ダイチはどうしてデジタルワールドにいるんだ？」

俺がそんなことを考えていると、今度はマサルから聞き返された。

「え、えつと……。パソコンを触ってたらゲートが開いて……」

俺は、内心あせりながらそう答えた。

嘘じゃない。開いてっていうより、自分で開けたんだけどさ。

「それならどこかに行くって訳じゃないんだよな？」

マサルがそう聞いてきたのでうなづく。

神珠を探さないといけないんだけど、どこにあるのか分からない訳だしな。

「じゃあよ、俺らと一緒に来ないか？」

……………え？

【side マサル】

大地って言ったっけ。

一目見たときはデジモンかと思ったけど、どう見ても人間だ。

年はだいたい知香と同じくらいで、ルナモンっていうパートナーを連れていた。

ルナモンの、色合いから、あのウサギ野郎のことを思い出すが、あいつはこんなに小さくない。

それに、ここはデジタルワールドだ。あいつが居るわけがない。

俺がそんなことを考えていると、大地からここにいる理由を聞かれたので答える。

答えながら、俺の目的を思い出した。

淑乃から言われた制限時間もあるしな。急がねえと。

……でも、こいつはどうするんだ？

大体、見た目知香と同じくらいだし、小学生だろう。

パートナーが居るからって、何が起るか分からないデジタルワ

ルドに一人で大丈夫なんだろうか？

俺は疑問に思い、ここにいる理由を聞き返す。

大地は、別にどこかに行こうとしているわけじゃないらしい。

ルナモンもなんだか弱そうだし、一人にするのは不安だ。

それならばと、俺は、大地と一緒に来ないかと誘ってみた。

大地は、しばらくの間、首を捻って悩んでいたようだが、顔を上げ、そして頷いた。

.....

.....

.....

【side 大地】

マサルと一緒に来ないかと誘われたときは、どうしようかと戸惑った。

でも、よく考えれば、マサルに答えたとおり俺に目的地があるわけでもない。

ただ、なんとなくこのデジタルワールドを見てみたいと思ったただけだ。

まあ、神珠はついで見つかったらラッキーというくらいにしか考えていない。

それならば、マサルたちについて行っても別に構わないじゃないか。

俺は、そう考え、しばらくの間、マサルとアグモンと一緒に行動することにした。

俺たちは、現在、山岳地帯を歩いている。

「何もかも、めちゃくちゃだな」

マサルは、そうつぶやいた。

宙に浮く岩見たらまあ、そう思うよな。

まあ俺は、砂浜の電話ボックスとか他の世界のデジタルワールドで見てるから、あまり驚かないんだけども。

「俺たちの世界とは別なんですし、常識が通じなくても仕方ないんじゃないですか？」

マサルのつぶやきにそう返す。

マサルは足をとめ、こちらを振り向いた。どこか不満そうな顔だ。

「なあ、それ止めねえか？」

「はい？」

「そのしゃべり方だよ。どうも丁寧な言葉で話されるとくすぐったくて仕方ねえ。普段通りの話し方でいいぞ。ついでにさんづけも無しな」

マサルは、笑ってそういった。

こっちとしてもマサルのこの申し出は助かる。あまり敬語とか得意じゃないし、いちいち話し方に気を付けなくても済むし。

「分かったよ。これでいいかな？」

「おう」

マサルは満足そうにうなづいて、俺の頭を撫でてきた。……やっぱり、小学生として見られるのって辛いなあ。

「アニキ、何か来る！」

「ダイチも気を付けて！ 上から来るよ！」

俺がマサルに頭を撫でられて、遠い目をしていると、アゲモンとルナモンが大きな声で叫んだ。

俺たちは、その声に反応し、上を見るとドリモゲモンが降ってきて地面に突き刺さった。

「は？」

俺たちが呆然としているとドリモゲモンはそのまま地面に潜っていた。

「あ、逃げた・・・」

「逃げたね」

「っておいこら。待ちやがれ！」

はつとしたマサルはその後を追いかけた。俺とルナモンもその後が続くことにした。

俺たちはドリモゲモンが掘ったトンネルをたどっていくと広い空間に出た。

マサルとアゲモンがドリモゲモンに殴りかかるうとするが、ドリモゲモンは地面にもぐっては顔をだして翻弄する。

「なんか、もぐら叩きみたいー」

隣にいたルナモンがそういった。

うん、確かにもぐら叩きだ。ここは地面の下だし、圧倒的にドリモゲモンが有利だ。

俺も手伝うかと思った瞬間、ドリモゲモンは不敵な笑みを浮かべ、

地面を激しく叩きだした。

あたり一面が激しく揺れ、地面に亀裂が走る。

「ダイチー、マサルとアグモンが落ちちゃったよ!」

ルナモンが俺にしがみついてそう言った。だが、こっちも地震のせいで動けない。

地震が収まると、ドリモゲモンはどこかへ去ってしまった。

俺はマサルが落ちた亀裂に近づいた。

「マサルー、大丈夫ー?」

呼んでみたが返事がない。この亀裂もそうとう深そうだ。

「マサルとアグモン、大丈夫かな?大怪我してたらどうしよう・・・」

ルナモンが心配そうにそう言った。

別に、俺たちはドリモゲモンに用があるって訳でもない。

「ルナモン、この亀裂の下まで降りるぞ」

「うん!」

俺はそういつて、「白い羽」を使ってゆっくりと降りていった。

.....
.....
.....

地面までつくところには誰もいなかった。

どうやら、マサルたちは、トンネルの奥に進んだようだ。

動けないほどの怪我をしているわけではないと分かって安心した。

しかし、マサルなら多少の怪我でも無理をして移動するかもしれない。

「ダイチ、向こうの方から話し声が聞こえる。」

おそらくマサルたちだろう。俺たちはマサルたちと合流するためにトンネルの奥へと歩き出した。

【side マサル】

ドリモゲモンの罠にはまって亀裂に落ちてしまった俺とアグモンはそこで、トーマとガオモンに出会った。

トーマたちも落ちてしまったようだ。初めはトーマをからかっていたが、そんなことをしている場合じゃないことに気付く。

早くここから抜け出して、ドリモゲモンの野郎をぶっ飛ばしてやら

ねえとな！

トーマは落ちたときに足を怪我してしまったようだ。俺は肩を貸してやる。

「男には意地を張る前にやんなきゃなんねえもんがあんだよ。まずはここから出る。すべてはそれからだ！」

意地を張って俺から離れようとしたトーマに俺はそういった。

そう、今は意地を張っている場合じゃない。このトンネルから抜け出さなければ。

上の方で別れたダイチたちも心配だしな。

俺たちはトンネルの奥へと歩き出した。

歩いても歩いても出口にたどり着きそうにない。

トーマの話ではドリモゲモンが無数に掘った穴が天然の迷路になっているそうだ。

ガオモン進化させて脱出する案を提案したが、

無数にある穴のせいで地盤がゆるくなっているため、進化をすれば落盤が起きる可能性もあり危険だといわれた。

地道に歩いて、脱出するしか手はないらしい。

「また分かれ道か……」

これで何度目か分からないが、分かれ道についた。

俺は左を主張するのに対し、トーマは右を主張する。

「なんでだよ？」

「君と一緒にするな、闇雲に進んでもここは抜けられない。」

「だから何で」

「あれを見る」

トーマが指さした先にあったのは100円玉。トーマが落としたらしい。

つまり、ここは一度通った道だそうだ。

「へえ、お前、結構賢いな」

「言ったはずだ、君と一緒にするな」

最後には嫌味を言う始末。やっぱりこいつとは馬が合いそうにない。

「マスター、何か来ます！」

ガオモンが叫んだ。100円玉をおいてある道のほうからのようだ。
何か物音がする。

「ドリモゲモンか!？」

俺たちはその場で戦闘態勢に入る。

物音が近づくにつれ、警戒が強くなる。

何か影から出てくる。俺らはすぐに攻撃できるように構えたんだが……

「やっと見つけたよ、マサル」

陰から出てきたのは、さきほど亀裂から落ちたときに別れた大地とルナモンだった。

第7話 共闘

【side 大地】

マサルは俺らの姿を確認すると、駆け寄ってきた。

「お、お前、大地じゃねえか。お前らまで落ちちまったのか？」

「いや、俺らは、ゆつくりと降りてここまできたんだ。」

「そうか。お前らと逸れちまったんで、心配してたんだ。ああ、トーマ、こいつは大地っていうんだ。」

トーマは、俺の方をみて、啞然としていたが、マサルの言葉ではっとして駆け寄ってくる。

「マサル、この子は誰だ？ まさか君が連れてきたのか？ ただの一般人を、それもまだ小学生くらいの年齢じゃないか！」

トーマはマサルに噛み付くように言った。

「名前ならさっき言っただろ。それに俺が連れてきたわけじゃねえよ。ここに落ちる前に草原で会ったんだ」

「一般人がデジタルワールドに来れるわけないだろ！」

「現に今来てるだろうが。俺だって驚いたんだぜ。パートナーもい

るからDATSのメンバーかと思ったたら違っつて言うしよ！」

「パートナーだって!？」

トーマは、マサルと言い争っていたが、パートナーという言葉聞き、こちらの方を振り向いた。

俺は、ルナモンの頭に手をのせて挨拶をする。

「えっと、菅原大地です。そして、こいつがパートナーのルナモンです。」

「……トーマ・H・ノルシュタインだ。こっちは僕のパートナーのガオモンだ。早速だが、君はどうやってデジタルワールドに来たんだい？」

「なあ、そんなことは後にしろよ。まずはこの洞窟を抜けようぜ」

「……そうだな。」

トーマがそういうと、マサルはトーマのところに近づき、肩を貸した。

そこで俺は、トーマの膝から血が出ていることに気がついた。

「トーマさん、血が出てるじゃないですか。ちょっと待っててください。」

俺は、持ってきたリュックから、消毒液と包帯を取り出して、応急処置を施した。

「……すまない。礼を言う」

応急処置が終わると、トーマは俺に礼を言ってくれた。まだ俺のことを疑っているような目ではあったけど。

マサルとは違って、慎重派な人だと思った。太一とヤマトの関係にも似たようなものを感じる。

あの二人もよく喧嘩してたし。

太一とヤマトは喧嘩もするが、親友でもある。この二人もいつかきつとうまくいくだろう。

「大地、なにボーっとしてるんだよ。早く行こうぜ」

俺がそんなことを考えていると、マサルから声をかけられた。

俺は頷いて、応急処置に使ったものをリュックの中にしまい、マサルたちの後についていった。

移動中、トーマからはいろんなことを聞かれた。

言えない部分も多く、嘘を交えながら答える。信じてくれたかは分からないけど。

……
……

……

しばらく洞窟内を進んでいくと、大きな空間がある場所に出た。

しかし、下の方の地面までは距離があり、降りられそうにない。

どうするかと考えていると、下の方からドリモゲモンが出てくるのが見えた。

静かに引き返そうとするトーマと、真っ向から対峙しようとするマサル。

俺もここで戦うのは得策ではないと思う。

進化すれば、地盤が崩れる可能性が高い。かといって、進化しないでドリモゲモンに勝つのは不可能だ。

トーマはそう主張して、なんとかマサルをとめようとするが、マサルは聞く耳を持たない。

それどころか、俺とトーマの腕をつかみ、

「俺は逃げも隠れもしねえ！ 男なら真っ向勝負、まずは行動あるのみだ！！」

そう叫んで飛び降りた。必然的に俺らも落ちることになる。

「うわああああ……」

地面に衝突するかと思ったが、ドリモゲモンのやわらかい毛皮に受

け止められたようだ。

助かった……

ルナモンたち、デジモン組も後を追ってドリモゲモンの背中に着地する。

「しっかり捕まっているよ」

「何をするつもりだ。マサル！」

マサルは、ドリモゲモンの頭の方へとよじ登る。

背中にのっていることに気づいたドリモゲモンは暴れ出し、壁に向かって走り出した。

マサルは、ドリモゲモンの頭の毛をぐいと引っ張って上を向かせた。

当然、ドリモゲモンの進路が変わって穴を掘りつつ上へと進んでいく。

しばらく進むと、ドリモゲモンは地上へ飛び出した

「マスター、今のうちに飛び降りよう」

「いや、待て！」

ガオモンが降りて戦うことを提案するが、マサルが止めた。

マサルはドリモゲモンを巧みに操って、どこかへ誘導しているようだった。

時折ドリモゲモンは地面にもぐろうとするが、マサルに引っ張られるため、逃げるに逃げられない。

「どこへ行くつもりだ！」

「戦う場所を考えろって言ったのはお前だろ」

「俺、もう手が限界なんだけど・・・」

上からトーマ、マサル、俺の順だ。

「もう少しだ、大地。見ろよ、それっぽい場所があるじゃねえか」

前を見ると、コロシウムっぽいような建物が見えた。

建物の中に入って、俺たちはドリモゲモンから飛び降りた。

「なるほど、これならドリモゲモンは土の中に逃げられない」

「マサルの無謀な行動もちゃんと考えていたんだな。」

トーマはつぶやき、俺はマサルに感心した。ただの無鉄砲だと思っ

ていたのに。

「へっ！ あとは、こいつを倒すだけだ」

マサルはそう言ってドリモゲモンを殴ってデジソウルをチャージする。

トーマも同じだ。

「アゲモン進化！ ジオグレイモン！！」

「ガオモン進化！ ガオガモン！！」

「俺たちも行くぞ！」

「うん！」

俺はカードを一枚取り出して、一旦前を見た。

なんだか、ドリモゲモンの様子がおかしい。

「まさか、進化するつもりか！？」

トーマが驚きの声を発した瞬間、ドリモゲモンはディゲモンへと進化した。

「へ？ ディゲモン？ 確かアーマー体だったはずだけど……」

アーマー体は、大体成熟期と同じくらいの強さだったから、これは進化といえるんだろうか？

そもそも、デジメンタルなしで進化するなんて……

もしかして、この世界では、デジメンタルなしでアーマー体に進化できるのかな？

「>メガフレイルム<！」

「>スパイラルブロー<！」

ジオグレイモンたちの必殺技の衝撃で、はっと我にかえった。

考え事をしてて、目の前のことをすっかり忘れていたようだ。

ディグモンは、2体の攻撃を受けてもほとんどダメージが無いようだった。

その後、何度か攻撃を仕掛けるが、ディグモンの素早い機動力で避けられている。

「ダイチ、僕たちも行こう。」

俺は、ルナモンの言葉にうなずいて、手に持っていたカードをディアークに通した。

「>カードスラッシュ<！ 超進化プラグインS!!！」

「ルナモン進化！ レキシモン!!！」

レキシモンはディグモンと対峙して、両手を前へと突き出した。

「>ムーンナイトボム<！」

レキシモンの攻撃を跳んで避けたディグモンは、そのまま攻撃へと移った。

素早さならレキシモンだって負けていない。ディグモンの攻撃は難なく避けることができた。

「な！？ こいつは……」

マサルたちが驚いている声が聞こえた。

「おい、ダイチ……お前のそのデジモンは……」

「マサル、その話は後にするんだ。今はディグモンを倒すことだけに集中するんだ」

マサルは、こっちに駆け寄ろうとするが、トーマに止められる。

トーマはそのまま、何かをマサルに話しているようだ。

「ジオグレイモン」

「ガオガモン」

「戻れ!!」

二人の話が終わると、二人はそれぞれのパートナーを呼ぶ。

二人のパートナーは、それぞれ、技を打ち出す構えを取っている。

(……それなら俺は)

「レキシモン！」

俺は、レキシモンに声をかける。レキシモンは、こちらを向くと、頷いて一本の矢を取り出す。

「>ティアアロー<!!」

レキシモンが放った矢を、ディグモンは跳んで避けた。狙い通りだ。これでディグモンに隙ができる。

「今だ!!」

「>メガフレイム<!!」

「>スパイラルブロー<!!」

マサルとトーマの声にあわせて同時に攻撃を繰り出す2体。

2体の攻撃は、融合して、炎の竜巻となった。

ディグモンも空中では避けることはできない。その攻撃に巻き込まれ、デジタマへと戻っていった。

「やったね。ダイチ」

「ああ。」

俺とルナモンは、この勝利を喜ぶ。マサルたちも向こうで喜んでい
るようだった。

これで、マサルたちの用事は終わったってことだ。

俺たちにも、神珠を探さないといけないって使命があるし、ここで
ずっと喜んでいる暇はない。

「マサルー、俺たちもう行くねー」

俺は、マサルに呼びかける。しかし、マサルたちは、先ほどの合体
技などの興奮もあるのか、勝利の喜びで全然こちらを見向きもしな
い。

「……まあ、いつか」

仕方ない、このまま分かれよう。俺は、そう思って、マサルたちに
別れの挨拶も告げずに、コロシアムのような建物から出て行った。

【side マサル】

俺とトーマは、DATSに帰ってきた。隊長には散々怒られてしまったが。

「マサル」

淑乃が俺のことを呼ぶ。

「私たち、ドリモゲモンが進化するところから見ただけど、マサルたちともドリモゲモンとも違うデジモンを1匹確認したの。あれって何だったの？」

「ああ、そのことで隊長、お話があります。」

俺が淑乃に答えようとしたとき、トーマが隊長に声をかけていた。

「私たちはデジタルワールドで、一人の少年に出会いました。」

「デジタルワールドに人間だと？　どういうことだ」

「彼は菅原大地と名乗っていました。年は10歳前後でしょうか。ルナモンというデジモンと共に行動しており、ディグモンとの戦いではそのルナモンをレクスモンというデジモンに進化させました」

「あのウサギ野郎だったんだ」

トーマの言葉に俺は継ぎ足して説明する。

「なんだと？　あのデジモンにパートナーがいたというのか!？」

クダモンが驚いた声をあげる。

「彼は、ルナモンのことをパートナーと言っていた事は確かです。デジタルワールドに来たのはパソコンをいじっていたらゲートが開いてしまったからだと言っていました。さらに、彼がルナモンを進化させるのに使ったものは私たちが使っているデジヴァイスとは異なる形状をしていました。」

「それは本当なのか？」

「たまたまデジタルゲートが開いてしまったというのは信じがたいことですが、それ以外は事実です。僕だけでなく、マサルも確認しています」

「おう、確かにこの目でみたぜ。見間違っわけがねえ」

「あの後、こちらに連れてこようと思いましたが、いつの間にかいなくなっており、約束の時間が近づいてしまったため、連れてくることができませんでした。申し訳ありません。」

そういつてトーマは頭を下げる。

俺とトーマの言葉に、隊長は黙って考えているようだ。

しばらくして、大きく頷いてオペレータの一人に言った。

「分かった。黒崎、お前はデジタルワールドで例のデジモン、レキスモンの反応を探せ。」

「了解しました」

その後、俺たちを見て

「マサル、トーマ。お前たちはその少年の情報について調べるのだ。デジモンのほうは確認できているが、その少年について確認できたのはお前たちだけだからな」

と言った。

「了解しました」

「分かったぜ」

俺とトーマは返事をする顔を見合わせた。おそらく考えているのは同じで、大地のことだろう。

偶然開いたとかいうデジタルゲートから無事に帰れたのだろうか？

第8話 勧誘（前書き）

タイトルつけてみました。

が、ピッタリのタイトルを考えるのって難しいですね。
あまり、つまらないでいただけるとうれしいです。

第8話 勧誘

【side 大地】

初めてデジタルワールドに行ってから1週間が過ぎた。

結局、神珠についての情報はまったく得られなかった。

あれからも、こっちの現実世界と、デジタルワールドリアルワールドの両方で神珠探しを行っているが、これといって有力な情報は得られなかった。

デジタルワールドでは、いろんなデジモンに会った。

俺を見たときのデジモンの反応は大きく分けて、好奇か嫌悪の2つだ。

嫌悪の目で見ていたデジモンの中には、俺を襲ってくるデジモンもいた。

「傲慢な人間が！」

とか、人間そのものに恨みがあるような言い方をされて戸惑ってしまった。

戦ってもよかつただけど、別に暗黒デジモンって訳でもないし、戦う理由が無い。

俺は、『エイリアス』のカードで分身を作り、その隙に逃げた。

(……あれは何だったんだろうな。デジモンにもいろいろいるから仕方ないのかもしれないけど。恨まれるようなことをした覚えはないんだけどな)

俺は、学校にいる間、ボーっとそんなことを考えていた。

………

………

………

下校の時間となった。教室を見渡すと、おしゃべりをしている人、部活の準備をしている人、帰ろうとしている人など、さまざまな人がいる。

いつもなら、仲がいい友人と一緒に帰るのだが、今日は皆用事があるようだ。

仕方なく、俺は一人で帰ることにした。

学校の玄関を出たところで、校門前に高級そうな黒い車が止まっているのが見えた。

(……なんだあれ?)

俺は、気になったが、無視して通り抜けようとする。

その高そうな車の側を通ったとき、急に車の窓が開いた。

「大地君だったね。デジタルワールドであって以来かな？　一緒に来てくれるかい？」

窓から顔を覗かせたのは、トーマだった。DATSの仕事で来たのだろう。

疑問系で聞かれたけど、断れる雰囲気ではなかった。

俺は、戸惑いつつもうなずいて車に乗る。

パートナーは連れているのか聞かれたので、うなずくと出すように言われた。

「ルナモン、リアライズ」

俺は、ディークを取り出して、ルナモンをディークから出した。

「ダイチ……」

ルナモンは、不安そうな顔でこちらを見上げてくる。

俺は、ルナモンを安心させるために頭を撫でた。

トーマは、俺がルナモンを外に出したのを確認すると、運転手に車を発進させるように言った。

「菅原大地。8月12日生まれ。血液型はA型。両親共に1年前に亡くなっており、頼れる親戚もない。現在は、父が残した家に引越し、一人暮らしをしながら小学校に通っている」

トーマは、車が発進すると、助手席で淡々と書類を読んだ。

よくもまあ、ここまで調べたものだ。プライバシーの欠片もない。

DATSが秘密組織だったのは知ってたし、調べるのは簡単だったのかもしれないけど。

（両親……か）

トーマは1年前に亡くなっていると言っていたが、それは嘘だ。多分、元の世界で生きている。

俺もよくは知らなかったが、おそらく神が俺の戸籍や、小学校への手続きを行う際にそういう風に手回しをしていたのだろう。

しかし、今会えないことに変わりはない。『アドベンチャー』『テイマーズ』と冒険して、もう5年くらいになる。

実際、元の世界ではそこまでの時間は経ってないのだが、寂しいと思うことは何度もあった。

ルナモンがいたからなんとか耐えられてきたが、もし、いなかったら・・・なんて考えたくもない。

「ついたよ」

トーマに呼ばれて、俺はふと顔を上げた。

D A T S についたようだ。

車を降りて辺りを見回す。目の前には、立派な建物があり、近くには海も見える。

この建物がD A T Sの本部なんだろう。

「ついてきて。」

トーマに言われるままについていく。

通路を一つ一つのドアをくぐると、大きなコンピュータがおりてある部屋に着いた。

「隊長。重要参考人、菅原大地とそのパートナー、ルナモンを連れてきました。」

「うむ、じくろっ。」

トーマは、サングラスをかけた、大柄な男の人に敬礼をしている。

会話の内容から察するに、この人がDATSの隊長なんだろう。なんというか、怖そうな人だ。

「あら？君は・・・」

声がして、そちらを振り向くと淑乃さんがいた。

「淑乃、知りあいか？」

「知りあいというか……ラプター1、アグモンを捕まえようとしていたところに会った少年です。記憶処理を行っていなかったのを探していたのですが、まさかパートナーを持っていたなんて……。」

隊長の問いに淑乃さんが答える。

「ふむ、ついてきなさい。」

隊長がこちらを向いてそう言い、部屋をでていく。俺はそれについて部屋をでた

着いた場所は応接室のようなところだ。

座るように言われたので、隊長の向かいに腰をかける。

「まずは、自己紹介だな。DATSの隊長の薩摩だ。こっちは私のパートナーのクダモンだ」

「菅原大地です。こっちはルナモンで、俺のパートナーです。」

「よろしくー」

向こうの自己紹介に、こちらも返す。

クダモン……初めてみるデジモンだ。俺はいつもの癖で、ディークをクダモンへと向けた。

『クダモン 成長期 聖獣型 ワクチン種』

必殺技はピアスから発する大きな輝きで目を眩ます>絶光衝<』

「その情報は!？」

顔を上げると、隊長、いや薩摩さんとクダモンが驚いた顔をしている。

しまった……いつもの癖で……

この世界のデジヴァイスと俺のディークは違うから、怪しまれるかも……

「ふむ。トーマから我々と違うデジヴァイスを持っているという報告は受けていたが、デジモンの情報を読み取る機能があるとは……。少し、見せてもらえないだろうか？」

俺の心配していたことはどうやら杞憂だったらしい。

俺は内心ほっとしながら、頷いて薩摩さんにディークを渡した。

薩摩さんはディーアークをいろんな角度から眺めていたが、満足したのか、俺にディーアークを返してくれた。

「ありがとう。さて、君にはいろいろと聞きたいことがある。」

どうやら、ここからが本題のようだ。

薩摩さんの雰囲気がすこし変わる。俺はその雰囲気にのまれ、姿勢を正した。

「まずは、そのデジモン、ルナモンにあったのはいつ頃だろうか？」

「えっと……。大体5年前になります。」

「デジヴァイスもその時に手に入れたのか？」

俺はうなずく。

ふむ……。と隊長はあごに手をやり、何かを考えているようだった。

ルナモンはいつ進化できるようになったのか？ どこでデジヴァイスを手に入れたのか？ などいろんなことを聞かれた。

さすがに、別の世界のことについては話さなかったが、俺は、ある程度正直に答えた。

なんか、この人に嘘をついてもすぐにばれる。そんな気がしたからだ。

「では、次だ。最近、この辺に突如現れたデジモンをウサギ型のデジモンが倒している。君のデジモンだね？」

俺は頷く。

「では、何が目的だ？」

「……別に目的があつて倒しているわけではないです。ただ、人間界でデジモンが暴れるのは危険だと思ったから倒していただけです。」

「そうか。なら、最後の質問だ。大地、DATSに入らないか？」

最後の質問と聞いて安堵した俺は次の言葉に驚いた。

「大地とルナモンの強さはこちらとしても戦力になる。どうだろうか？」

「え、ちょっと待ってください。いきなりそんなこと言われても困ります。」

「デジモンをパートナーに持つ者はDATSに入らなければならない。もし拒否するようならデジモンはデジタルワールドに還す規則がある。」

俺が戸惑っていると、クダモンがそうやってきた。

俺は驚いて、薩摩さんの顔を見ると、薩摩さんは頷いた。

「大地、そう慌てずとも良い。ルナモンとは5年間も一緒に過ごしていたのだろう。そこでいきなり離れるというのも酷な話だ。しばらくの猶予を与えよう」

薩摩さんはそういつて、部屋から出て行った。

DATSに入る……か。

俺は今までいった世界のことを考えていた。『アドベンチャー』『ティマーズ』……

これらの世界では、どんなことが起こるということをアニメを通して知っていた。

そのため、どう行動すればいいのか？ ということも分かった。

でも、この世界は違う。分かっているのは『セイバーズ』というアニメの世界ということだけだ。

何が起こるか分からない。つまり、どう行動すればいいのか分からないということだ。

DATSに入れば、おそらく前線でデジモンと戦うことになるだろ

う。

その結果、あらかじめ存在している原作が壊れたら……

ハッピーエンドで終わるはずだったものがバッドエンドになってしまったら……

「ダイチ……」

ルナモンは、俺に何かを言おうと口を開くがすぐに閉じてしまった。

（俺はどうすればいいんだろうか……）

俺が、応接室で一人、自問自答していると、薩摩さんが戻ってきた。

「ひとつ言い忘れていた。大地、しばらく猶予を与えろといったが、君はデジモンを持っている。だから、しばらく監視する必要があるのだ。そのために、君には毎日DATS本部に顔を出してもらったことになるのだが、問題はないだろうか？」

「あ……はい。……大丈夫です……」

「今すぐ答えを出す必要はない。まだ時間はあるのだ。じっくりと考えればいい」

俺が考え込んで暗い顔をしていたのがばれたのだろう。

薩摩さんは、そういつて笑みを浮かべた。

自然と自分にも笑みが浮かぶ。なんとなくか安心した。

見かけは少し怖いが、優しい人のようだ。

俺は、その後、薩摩さんについていき、先ほどの大きなコンピューターがある部屋まで戻った。

第8話 勧誘（後書き）

次の更新は1週間後になります。

第9話 喧嘩

【side トーマ】

出て行った隊長が戻ってきた。大地君も一緒だ。

大地君は、どこか元気がないようだったが。ルナモンも大地君を見上げては心配そうな顔をしている。

「この少年、大地に関しては、しばらく様子を見ることになった。DATSに勧誘してみたが、入るかどうかは本人次第ということになっている。しばらくは、監視という形で、DATSに毎日来てもらうことになった。皆もよろしくやってくれ。」

隊長は、この場にいる皆に聞こえるように話した。

「隊長、僕は彼がDATSに入隊するのは反対です。彼はまだ10歳じゃないですか。それなのに、危険なデジモンとの戦いに参加させるというのですか？」

僕は、隊長の発言に反対する。それに対して、隊長は

「確かに、危険といわれればその通りだ。しかし、トーマ。お前らもデイグモンとの戦いでは彼に助けてもらったのだらう？ 戦力と考えるには充分だ。」

「し、しかし……」

「それにだ。彼らが出会ったのは約5年前だそう。今までDATSに見つからなかったことから信じがたいが、彼らの友好関係から考えても、それも本当の事なんだろう。さらに、彼は1年前に両親を亡くし、一人暮らしをしている。つまり彼にとって、ルナモンは、パートナーでもあり、唯一の家族でもあるわけだ。DATSに入れば、彼らを離す必要もなくなる。」

隊長は、そこまで言って、おいてあるお茶を飲む。

僕は、大地君の方を見た。大地君は、戻ってきてからずっと元気がないように見えるが、ルナモンがなんとか励まそうと頑張っている。確かに、大地君とルナモンの絆はすごい。それは、デイグモンとの戦いを見ても分かることだ。彼らは目と目で意思疎通が行えていた。もしかすると、あの絆は僕とガオモン以外かもしれない。

DATSに所属しないデジモンはデジタルワールドに送り返すのが規則だ。

でも、もしたら、大地君は一人ぼっちになってしまう。

それを理解した僕は、これ以上、隊長に反論することはできなかった。

.....
.....
.....

【side 大地】

あーもうだめだな。しっかりしないと。

俺はそう思っで両手で頬を軽く叩く。

悩んでいるのはとりあえず止めよう。薩摩さんも、今すぐ返事を出す必要はないって言うてくれるし。

「大丈夫？」

声がしたので、顔を上げる。そこには淑乃さんとララモンの姿があった。

「はい。もう平気です。心配かけました。」

「そう、それならいいけど。まさか君がああウサギのデジモンのパートナーだったなんてね。あ、私は藤枝淑乃。こっちはパートナーのララモンよ。」

向こうは、しみじみとそういったあと、自己紹介をする。

もう、こっちの名前は知っているだろうけど、こっちも自己紹介で返した。

その後、他のメンバーについても紹介してもらい、いろんなことを話した。

ルナモンも、この世界でのデジモンの友達は初めてなので、いろいろ

ると楽しそうに話している。

「ところでさ、なんでアグモンはデジヴァイスに入ってたままなの？」

俺は、ララモン、ルナモン、ガオモンとデジヴァイスに入った状態のアグモンが話している方向を見てそう聞いた。

DATS内で見られて困ることもないんだし、外に出ればいいのに。

俺が淑乃さんに尋ねると、淑乃さんは苦笑する。

「ただの意地よ。」

どういふことかと聞けば、マサルと喧嘩したらしい。なんでも、喧嘩の発端は、マサルの母親が作った卵焼きの取り合いだとか。

その後、お互いに売り言葉に買い言葉で引つ込みがつかなくなっている状態とのこと。

卵焼き一個で……、なんというか大人気ないと思う。

俺も何度かルナモンと喧嘩したことはあるが、少ししたら寂しがりやのルナモンの方から謝ってくる。俺も、その頃には、頭も冷えて自分の非も分かるので、謝る。これで仲直りだ。

淑乃さんの話では、アグモンは、マサルが謝ってくるまでデジヴァイスから出ないって決めているらしい。

なるほど、確かにただの意地だな。

マサルも、アグモンもデジタルワールドで少し話した程度だが、似たような性格だということは良く分かる。

アグモンがこの状態ってことは、マサルも同じなんだろう。それで、頭にきて、出て行ったと。

「マスターとの喧嘩。デジヴァイスへの引きこもり。分析できないことばかりだ。」

「ガオモンは喧嘩しないの？私なんか毎日よ」

「毎日じゃないけど、僕もダイチとよく喧嘩するよー」

デジモン組が楽しそうに話しているのが聞こえ、そちらの方を向く。

「興味深いな、喧嘩の原因を教えてください。」

「淑乃はいつもだらしないのよ。部屋片付けないし、洗濯物はたたまないし」

「ダイチだって、部屋は片付けるけど、すぐに散らかすし」

こっちが聞いてないと思ってるのか、人のプライベートをぺらぺらと話す二人。

俺と淑乃さんは顔を見合わせ、楽しそうに会話している二人に近づく。

「他にも淑乃は、寝相だつて悪いんだから。」

「ダイチなんて、料理で失敗したものは全部僕の皿に乗せるんだよ」

二人は俺らが近づくのになんとも気づかない。

唯一俺らの方を向いていたガオモンは気づいて、こちらを振り向く。

俺らが怒っていることに気づいたガオモンは、焦って二人を止めようとするが遅かった。

淑乃さんは、ララモンを手で挟んで押しつぶし、俺は、足で思いっきりルナモンを踏みつけた。

「あんたねー、何気に人の私生活ばらすな！」

「ルナモン、お前もね。部屋散らかすのはお前だろうが！ いつもお菓子のカスとか散らかして掃除する身にもなってみろ」

俺らはそういつて、お互いのパートナーをずるずると引きずり、ガオモンたちから離れていった。

ガオモンと、デジヴァイスの中にいるアグモンは、お互い、口をポカンとあけて俺と淑乃さんがパートナーを引きずっている様子を見ていた。

.....

……

「大地。」

俺と淑乃さんが、それぞれのパートナーに対して説教して、しばらく経った頃、薩摩さんから声をかけられる。

「はい？」

「そろそろ日が暮れる。今日はもう帰ってもいい。淑乃、送ってあげなさい。」

「了解しました。」

帰りは、淑乃さんが送ってくれるらしい。

俺はその言葉に甘え、淑乃さんの車に乗り込んだ。

【side 淑乃】

私が、大地君を見たときの第一印象は、ただの一般人だった。

ラプター1、アグモンの姿を見られ、とても焦っていたのを覚えている。

アグモンに逃げられ、とつさにその後を追いかけたけど、そのときに彼のことは頭からきれいに消えていた。

騒ぎが収まって、彼のことを思い出したが、外見だけでは全然情報

を得ることはできなかった。

バックミラー越しに彼とそのパートナー、ルナモンを見る。

（そういえば、彼のパートナーには、学校で一度助けられているんだっけ。）

あの時は、マサルの証言しかなかったから、信じることはできなかったけど。

「ありがとうね」

私は、大地君にお礼を言う。大地君は、首をかしげていた。何のことか分からないのでしょう。

「学校の件、スナイモンに襲われたの助けてくれたのって大地君のパートナーなんでしょ？マサルから聞いたわ」

私がそういうと、彼は納得したというような顔をして、首を振った。

「いえ、気にしないでください。」

そういつて大地君は笑う。なんというか、10歳を相手にしているとは思えない。

一人暮らしをしていると聞いていたけど、それが原因なのかしら？

「ついたわ。大地君。ここよね？」

私は、一軒の家の前で、車を止める。

住所は知っていたけど、実際に家を見るのは初めて。

一人暮らしをするには大きすぎるような気もする。ここに一人で寂しくないのかしら？

「はい。ありがとうございます。」

大地君は、そういつて頭を下げた。

そのときだった。

『こちら本部。淑乃、緊急連絡だ。市街地B-4地区でデジモン反応を感知した。トーマはすでに向かっている。淑乃も大地を送つたらすぐに向かつてくれ』

本部から、緊急の連絡が入る。私は、耳に取り付けている通信機のスイッチを押し、

「了解です。今、大地君の家の前にいます。すぐに現場に向かいます。」

といった。

「デジモンですか？」

「ええ、でもキミは帰りなさい。もう日も暮れてきたし、これはD

A T Sの仕事なんだから」

私が、そういうと、大地君は若干の間を置いてうなずき、車から降りる。

「それじゃあ、また明日、多分トーマあたりが迎えに来ると思うわ。」

「分かりました。……頑張ってください」

大地君が車から降りたのを確認した私は、デジモンが現れたという現場へと車を走らせた。

【side 大地】

次の日、放課後にまた、トーマの車に乗って、俺はDATSへと向かった。

昨日の話について薩摩さんに聞いてみると、現れたデジモンはエレキモンだったらしい。

エレキモンは変電所でガルルモンへと進化

偶然居合わせたマサルがガルルモンへと単身戦いを挑むが、倒せず、苦戦していた。

そんなとき、アグモンが駆けつけ、マサルとアグモンは仲直り。

二人で協力して、ガルルモンを倒すことができた。

ということだった。

お互いが、なぜ必要なのか。マサルにもようやくそれが分かったんだろう。

薩摩さんのこの言葉がとても耳に残った。

第10話 誕生会

【side 大地】

「大地、今日一緒に遊ばないか？」

「悪い、今日も用事があるんだ。」

「またかよ。流石、金持ちは違うな」

「……それは、間違いって分かってるだろ？」

俺は、友人に遊びの誘いを受けたが断った。

その後言われた言葉に俺は苦笑する。

友人も本気で言ってるわけではなく、笑っていた。

DATSに行かなければいけないからだ。

初めてDATSに行ってから1週間が過ぎた。

初めの3日ほどは、下校の時間にトーマが俺を迎えに来ていた。

しかし、俺の友人たちに俺が高そうな車に乗って帰っていると見られてしまったようで、

『菅原大地は実は金持ちである。』という噂が学校中に広まってしまった。

今では、それが誤解だったと皆知っているが、時々友人がそのことでからかってくる。

俺も、よく考えれば目立つことをしていると分かったはずなのにと、後悔した。

その後、すぐに薩摩さんに相談し、これからは、こちらからDATSに向かうということで話がまとまった。

自分で言うのもどうかと思ったけど、薩摩さんは結構俺のことを信用してくれているようだ。

自分で向かうと言ったときも、即答で許可してくれたし。

DATSでも、監視という名目ではあるが、基本的に自由にさせてもらっている。

最低1時間ほどいれば、いつ来て、いつ帰ってもいいということになっているから、これでいいのか？　とも思うけど。

淑乃さんとかトーマは俺のことを『大地君』って呼んでいたが、なんか恥ずかしかったから君付けを止めてもらうようにいった。

ルナモンも、DATSはこの世界で自由に行動できる数少ない場所だから、DATSに行くのを毎日楽しみにしている。

まあ、DATSに行くようになったからといって、俺の生活は特別変わったことはなく、DATSに寄るといって過程が増えただけだった。

DATSにいても、戦いに参加するわけではないし。

正直、暇と思うけど何もすることがないから、家でやっていた学校の宿題なんかをやる時間になっている。

「こんにちは……は？」

「ちっ、なんだよ大地かよ」

「なんだよって何さ……。あ、薩摩さん、こんにちは」

DATSの司令室の扉をくぐって挨拶をしようとしたのだが、目の前にマサルとアグモンが立っていて言葉に詰まってしまった。

しかも、マサルは、来たのが俺だったことに舌打ちをしてくる。

ちょっとムカツときたけど、まあこれくらい我慢しようと思い、先ほどできなかった挨拶を薩摩さんにする。

薩摩さんがうなずいたのを確認して、ディーアークからルナモンを出すと、俺はいつも自分が使っている椅子に座った。

「マサルは何やってるのー？」

「俺が知りたいっての」

マサルは、さっきからずっと扉の前を行ったり来たりして、落ち着きがない。

アグモンも一緒だ。

「隊長、ただいま戻りました……た」

「お帰りなさい、お待ちしておりました。」

「しておりました。」

扉が開き、トーマが入ってくると、マサルたちはすぐさま駆け寄って声をかける。

……何あの態度。俺のときと全然違うし。別にして欲しかったわけでもないけどさ。

マサルらしくなくて、気持ちわるい。

「さあ、お疲れでしょう。熱いうちにどうぞ」

俺たちが啞然としていると、マサルはトーマにお茶を渡した。

あきらかに様子がおかしい。

「い、一体何のまねかな？ マサル」

「見て分らないのか？ メイドの真似だ」

マサルの代わりにアグモンが答える。そういう意味じゃない。

何のつもりだとトーマさんが詰め寄ると、「考えすぎだよ、トーマ君」といつもなら絶対にしない君付けで呼ぶ始末。

どうみても何かたくらんでいる。

「気をつけてください、マスター。なにやら怪しい臭いがします。」

ガオモンが言った。

「すごいな、臭いで分かっちゃうのか」

マサルはとっさにアグモンの口をふさぐ。

「さすが犬だね！」

「私は犬ではない！」

「そういう意味じゃない。というより、ルナモン、分かっているだろ」

ルナモンの言葉にガオモンは怒り、俺は冷静につっこんだ。

ルナモンは、えへへと笑ってごまかす。

「隠しても無駄だ。下心でもあることくらい、子供でも分かる」

トーマさんの言葉に俺もうなづく。……俺は子供じゃないけど

マサルに話を聞いてみると、明日、中学校の追試があるらしい。

先生に釘をさされ、明日さばると留年決定なんだそうさ。

中学で追試、しかも留年って聞いたことないんだけど……

どれだけ成績悪かったんだろう。逆に気になる。

「無理だな」

マサルの話を聞いたトーマは即答する。

「まだ何も言ってねえよ」

「いくら僕が博士号を持っていたとしても、マサルに勉強を教えるのは不可能といわざるを得ない。」

トーマさんの言葉に淑乃さんとララモンがうなずいた。

確かにそうだと思うけどさ……。みんなひどいな。

というより、トーマ、頭いいとは思ってたけどその歳で博士号持っているとは驚いた。

しかし、マサルが頼みたかったのはそんなことではなかった。

明日は俺と同じクラスの知香ちゃんの誕生日らしい。

自分が、追試が終わるまで、知香の面倒を見てほしいそうだ。

「そんなの、淑乃に頼めばいいじゃないか。他にも大地だっている。」

トーマは淑乃さんと俺のことを見てそういった。

「いや、二人じゃだめなんだ。父親の役目ができるやつが必要なんだ。だから、頼む！ 明日一日俺の家族になってくれ！」

そういつてマサルはトーマさんに手を合わせて頼む。

トーマさんの目がどこか悲しそうなもの変わった気がした。

.....

.....

.....

次の日、俺はルナモンと家でのもんぶり過ごしていた。

「暇だよダイチー」

「そんなこと言われてもなあ.....」

DATSにも行かないといけないんだろうけど、行ったところで何もやることはない。

ルナモンは、デジモンといろいろ遊べるからいいかもしれないけど、俺はそうでもない。

マサルやトーマとは、デジタルワールドで一緒だったこともあり、

よく話したりする。

しかし、トーマは結局昨日のマサルの頼みごとを受けることにしたらしいから、今日はいないだろう。マサルも、中学の再試験に行っている。

淑乃さんとは、あまり接点がないため、ほとんど話さないし、隊長や、オペレータの二人も忙しそうだ。そのため、基本的に俺は、DATSで一人で何かしているという形になっている。

いつもなら宿題をやっているが、それも昨日終わっている。

そうは言っても、行かなかつたら向こうから迎えが来て、結果としてまた変な噂が広まるかもしれない。

「仕方ない。DATSに行くか。途中で何か本でも買っていけば暇もつぶせるだろう」

「うん！」

俺のつぶやきに、ルナモンはうれしそうに頷いた。

「こんにちは……は」

「よう大地、ちょうどいいところに来たな」

本屋で少し時間をつぶしてからDATSに来た俺が見たものは、マサルとアグモンの姿だった。

昨日もこの光景見たことあるなと思ったが、昨日とは違って、今日は俺に用事があるらしい。

「大地も、知香の誕生日会に参加しないか？」

「え？……い、いや……俺はいいよ。何も用意してないし。」

知香ちゃんとは席は隣だが、挨拶だけでほとんど会話しないし、俺が参加するのは場違いな気がする。

「いいじゃねえか、別に。淑乃も参加するんだしよ」

「で、でも……今日ここに来たばかりだから……」

「別に構わん。DATSメンバーと一緒にいるということだしな。楽しんできたらどうだ？」

俺が、DATSにいなきやいけないと主張しようとしたら、隊長のほうから許可がでてしまった。

「それに……ルナモンは行きたがっているようだぞ」

その声に俺がルナモンの方を見ると、目をきらきらさせてこちらの方を見上げてきた。

ああ……これは行かないといろいろと面倒なことになるかも。

「……途中で何か買ってからいくよ」

マサルは「別にいいのに」と言っていたが、こういうときは何か用意するものだろう。

俺は、それだけは譲らずに、誕生日会に参加することにした。

.....
.....
.....

「大地君!？」

マサルの家に着いた俺は知香ちゃんに開口一番にそう言われた。

「なんだ？ 知香、知ってるのか？」

マサルが知香ちゃんに尋ねる。

「同じクラスの大地君。すっごく頭いいんだよ」

「へえ、同じ学校なのは知ってたけどよ。お前ら同じクラスだったのか」

マサルは少しだけ驚いているようだ。

知香ちゃんは、俺の隣に目線を移してルナモンを見た。

「わあ、ウサギさんだ。大地君もアグちゃんみたいな子持ってたんだ。いいなー。ねえねえ、なんて名前なの？」

「僕、ルナモンだよー。よろしくね」

アグちゃんとは、アグモンのことだろうか。ルナモンと知香ちゃん
は気があったのかすぐに仲良くなって話していた。

知香ちゃんの誕生日会は楽しかった。

知香ちゃんはすごく楽しそうに昼間トーマと何をしていたのかを話した。

もんじゃ焼きを食べたり、遊園地で遊んだりといういろいろあったようだ。

トーマともんじゃ焼きというのが似合わなくて笑ったが、トーマがその店でカードで支払おうとしていたのを聞いてまた笑ってしまった。

久しぶりに自分が作ったものではない料理を食べた。マサル之母親、小百合さんはとても料理が上手で、特に卵焼きは絶品だった。

大勢で食べるというのも久しぶりで、それがさらに料理をおいしく感じさせた。

最後のほうで、小百合さんの卵焼きを取り合ってマサルとアグモンが喧嘩をしている。

確かに、こんなおいしい卵焼きは始めて食べたかもしれない。

これなら、あの喧嘩の原因というのも分かる気がする。

「あー！」

ふと横を見ると卵焼きの最後の一切れをトーマさんが掻っ攫って食べていた。

「こらトーマ。てめえ、どさくさにまぎれて」

「いいじゃないか。小百合さんの卵焼きは君一人のものじゃない」

アグモンとマサルはトーマに文句を言っており、俺を含むほかの人たちはあきれた顔をしていた。

第11話 潜入捜査

【side 大地】

「今日もまったく成果なしか。」

俺は公園のベンチに腰を下ろしたままつぶやいた。

せっかくの休日ということで、しばらくやっていなかった神珠探しをしていたのだが、手がかりなし。

このまま見つからないんじゃないかね？　とも考えてしまう。

「次はデジタルワールドの方でも探してみるー？」

「あー、それもいいかもなー」

聞こえてきたルナモンの声に、空を見上げてつぶやいた。

ちなみに、ルナモンは俺が座っているベンチの裏で、さっき買ってきたアイスをせっせ、せっせと食べている。

「ん？」

俺がふと前を見ると、見覚えのある人物が公園の入り口を横切って走っていくのが見えた。

「あれって……淑乃さん？　おーい！」

俺が声をかけるが、気づかなかったのか、そのまま走り去っていった。

「ありゃ、見間違いだったか？」

「んーん。帽子とサングラスしてたけど淑乃さんだったよ。デジヴアイス持ってたし。」

「ちよっ！ 何乗り出してきてんだよ。誰かに見られたらどうするんだ」

ルナモンの方を見ると、ルナモンはアイスを啜えたままベンチの背もたれから乗り出して、さっき淑乃さんが通っていった方向を見ていた。

慌てて俺が、ベンチの裏へと押し出した瞬間、淑乃さんがきた方向から大人数のカメラをもった人たちが走っていくのが見えた。

「ふう、危ねえ……。……それにしても、淑乃さん、追われてるのか？」

「淑乃さんなら大丈夫なんじゃない？ いざとなればララモンもいるし。」

「それもそうだな。そうだ。暑いし、神珠探しは、DATSで少し涼んでからにしようぜ」

「さんせー！」

俺は、ルナモンをディーアークにしまうと、ベンチから立ち上がってゆつくりと、DATSのある方向へと歩き出した。

………

………

………

「じんに……」

「納得できませんー!!」

「どうして私たちじゃなくて、淑乃なんですか！」

俺がD A T Sの中に入ると、中から怒鳴り声が聞こえた。
なんだろう。最近こっぴどい多い気がする。

中には全員そろっており、薩摩さんに文句を言っているオペレータの二人、黒崎さんと白川さんの姿があった。

その恐ろしい剣幕にびびりながらも、俺はこっそりと中に入つてすぐ近くにいたマサルに近づく。

「何かあつたの？」

「おう、大地。来たのか。なんかよ、あいつらがよ、淑乃が潜入捜査しているのが気に食わないんだと。」

潜入捜査って……。何のことだよ。

詳しく話を聞いてみると、事の発端は、華村祢音という人気歌手の熱愛発覚というスキャンダルらしい。

華村祢音というのは、新曲のダウンロード件数が700万件突破したとかいう一流の人気歌手らしいのだが……まったく知らない。

まあ、もとよりこっちの芸能関係は疎いし仕方ないのかもしれないけどさ。

それで、その華村祢音のスキャンダルの相手が、淑乃さん。

これだけでも、オペレータの二人は怒っていたそうなんだけど、華村祢音には、デジモン

を匿っているという容疑がかけられていた。単に、デジモンが近くにいるだけなのか、それともデジモンを使って何か悪行を行っているのか、それは分からない。

その調査をするために、淑乃さんを潜入捜査させることにしたらし

い。

このことを聞いたオペレータの二人がさらに怒り出して、自分が潜入捜査してもよかったじゃないか、と薩摩さんに詰め寄っているということらしい。

「華村祢音は、私の幼馴染なの。」

淑乃さんが、ぽつりとそう言った。皆の視線が淑乃さんに集まる。

「そう、だから彼女が適任と判断した。」

「うう、理解はできるけど……」

「納得できない！」

薩摩さんの言葉に、オペレータの二人はしぶしぶと引き下がる。

薩摩さんは、一息つき、俺の方を見た。俺は頭を下げる。薩摩さんも軽く頷いた。

「……話を戻すぞ。華村祢音が匿っている可能性があるデジモンのことだ。華村祢音の近くで検出されたデジモン反応を解析した結果、そのデジモンはケラモンということが分かった。」

薩摩さんの説明を受け継いだクダモンがそういった。

俺はその説明を聞いた瞬間、顔が引きつっていくのが分かった。

ケラモン…『アドベンチャー』の世界で思いっきり暴れまわったデジモンだ。

インフェルモン、ディアボロモンへと進化していき、ネットを駆け

回りミサイルを発射させた。オメガモンが倒したけど、本当にぎりぎりの戦いだった。

『02』のときは、クラモンを大量に現実世界に送り込んでアーマゲモンとなって襲い掛かってきた。

こちらも、本当に辛く大変な戦いだった。

「ん、どうかしたのか？」

俺が顔をしかめていたのを見られたのだろう。マサルが話しかけてくる。

「ケラモンにいい思い出ないからねー。僕たち。」

ぼそつとつぶやいたルナモンの口を慌てて塞ぐが、皆こっちの方を見ている。皆に聞かれてしまったようだ。

「知っているのか？」

「……ええ、コンピュータを操るデジモンということは」

「そうだ。よく知っているな。」

その後、薩摩さんとクダモンは、二言三言話してから、そういうわけだから、淑乃のサポートを頼むとDATSメンバーに話してその場は解散となった。

俺としては、なぜケラモンのことを知っているのかということ聞かれるんじゃないかと気が気でなかったが、誰もそんなことを気にしていない様子だった。

「よう、大地。またうちに遊びに来いよ。知香も喜ぶしな」

「うん。ルナモンも行きたがってたし」

マサルは、解散すると、すぐに俺に話しかけてきた。

あの誕生日会以降、学校でも知香ちゃんとよく話すようになった。まあ、主にデジモンのことなんだけど。

ルナモンも、知香ちゃんと気があって、遊びに行きたいと何度も言っている。

マサルの家に行って初めて知ったんだけど、俺の家とマサルの家は目と鼻の先だった。

俺もマサルもお互い、どうして気づかなかったんだろうと笑ったりもした。

「じゃあよ、今日飯食いに来ないか？」

いきなり、マサルがいいこと思いついたとばかりに、そう誘ってきた。

「いきなり言われても……マサルのお母さんに迷惑じゃない？」

「母さんなら大丈夫だって。それに、どうせ家に誰もいないんだろ？ 皆で食ったほうがうめえじゃねえか」

「わーい、行こうよダイチ！ 知香ちゃんにも会えるし！」

ルナモンは、目をきらきらとさせながら俺のほうを見上げてくる。
断る理由もないし、ということで、俺はその誘いを受けることにした。

.....

.....

.....

「ただいまー」

「おじゃまします。」

「しまーす」

マサルの後が続いて、マサルの上に上がる。

階段を下りる足音が聞こえてきて、知香ちゃんが2階から降りてきた。

「あ、マサル兄ちゃんお帰りなさい。大地君とルナちゃんもいらっ
しゃい」

「じゃあ、俺は母さんに夕飯のこと伝えてくるから、大地たちは遊
んでろよ」

マサルはそう言って、リビングのほうへと歩いて行った。

夕飯は、とてもおいしかった。やっぱり皆で楽しく食べるとおいし
いってというのは本当だと思う。

夕飯が終わり、俺たちはリビングでくつろいでいる。

夕飯終わってすぐ帰るというのもそっけないし、ルナモンがもう少し遊びたがったからだ。

リビングに置いてあるテレビには、熱唱している歌手が写っていた。この歌手が華村祢音らしい。

俺には、どこがいいのか全く分からないが、知香ちゃんは、やっぱり華村祢音はいいな」と、画面を食い入るように見つめている。

「マサル兄ちゃん、サインもらってきてよ。淑乃さんって祢音と付き合ってるんでしょ？」

「淑乃に迷惑だろうが」

マサルは、嫌そうな顔をして、断った。そのままマサルはリモコンを手に取りテレビを消す。

「あー、マサル兄ちゃん。勝手にテレビ消さないでよ。」

「うるせえ、大体あんなのどこがいいんだよ。」

そのまま口げんかへと発展しそうな空気になってきて、俺があわてて止めようとしたとき、テレビの電源が入った。

「おい、アゲモン。勝手にテレビつけんなよ。」

「俺じゃねえぜ。アニキ」

マサルは俺の方も見るが、俺もテレビには触っていない。俺が首を横に振ったのをみたマサルは、首をかしげながらリモコンのスイッチを押してテレビを消す。

「な、なんで消えねえんだよ」

マサルが電源を切ってもすぐに電源が入る。テレビのチャンネルをいじっても、写っているのは華村祢音の姿。

「アニキ、これって……」

アグモンがそうつぶやくと、マサルは外へと飛び出した。

「どこいくの!？」

俺がそう尋ねると、マサルは「DATSに決まってるだろ!」と叫ぶように言った。

「いくぞ、アグモン。大地」

「え、お……俺は……いいよ。DATSに入ってるわけじゃないし。」

「あ、……そっぴやそうだったな。わかった。じゃあ俺らは行ってくるぜ。行くぞ! アグモン!」

「おう!」

マサルとアグモンが走っていくのを見送った俺は、一旦マサルの家に戻って挨拶をしてから帰ることにした。

「ダイチ、一緒に行かなくてよかったの？」

「ん？ ああ別にマサルたちなら大丈夫だろ」

おそらく主人公だと思うし。

口には出さなかったが、心の中でそう思った。

ずっと一人で考えてたことがある。

この世界がアニメだとして、誰が主人公なんだろう？ と

元の世界で見たのは5年前だし、よく覚えていない。

でも、デジモンのアニメでデジモンをパートナーに持っていない人が主人公だとは考えにくい。

今までを考えると、主人公は男、そしてどこか強引で、周りを引っ張っていく人ってことになる。

となると、主人公としてありえるのはマサルしかない。

「行きたいって気持ちがないわけじゃないけどさ、俺DATSに入ってないし、行ったら強制的に入れられそうで」

「……ダイチがそういうならいいけど……」

ルナモンは、そのあと何も言ってこなかった。

数日後、ケラモンの事件が解決したことを教えてもらった。

ケラモンがクリサリモンに進化したり、新聞記者に見られてしまったりといったアクシデントが発生しているいろいろ大変だったらしい。

「お前も居たらもつと楽だったのにな」

マサルにそういわれ、俺は苦笑した。

これらの話は全部マサルから聞いたことだ。機密情報なんじゃないの？ とか、話してもいいのか？ とか思ったりもしたけど。まあ聞いている俺が言うことではないのかもしれないけどさ。

「それで、華村祢音は？」

俺はマサルに尋ねる。

「ああ、デジタマを回収した後、記憶処理も行つて、デジモンにあつてからの記憶を消したんだ。淑乃のことも忘れてしまったみたいだよ、しばらく淑乃も寂しそうだったぜ」

「淑乃さん……」

俺は、機械に向かって仕事をしている淑乃さんを見た。

いつもと変わらないように見えたけど、時々、寂しそうな表情を浮かべていた。

第12話 逡巡

「大地、例の件については考えてくれたか？」

俺がDATSに来ると、薩摩さんに応接室に来るように言われた。応接室で、薩摩さんの正面に座ると、薩摩さんはそう切り出してくる。

「例の件？」

「ああ、DATS勧誘の件だ。」

DATS勧誘。忘れていたわけじゃない。でも、考えても考えても答えが出なかった。

ルナモンとは別れたくない。

だからといって、DATSに入ると……

「……すいません。まだ、決められません。」

「そうか、いつでもいい。決断を急ぐ必要はない。」

「ありがとうございます。」

「薩摩、それなら今行っている調査に大地を参加させてみるのはどうだろうか？」

「えっ？」

クダモンが声をかけてきた。薩摩さんは、ふむ……と手をあごに持ってきて考え事を始める。しばらく考えていたが、うなずくと、マサル、トーマ、淑乃さんの3人を呼び出した。

「今、行っている調査に大地を参加させたいのだが、どうだろうか

「？」

薩摩さんの言葉に、3人は、それぞれ驚いた表情を見せた。

「DATS加入の参考になるかもしれない。もし、お前たちが嫌なら断ることもできるが、どうだろうか？」

「別にいいぜ。」

「私も構わないわ。」

「そうですね。大地の強さは知っています。それに、華村祢音の件でデジモンの知識があることも分かりました。マサルよりは役に立つでしょう。」

「なんだと、トーマ！ どういう意味だ！」

「言葉通りの意味だ。」

「止めなさいよ二人とも。」

俺の参加に反対することなく、トーマとマサルは口げんかを始めてしまった。

俺はぼかんとしてそれを眺めていたが、薩摩さんに呼ばれてそちらを向く。

「どうだろう？ 反対している人もいないし、参加してみる気はないか？」

「俺は……」

「ダイチ！ やろうよ！！ 面白そう！」

俺の言葉を遮って、ルナモンは目をキラキラさせながらそう言った。

「でも、ルナモン……」

「どうせ、やることないんだし、いいでしょ？」

ああ、なんかかつこいいとかそんなこと思っている目だ。こつなつたらルナモンは止められない。

俺は、薩摩さんに「分かりました。」とだけ答えた。

その後、俺はその捜査について話を聞くことにした。

正直なところあまり乗り気ではなかったけど、返事をした以上、最低限は頑張りたい。

今回の捜査は、プロボクサーの早瀬選手に関係するらしい。

案の定、俺はまったく知らない人だったけど、しばらく致命傷を負って、最近復帰した人だそうだ。

復帰以降は7連勝という快拳を成し遂げており、しかも、その勝因が全て、対戦相手の不調によるものだったとか。

このことに疑問を持ち、調査した結果、細い針が見つかり、その針からデジモン反応が検出されたため、DATSでその捜査を行うことになったようだ。

「これが、その針だ。何か分かるか？」

薩摩さんが、俺に見つかった針を見せてきた。

細くて長い針。こんな針を使うデジモンはいったっけ？

フライモンは針を使うけど、ここまで細くないし……

あ、そういえば、ペガスモンの>ニードルレイン<は針のような毛

を飛ばす技だったつけ。

でも、この針はあれより太いし……

この針からデジモン反応が検出されたのなら、デューアークで読み取れないかと思って、デューアークを向けてみたが、反応はしなかった。

もしかしたら、俺が知らないかもしれない。

俺は首を横に振って、「分かりません」と答えた。

薩摩さんも、予想はしていたのか、「そうか」と頷くと、その針をしまった。

……

……

……

俺が捜査に参加するのは、明日からということになった。
俺は家に帰って夕食の支度をしている。

「ダイチ……」

ルナモンに呼ばれたので俺は包丁を動かすのをやめ、振り返る。ルナモンは、DATSに居たときとは違って真剣な顔をしていた。

「ダイチがDATSに入るのをためらっているのって……やっぱり、あの事」を気にしているからなの？」

ルナモンの言葉に俺はドキッとした。

“あの事”……俺が今でもずっと後悔していることだ。

俺は、一度「原作」を変えたことがある。

あれは、『アドベンチャー』のデビモンとの戦いのことだ。

本来であれば、パタモンがエンジェモンへと進化して、自分の命と引き換えにデビモンを倒す。

俺の好きな場面でもあり、悲しい場面でもある。

俺は、タケルに悲しませたくない、と考え、レキスモンにタケルを守るように指示をしていた。

こっちの思惑通り、タケルを守ることができ、パタモンもその場では、エンジェモンへと進化しなかった。

ここまでは良かったのだが、デビモンが強すぎた。

闇の力を吸収して強くなったデビモンにエンジェモンなしで勝つのは無理だった。

最終的には、パタモンもエンジェモンに進化してしまい、デビモンを倒すことができた。

しかし、その代償は大きく、太一のアグモン、ヤマトのガブモンを残してデジモンはすべてやられ、デジタマになってしまった。

俺のルナモンも一緒に……

俺は自分を責めた。俺がこんなことをしなければよかったのだと。周りのみんなは俺が自分を責めているのはルナモンが死んだせいだ

ろうと考えていたようだ。

そう自分を責めるな。お前のせいじゃないと励ましてくれたが、そう簡単に立ち直れるものではなかった。

そのときからだ。

もう、原作は変えたくない。原作どおりのことを起こしていればルナモンも死なずにすむ。

そう考えたのは。

「……まあ、それもあるんだけどさ。」

俺は、調理を再開しながら答えた。

「DATSに入ったら、デジモンと戦うことになるだろ？　ただでさえ、忙しくてあまり神珠探せてないのに、これ以上忙しくなったらどうするんだよ」

俺は笑いながら答える。

うまく笑えているだろうか？　俺がルナモンに言った言葉……嘘ではない。でも、本当のことでもない。やっぱり一番の理由は原作を壊すのが怖いから……。

でも、それをルナモンに気負わせたくなくて、俺はごまかすように笑った。

俺はできた料理を皿に盛り付ける。

「まあ、この話はこれで終わり。さ、飯にしようぜ」

「うん……」

テーブルの上に皿を並べ俺たちは少し早めの夕飯を食べることにした。

第13話 捜査体験（前書き）

デジモンワールドの新作がPSPで出るようですね。

久しぶりのデジモンワールドなので楽しみです

第13話 捜査体験

次の日、俺も捜査に加わることになった。

とはいっても、俺のこの姿で聞き込みがうまくいくはずもない。必然的に、俺は誰かと組んで行動することになる。

「そうだな……。今日は淑乃と組んでくれ。」
「分かりました。」

淑乃さんは、今から早瀬選手の奥さんの家を訪ねるらしい。

俺は、淑乃さんの後に着いていき、車に乗りこむ。

淑乃さんとはあまり話したことがないから、なんとなく気まずい雰囲気になった。

「大地は、DATSに入るかどうか迷ってるの？」

急に、運転している淑乃さんからそう聞かれた。

「……はい。俺なんかが入っても、足手まといにしかないんじゃないかって思ってた。」

俺は嘘をついた。

「私はそんなことないと思うけど。マサルのほうがずっと面倒よ。戦闘だけで後処理とかはまったくダメだし。戦闘だって、周囲への被害を考えないし。他に……」

俺は、愚痴を言い始めた淑乃さんに苦笑する。隣でルナモンも同じような表情をしていた。

俺は、なんとなく聞きたかったことを聞いてみることにした。

「淑乃さんは……淑乃さんは、どうしてDATSに入ろうと思ったんですか？」

マサルの入った理由はなんとなく分かる。思いっきり喧嘩ができるからって所だろう。

でも、淑乃さんやトーマは、なんで入ったのか分からない。

別に知らなくてもいいとは思っけど、なんとなく聞いてみたかった。

「私？ 私はそうね……DATSの給料はいいっていうのもあるけど、やっぱり、平和のためかしらね。」

「平和……ですか」

「もしかしたら、隊長から聞いてるかもしれないけど、最近、デジモンが人間界に現れる事件が増えてきてるの。人間界にデジモンが現れたら、パニックになってしまうわ。そうならないように私はDATSに入って戦うことを決めたの。」

「普段の生活はだらしなくせに」

「うるさいわね！」

淑乃さんは、横槍を入れてきたララモンをにらみつけた。

淑乃さんは、立派な理由を持っている。それに比べたら俺は……

「ついたわ。ちょっと待っててね。」

淑乃さんは車を止めて降りる。淑乃さんは、そのまま早瀬さんの家のチャイムを鳴らす。

今回は、早瀬さんの奥さんに、雑誌の取材という名目で来ているらしい。

それって俺がいていいのかな？　とも思ったけど、淑乃さんがなんとかしてくれたみたい。

玄関でしばらく淑乃さんと女性の人が会話をした後、こっちを向いて手招きをした。

俺は、早瀬さんのお子さんの相手ということで、家の中に入る。

さっき、淑乃さんと話していた女性の人は、早瀬さんの奥さんだったようだ。

お子さんの名前は、真奈美というらしい。

人見知りの性格なようで、俺に近づこうともせず、一人で黙々と遊んでいる。

「これって俺がいる意味あるのかな？」

俺は一人つぶやいた。淑乃さんは隣の部屋で、奥さんに対して取材という名目でいろいろと聞いているようだけど、俺はすることがない。

「あ……あのさ。真奈美ちゃんは、お父さんのことどう思う？」

しかたなしに、俺は真奈美ちゃんに話を聞くことにする。

正直、聞いても無駄だとは思っていたんだけど、

「パパはね、とってもかつこいいの！」

さっきまで一人で遊んでいた真奈美は、俺が父親のことについて訪ねると、とっても楽しそうにそう話し始めた。

「パパは強くて、誰にも負けないんだ。」

真奈美ちゃんの話を、時々相槌を打ちながら聞いていると、淑乃さんの方の話が終わったみたいで、こっちの方にやってくる。

奥さんは、俺と真奈美ちゃんが仲良くなっているのを見て、とてもうれしそうな顔をしていた。

帰り際には、また来てね。とも言われた。

次の日から、捜査に参加した。

やはり、俺は誰かと組むことになるため、マサル、トーマ、淑乃さんの順で交代で組んで捜査に参加した。

俺のような小学生の姿ではいけないところも多く、あまり捜査に貢献できたとは思っていない。

薩摩さんにも、これでいいんですか？　って聞いたけど、薩摩さん的には捜査というより、DATSの見学に近い感じでいいらしい。

そんなこんなで、捜査は進んでいき、容疑者は、早瀬選手本人、彼が通うジムのトレーナー、そして彼の奥さんの3人に絞り込まれた。

「それで、この3人の中で誰が怪しいと思う？」

薩摩さんが俺らに尋ねた。

「俺は、このトレーナーがくさいと思う。」

「うんうん。いかにも悪人面だよな」

マサルとアゲモンは答えた。

この人とは、マサルと行動していたときに会ったことがある。

あまり話せなかったけど、早瀬選手の健康などしっかりと管理している人で、見た目のわりに、優しくていい人だった。

……っていうか、マサル。顔で決めるなよ……

俺は内心突っ込んだ。

「私は早瀬さん。あんない奥さんが悪いことなんてしないと思う。」

「

俺はあまり奥さんとは話していないけど、早瀬選手のことを本気で心配していることはよく分かった。だから、淑乃さんの言い分も良く分かる。

早瀬さんにはトーマと一緒に行動していたときに会った。

俺は、ファンの振りをして近づいたが、あまり相手にされなかった。でも、トーマと一緒にランニングしたりと訓練している様子はとても爽やかで、こんな人が卑怯な真似をするようには思えなかった。

「トーマ、お前はと思う」

「まだ、なんとも言えません。」

薩摩さんの言葉にトーマさんはそう答える。

「そうか、では大地、お前は？」

「俺も……わかりません。ただ、この3人の中にはいないような気もするんです。」

俺は正直に答えた。

「なんだよ、それ。じゃあ誰だっただよ」

マサルが聞いてくる。

「例えば、早瀬選手の熱烈なファンとか。まあ、なんとなく……なんだけどね」

俺は苦笑して答えた。

試合前日、もしデジモンを操っているとすれば今日だ。

俺は、淑乃さんと一緒に早瀬選手の自宅を車の中からみていた。

今のところ、目立つた動きはない。

そのときだ、いきなり通信機からの連絡が入る。
どうやら、真奈美ちゃんがいなくなっただらしい。

「まさか……、幼いからって容疑者から外していたのがアダとなつたわね。」

淑乃さんがつぶやく。

「ダイチの予感、当たったねー」

ルナモンがうれしそうにいう。そんなことで喜んでる場合じゃないだろ。

飛ばすわよ、しっかりつかまってと淑乃さんが言っただけでアクセルを踏み込んだ。

現場に向かうと、トーマさんがすでにいた。

犯人が真奈美ちゃんだと予想がついていたらしい。

俺らにも言ってくればよかったのに……

相手のデジモンはトゲモンだった。

確かに針のようなトゲ使うからね。

あー、そういえばミミさん元気かな。最後にあったあとアメリカに行っただけだ。

俺がのんきにそんなことを考えていると、トゲモンは真奈美ちゃんをつれて逃げてしまう。

あわてて追いかけるマサルと淑乃さん。俺も後を追った。

ついた先は大きなドームだった。

中に入ると、中央にリングがあつて、トーマさんとガオモンがいる。先回りしたようだ。真奈美ちゃんとトゲモンも一緒だ。

俺らも行くこうとすると、マサルに止められた。

「リングに上がったら1対1のガチンコ勝負。それが男ってもんだ」

……俺にはよく分からない。

そついや、マサルはやけに男つてのにこだわっているけど何でなんだろう？

喧嘩番長を名乗つてることと関係でもあるのかな？

リングの上では、ガオモンとトゲモンがバトルをしている。

「マスターの愛するボクシングを！ 神聖なるボクシングを汚すヤツは許さない！」

ガオモンがラッシュをしかけ、トゲモンをリングの外に弾き飛ばす。

「やった！」

「いえ、まだよ」

飛ばされたトゲモンは、巨大化して大きくなる。

トーマさんは対抗するようにデジソウルをチャージした。

「ガオモン進化！ ガオガモン！！」

トゲモンが無数のトゲを飛ばすが、それをガオガモンが>スパイラルブロー<で巻き込んで、あっさりと勝利した。

早瀬さん達の記憶処理も行われたようで、俺たちのことも忘れてしまったようだ。

悲しかったけど、それ以上にトーマの暗い表情が印象に残った。

ずっとこんな仕事をしているんだ。何度も人の記憶から忘れられて……。

でも、そうしないとこの現実世界に混乱が発生してしまう。

トーマも、淑乃さんみたいに、確固たる意志が存在しているんだろう。

………

………

………

俺は、今回の捜査を通して、自分がどうするべきかでまた悩んでいた。

入らなかつたらルナモンのことも忘れてしまう。

でも、俺には、淑乃さんやトーマのような強い意志はない。そんな俺がDATSに入ってもいいんだろうか？

いや、それ以前にDATSに入ることによって原作を変えてしまうということはないんだろうか？

入った方がいいという気持ちと入りたくないっていう気持ちが入り混じり混乱してくる。

俺が悩んでいると、俺の上に影ができる。見上げると、淑乃さんだった。

「おつかれさま。はい、これ」

淑乃さんは、俺にジューズを渡してきた。俺は黙って受け取る。

「どう？ DATS加入の参考になった？」

「……はい」

「実はね、今回の捜査の前に、ルナモンが相談にきてたの。なんとかして大地を元気にしてやれないか？ って」

俺は顔を上げて淑乃さんを見る。

「決断なんてそう急がなくてもいいのよ。迷ったときは、ルナモンに相談すればいいの。もちろん私たちだっているわ。」

淑乃さんは、じゃあまだ仕事があるから。といって去っていった。

淑乃さんは俺のことを心配してくれていた。それなのに、俺は淑乃さんに嘘をついた。

ほんの小さな嘘だけど、罪悪感で胸がいっぱいになる。

ルナモンにも、俺の本当の気持ちを隠していた。

隠していたのはバレバレで俺が一人で悩んでいることは分かっていたみたいけど。

そういえば、俺はDATSに勧誘されてからずっと、一人で抱え込んでいたような気がする。

すぐ側にルナモンが、俺の一番の親友がいたのに。

「ルナモン、ごめんな。ずっと一人で悩んでて。」

「ダイチ……。ううん、いいんだよ。ダイチが笑ってくれれば」

「それで、ルナモンは、DATSに入りたいと思うか？」

俺が尋ねると、ルナモンは笑って、

「ダイチがやりたいようにやればいいんだよ！」

「そっか……。そうだよな。」

俺は立ち上がって薩摩さんの所へ向かった。

「薩摩さん。DATS加入の件ですが、今回の事件だけでは、自分には、まだ判断できないと考えました。……もし、よかったら……また、捜査に参加させていただけないでしょうか？」

「ダイチ……」

薩摩さんは、口元にうつすらと笑みを浮かべ、うなずいてくれた。

我ながら単純な気もする。誰かに言われただけで安心するのだから。淑乃さんもすぐに決断する必要はないって言ってた。

仕切りなおした。また、一からDATSに入るかどうか考え直すことにしよう。今度は、ルナモンと、二人で。

第14話 悪戯

【side 大地】

俺が暇つぶしに街中を散歩していると、知香ちゃんが走ってくるのが見えた。

「よお、知香ちゃん」

俺は挨拶したが、知香ちゃんは気づかなかったのか横を通り過ぎて走り去っていった。

『知香ちゃん、泣いてた？』

ディーアークの中から、ルナモンが言った。

確かに、すこし顔も赤かったし、泣いているように見えた。どうかしたんだろうか？

「お、大地。知香のやつ見なかったか？」

知香ちゃんが走り去った方向を見ると、後ろから声がした。振り向くとマサルとトーマがいた。

「知香ちゃんなら、さっきあっちの方向に走っていったの見ただけ・何かあったの？知香ちゃん泣いていたようだけど」

「ああ、それがよ……」

俺はマサルとトーマさんに詳しいことを聞いてみることにした。

二人の話をまとめるところだ。

知香ちゃんは、マサルとアグモンと一緒にトーマさんの家の食事に誘われたらしい。

そこで、マサルとアグモンはマナーとかまったく気にせずに食べていたそうだ。

そのことを恥ずかしく思ったのか知香ちゃんはマサルに対して、

「マサル兄ちゃんなんて、道で転んでぶつかって、看板に当たって、橋から落ちて、車に追いかけて、タンカーに轢かれちゃえばいいのよ！」

といってトーマさんの家を飛び出していったらしい。

なんとまあ、マサルらしいというか……

そりゃ、知香ちゃんも怒るよ。知香ちゃんしっかりしているし。

それだけで済んだならよかったんだけど、それからマサルには奇妙なことが続いた。

知香ちゃんの言葉通り、マサルはバナナの皮で滑って転んで後ろにいたアグモンとぶつかって、看板にも当たったらしい。

まるで、知香ちゃんが呪いをかけたかのように

『ルナモン、お前デジモンの気配分かったよな？アニキの後ろにデジモンいるだろ？』

アグモンがそういった。

「どういうこと？」

俺はマサルに尋ねる。

「ああ、こいつさっきから同じこと言ってるんだ。でもよ、デジモンなんて見えないだろ？」

俺はマサルの後ろを見るが何も見えない。

「ルナモン、どうだ？」

『うん……。一応このあたりにデジモンの気配はするよ。でもちよつと弱いの』

「何も見えないし気のせいだって。」

ルナモンの言葉にマサルは言った。

「次って橋から落ちて……だっけ？」

俺は聞く。トーマさんがうなずいた。

「ははは、そんなこと起きるわけないだろ。だいたい、こんなところ橋なんてねえよ」

マサルは笑って答えた。そのまま歩いていこうとする。

・・・が、こけた。転がってきた箸を踏んだのが原因らしい

「は、箸から落ちた」

橋と箸ねえ……。なんてベタな

.....

.....

.....

知香ちゃんも見失ってしまったため、マサルたちはDATSに行くことにしたようだ。

俺も、マサルたちとDATSに向かうことにする。

DATSに入ると、いきなり非常アラームが鳴り響く。

「なんだ！？どうした？」

「デジモン反応です。発信源はDATS本部内。つまり、ここなんですけど.....」

オペレータの白川さんが答える。

驚くメンバー一同。

「アニキだ。アニキからデジモン反応が出てるんだ。」

アグモンがそういった。その言葉にトーマさんはマサルを確保する

よう指示をした。

「俺がわざわざデジモンを連れ込んできたって言うのかよ！」

マサルが叫ぶ。

「その可能性はある。」

「あるかも」

「マサルだしね。」

「ごめん。フォローできないや」

上からトーマさん、ララモン、淑乃さん、俺の順番だ。

「みんな、俺の話を聞いてくれよ。アニキにはデジモンがくっついてるんだ。」

アグモンがそういった。

詳しく聞いてみると、そのデジモンは透明になって、傍にいるそう
だ。

マサルが転んだり、看板にぶつかったり、箸から落ちたのはそのデ
ジモンの仕業らしい。

「じゃあ、さっきまでてつきり彼の間抜けな失敗だと思っていた事
故の数々はすべてデジモンの仕業ということか」

トーマさんがそういった。

マサルは誰が間抜けだと起こるが、トーマさんは些細なことだと言
って切り捨てる

些細なこと……なのか？

トーマは、DATSにデジモンの進入を許したこと、知香ちゃんの言葉を実行するデジモンがいるということが問題だという。

「残りの言葉はどうなっている？」

いつ戻ってきたのか、薩摩さんが聞いてきた。

アグモンとガオモンが知香ちゃんの言葉をそのまま伝えたと、マサルが怒った。

「ふざけるな！ 黙って聞いていればまるで知香が悪いみてえじゃねえか。お前ら、知香がデジモンを操っているわけねえだろうが！」

俺もそう思う。でも、実際に知香ちゃんの言葉を実行するデジモンがいることは事実だ。

マサルは知香を探してくると出て行ったが向こうから台車が走ってきて轢かれそうになった。

「車に追いかけられたー」

ルナモンがのんきに笑ってそういった。

「お前、そののんきに笑ってられないぞ。最後の言葉はタンカーに轢かれるなんだから。」

ルナモンの頭を軽くはたいて俺はそう言った。

「はあ？タンカー？それはさすがに無理でしょ」

「海の上ならまだしも、ここは地上よ」

淑乃さんとララモンがそういった瞬間、再び非常アラームが鳴り響く
今度は何？ と調べてみると、タンカーがこっちに向かってくるらしい。

タンカーの制御もきかない。これもデジモンの仕業なんだろう。
基地内の障壁をすべて下ろして衝撃に備えようとするマサルが止めた。

「タンカーは俺を狙ってくるんだろ？だったら相手になってやろう
じゃねえか。」

そうマサルは言った。

淑乃さんやトーマさんは止めようとする。

「これは、俺とタンカーのタイマン勝負だぜ。売られた喧嘩は買つ。
お前たちはここで見てればいいんだよ」

そういつてマサルは出て行った。

俺はため息をついた。他の人も苦笑いを浮かべている。

あきれたやつだ。デジモンとだけでなくタンカーにまで喧嘩売ろう
とするなんて。

それだけじゃない。ここから出て行ったのは俺らに迷惑をかけない
ようにするためだろう。

俺だけじゃない。他の人もそのことに気づいているのだろう。なんとしてでも解決策を見つけると意気込んでいた。

「ダイチ、知香ちゃんを探そうよ。きっと知香ちゃんなら止めてくれるはずだよ」

ルナモンがそういった。俺はうなずいてDATSから出る。

「あ、待ってくれ。俺も一緒に行く」

アグモンもついてくるようだ。

俺ら3人は知香ちゃんを探し出した。

知香ちゃんはDATSからそう離れていない場所で見つかった。

「知香ー、知香ー!!」

アグモンが叫ぶ。知香ちゃんはその声が聞こえたのかこっちを向いた。

「アグちゃん……？ 大地君まで……。どうしたの？」

「知香のせいでアニキが大変なことになってるんだ！」

知香ちゃんはそこで始めて俺に気づいたらしい。驚いた顔をしていたが、マサルのことを言われ、表情が曇った。

「マサル兄ちゃんの事なんか知らない。」

まだ、トーマさんの家でのことを怒っているようだ。

「知香しかアニキを助けられるやつはいないんだよ」

アグモンはそれでも知香ちゃんに言った。

何で私がという知香にアグモンは、アニキがタンカーに轢かれてしまうという。

「タンカー？ 馬鹿じゃないの。知らないもん」

知香ちゃんはそういつてそっぽを向いた。どうやら信じてはいないらしい。

「知香ちゃん、アグモンの言ってることは本当だよ。あれを見て」

そういつて俺はDATSに近づいてくるタンカーを指差した。

「知香ちゃんが言った言葉をデジモンが実行しているんだ。マサルはDATSに迷惑かけないようにと一人でタンカーに立ち向かおうとしているんだ」

俺がそういつと、知香ちゃんはそっちのほうを向いた。

マサルが走っているのが見える。

「マサル兄ちゃん……！」

知香ちゃんは表情を変え、DATSのほうへと走っていった。
俺とアグモンもその後を追いかける。

「だって本気じゃなかったのに。マサル兄ちゃんが恥ずかしくて、それで腹が立って思いつきでどなっちゃっただけなのに……」

知香ちゃんは走りつつ涙を浮かばせながらそういった。

マサルのところについたとたん知香ちゃんは転んでしまった。

「マサル兄ちゃん！ 逃げて！」

知香ちゃんはそう叫ぶが、聞こえてはいないようだ。

「それは無理だよ。そういう性格だったこと、知香ちゃんはよく知っているはずだ」

いつの間にかトーマがいて知香ちゃんに話しかけていた。

そのままトーマはマサルに近づく。

俺もその後についていった。

「来るなら来い！」

「君は馬鹿か」

「馬鹿でしょ」

タンカーに向かって叫ぶマサルにトーマさんと俺はそういった。

「な、トーマ、大地、知香！なんでこんなところに」

驚くマサルをよそに、トーマは、あのデジモンは魔法が使えるわけではないという。

今回のデジモンはソウルモンらしいのだが、そのデジモンの能力は透明になることだけ。

見えないことをいいことに好き勝手悪戯しているだけだそうだ。

「マサル、トーマ」

一隻のボートがやってきた。乗っているのは淑乃さん
タンカーまで乗せてってくれるらしい。しかし、トーマが乗り込もうとするとマサルが止める。

これは俺の喧嘩だから手を出すなということらしい。

ボートにマサルが乗り込むとトーマはスプレー缶のようなものを投げ渡した。

「塗料？」

遠ざかるボートを見送りながら、俺はトーマさんにさっきのスプレー缶について尋ねた。

トーマさんの話ではあれはデジモンに反応する特殊な成分でできているらしい。

あれを振り掛けることでデジモンが見えるようになるのか。

「マサル兄ちゃん……」

知香ちゃんが心配そうにつぶやいた。

「ダイチー、白い羽お願い」

ルナモンがそういつてきた。

「白い羽……？　そうか。＞カードスラッシュく　！　白い羽！！」

俺はルナモンの意図を読み、白い羽をスラッシュさせる。

ルナモンはそのままタンカーに向かって飛んでいった。

「知香ちゃん、これ」

俺は知香ちゃんに向けて、ディークを見せ、一つのディスプレイを立ち上げた。

めったに使わないが、ディークにはパートナーが見ている光景を写す機能がある。

その映像を見せたのだ。

「その機能は！？」

一緒にみていたトーマさんは驚いているようだ。

そついや、ディークの機能について話したことあまりなかったし、話しているのはデジモンアナライザーの機能だけだっけ。

「後で説明します。」とだけトーマに言って、俺もディスプレイを覗き込む。

そこには、アグモンがジオグレイモンに進化してソウルモンを倒しているところが写っていた。

マサルは戻ってくると、デジタマを見せて、知香のおかげで勝てたと言った。

「そうだよ、感謝してよね」

知香は顔が赤くなってはいるが照れ隠しのつもりだろう。そうだった。

本当に仲がいい兄弟でうらやましいな。

俺はしばらくあっていない兄弟、家族のことを思い出してすこし悲しくなった。

第14話 悪戯（後書き）

次の更新遅れるかもしれません。

一週間以内には更新しようと思います。

第15話 和菓子

「飯がない……」

俺は冷蔵庫の中をみてそうつぶやいた。

冷蔵庫の中はほとんど空っぽだ。

最近、DATSとかにいつて買い物まったくしてなかったからな。仕方ない。買い物に行きましょう。

俺が買い物に行こうと出かけると、後ろから車がやってきた。

「あら？大地じゃない。こんなところでなにやってるのよ」

振り向くと淑乃さんがいた。

「買い物に行こうと思いましたが、最近いつてなかったので冷蔵庫の中が空なんですよ」

俺がそういうと、

「あなた、今日DATSに顔出してないでしょ。隊長が待ってたわよ。」

といわれた。

俺は買い物を済ませたら行くと伝えて、淑乃さんと別れた。

買い物済ませた俺は、DATSにやってきた。

中に入ると、オペレータの二人、薩摩さん、そして淑乃さんがいた。俺より先に戻ってきたようだ。

俺はいつものように

「薩摩さん、こんにちば。今日は遅くなりました」

と薩摩さんに挨拶をする。

薩摩さんは問題はない、と手を振ってくれた。

今日のDATSはなんかいつもと様子が違う気がする。

「なんか、空気が重いというか、ピリピリしているというか……」

ルナモンもそう感じたみたいだ。

トーマもマサルも居なかったので、淑乃さんに何かあったのか尋ねる。

今回の原因はマサルにあるらしい。

なんでも、おやつ時間のために用意していたお菓子をアグモンが全部食べてしまったんだとか。

それでアグモンが子分の責任はアニキの責任だからアニキが責任を取るとか行って、マサルに責任転嫁したそうだ。

で、マサルはのために『しらとり庵』という有名な和菓子屋でしらとり饅頭という和菓子を買ってくるとか言っただけで帰ってこないらしい

それで黒崎さんと白川さんはピリピリしているのか。

ケラモンの事件のとき思っただけ、この二人怒ると結構怖いからな。

触らぬ神に祟りなしてことで、俺はこれ以上、その話を聞かないことにして、いつもの席に座った。

トゲモンの件以降、俺は、たまにDATSの仕事に参加していた。原作を変えるのが怖くなくなったというわけではない。

でも、ルナモンと別れたくないっていうのもあるし、DATSでのルナモンは、他のデジモンと仲良く楽しそうに遊んでいるので、DATSに入るのも悪くないのかな、と最近はそう考えるようになってきた。薩摩さんに返事はしていないけど。

しかし、デジモンが頻繁に現れているからといって毎日来るわけじゃない。

仕事のほとんどが、事務的な仕事だった。

DATSに正式に所属していない俺は、機密的な内容もある書類に關しては何もできない。

さらに、デジモンが現れても戦闘には参加させてもらえないため、以前のDATSでの様子とほとんど変わらない感じだった。

それでも、もしかしたら俺も戦う必要が出てくることもあるかもしれない。

そう考えた俺は、今特に何もすることがないということで、カードホルダーからデジモンのカードを取り出して、整理することにした。

「大地、それは？」

俺が整理していると、淑乃さんが覗き込んでくる。カードのことが気になっているようだけど、トーマから聞かなかったのかな？

「トーマさんから聞いてませんか？」

ソウルモンの件が終わってすぐ、トーマから、このデジモンカードについていろいろ聞かれたんだけど、そのことは隊長とか淑乃さんに話してないんだろっか？

「トーマ？ 何も聞いていないわ。ソウルモンの件が終わってすぐにアメリカに行っちゃってね」

「アメリカですか！？ なんでまた急に」

「休暇って聞いているわ。いい気なものよね」

淑乃さんは愚痴をこぼしている。

俺からすると、トーマがこんなときに休暇を取るなんて考えにくい。なにか深刻な理由があるのではないだろうか？

「それで、そのカードは？」

「ああ、このカードをディーアークに通すことで、俺のルナモンを進化させたり、別のデジモンの技を使わせたりできるんです。」

「へえ、ちよつと見せて」

淑乃さんに何枚かカードを渡すと、一枚一枚カードを眺めていった。

「ふーん、よくできてるわね。これ、どこで手に入れたの？」

「買いました、なんて言えるわけがない。」

「ディーアークを手に入れたとき、一緒についてきました」

俺はそういつてごまかした。

その後、ララモンに「私のカードがないわ」と文句を言われたが、それ以外何もなく、俺はカードの整理が終わった。

「そろそろ帰ろうかな」

俺がそうつぶやいていると、

「あら？ ポイントC - 307にかすかな反応。なにかしら？」

白川さんがつぶやいた。

しかしその反応はすぐ消えてしまったらしい。

「デジモン反応かしら？」

「分からないけど……ノイズかな？ そういえばC地区ってしらとり庵がある地区じゃない？」

黒崎さんと白川さんが話し合っている。

「あーあ、結局今日はおやつ抜きじゃない。」

黒崎さんが愚痴をこぼす。

「黒崎さん、機嫌悪い……」

淑乃さんがつぶやいた。

「何かいった？」

黒崎さんが淑乃さんをにらんでそういった。淑乃さんはあわてて、

「い、いえ、何も。少し気になるから地区パトロールしてきます。大地、あなたも帰るんでしょう？ ついでに送っていくわ」

そういった。

パトロールついでに俺を送ってくれるらしい。俺はその言葉に甘えることにした。

「マサルのやつ見つけたら、引っ張ってきてね！」

黒崎さんが大声で淑乃さんにいった。

淑乃さんの車にのってしらとり庵のところについた。
マサルがちょうどしらとり庵から出てくる。

「しらとり饅頭は買えたの？ 黒崎さんたちお怒りよ」

淑乃さんが車からでてマサルに尋ねる。

マサルは淑乃さんのほうを向くと、

「ちょうど良かった。」

といって車に乗ってきた。

マサルはそのまま、車を追ってくれと言う。

「車ってどれよ？」

淑乃さんが聞くと、マサルは前の車だと答える。

状況を説明しないマサルに仕方なく、淑乃さんは車を発進させる。

ついた先は、競馬場だった。

俺は一応小学生の身だ。中に入るわけには行かない。

淑乃さんの車で待たせてもらった。

マサルも中学生のはずんだけど……まっさきに競馬場に入っていた。

……いいのか？

『ダイチ、デジモンの気配がする。』

マサルたちが競馬場に入って、しばらくするとルナモンが言ってきた。

「どこに？」

『分からない。なんかものすごく弱い感じで場所までは分からない。でも間違いなくデジモンの気配だ。』

俺はその言葉に車から出て周りを見回す。

しかし、どこにもデジモンの姿は見当たらない。

ルナモンがデジモンの気配がすると言っていなかった試しがない。

俺はそのままそこら周辺を探索してみることにした。

途中でデジモンの気配が消えてしまい、仕方ないので車に戻ると淑乃さんが帰ってきた。

「マサルは？」

一緒にいないマサルについて尋ねる。

「知らないわよ。おじさん探すとかいつて残っちゃったんだから」

マサルは誰か人を探しているらしい。競馬場に残ったようだ。

「あ、そうそう。さっきルナモンがこの辺でデジモンの気配がしたって言ったんですが何かいませんでした？」

俺の言葉に淑乃さんは驚いたようだ。

「え？ ルナモンも？ 実はララモンもデジモンの気配がするって言ってたのよ」

ララモンもデジモンの気配がすると言っていたらしい。しかし、しばらくするとその気配も消えてしまったようだ。

一匹だけなら気のせいかもしれないが、2匹ともデジモンの気配がしたとなると少し気になる。

帰ろうとしていたが、やっぱりDATSに戻って確かめてみよう。

俺は淑乃さんとDATS本部に戻ることにした。

「デジモン反応は検出されていません。」

「淑乃がパトロールに出たときのノイズ以外に本日は何も確認されていません」

DATSについて先ほどの件について尋ねるとそう返された。

「でも、私は確かに感じたの。弱かったけど……デジモンの気配を」
「僕も感じた」

ララモンとルナモンがそういった。

「詳しく調べてみる必要があるな。淑乃、その反応が最初に現れたC地区を徹底的にマークしろ」

薩摩さんは淑乃にそう指示をした。

その後、俺はマサルに会って詳しい事情について聞いた。

しらとり庵はしばらく前から、営業してないらしい。

その奥さんが病気で倒れてしまったかららしい。

その後、親父さんが借金を抱えてしまって、ギャンブルにはまっ
ているとの事。

マサルはしらとり庵の息子と友人で、その親父さんを何とかする
と約束したということ。

約束を果たすまでは、DATS本部には戻らないとまで言った。
マサルって結構友達想いなところあるんだなと感心したものだ。

俺は今、夜の散歩をしている。

警察に捕まるような深夜ではないため大丈夫だろう。

ちなみにルナモンは一緒に外にでている。

見つかるかもという危険性はあるが、そこまで大きな道は通らないようにしている。

なぜ、こんなことをしているかというと、ルナモンは夜が好きだからだ。

ルナモンに言わせると、月が出ている夜は力が増すらしい。

ルナモンは、名前どおり、月が出ている夜がすきで、月光浴をよくしている。

だから、たまにこうやって夜一緒に外に出て散歩しているというわけだ。

「そっぴゃ、ここっぴゃしらとり庵のあるところの近くだよな」

俺がそうつぶやいた。

いつの間にか、結構遠くまで来ていたらしい。

「ダイチ、あれ見て！」

ルナモンがある一点を指差した。

見ると煙が出ている。もしかして……

「あれってデジモンの仕業だよ」

やはりそうらしい。しかもあっちの方向はしらとり庵のある方向だ。俺とルナモンはその方向へ走って向かうことにした。

やはり、デジモンはしらとり庵に現れたらしい。

中に入るとイビルモン1体とピコデビモン3体がいた。

マサルとアグモン、淑乃さんとララモンも一緒だ。

「マサル！ 淑乃さん！」

俺は二人に呼びかける。

「大地じゃない、どうしてこんなところに……」

「夜の散歩中に煙が見えたんで」

「お前らそんなこと話してる場合じゃねえだろ！」

淑乃さんと俺の会話にマサルがつっこんだ。そういわれた俺らは戦闘体勢に切り替える

マサルはそのままイビルモンを殴りつける。

デジソウルが発生し、マサルはそれをそのままチャージする。

「アグモン進化！ ジオグレイモン！！」

ジオグレイモンはイビルモンと向かい合っている。

「イビルモンはジオグレイモンに任せて、私たちはピコデビモンね。大地は下がってなさい」

俺はディーアークを強く握って構えると、淑乃さんが、俺の前に来て、手で下がるように指示する。

「ララモン！」

淑乃さんはララモンに呼びかける

「>ナッツシユート<！」

ララモンは、淑乃さんの言葉で、ピコデビモンたち目掛けてたくさん
の固い木の実のようなものを吐き出した。
ピコデビモンたちはその攻撃を避けきれずに、攻撃に巻き込まれ、
そのままデジタマへと戻っていった。

「捕獲完了ね」

淑乃さんがそういった。イビルモンもジオグレイモンが倒したようだ。

「僕たちは何もしてないけどね」

「いいのよ、大地たちはDATSメンバーじゃないんだから。」

ルナモンの言葉に淑乃さんが笑って答える。

「大地、今から帰るんでしょうけど、一人じゃ危ないわ。送ってあげるから車に乗りなさい。」

俺はその言葉にうなずいて、車に乗り込んだ。

家に着くと、淑乃さんは事後処理があるとかでしらとり庵に戻らなくてはいけならしい。

俺はそれを見送ってから家の中に入っていった。

後日、しらとり庵の営業が再開し、マサルが大量にしらとり饅頭を持ってDATSにやって来た。小さな白い鳥の形をした饅頭で、有名名だけあってとてもおいしかった。

お茶にも合うし、俺も帰りに買っていこう。

俺はそう決め、皆とのお茶会を楽しんだ。

第15話 和菓子（後書き）

忙しい中書いたので、文章おかしい部分があるかもしれません。

誤字、脱字などあったら教えていただけるとうれしいです。

次回も、遅れるかと思っています。

とりあえず1週間以内を目標に頑張ります。

第16話 卵

イビルモンの事件の翌日、俺は知香ちゃんの家遊びに来ていた。俺と知香ちゃんの家は結構近く、俺も知香ちゃんとは仲が良かったため、こうしてたまに遊びに来ている。

だが、どちらかというと俺よりもルナモンのほうが知香ちゃんと仲がいい気がするが。

「知香ー、こんなもの拾ったのだけど」

俺たちが遊んでいると、知香ちゃんの母親である小百合さんがやってきた。

手に持っているのは大きな卵。水玉模様が入っている。

「お母さん！？ どうしたのよそれ！」

「洗濯物干していたらふわふわと落ちてきたのよ」

知香ちゃんの驚く声に小百合さんはのんきにこたえる。

「これでアグちゃんに卵焼きがたくさん作れるわね」

そついつて卵を見る小百合さん

「なあ、ルナモン。あれってもしかしくなくてもデジタマだよな？」
「うん。そうだね」

俺の問いに答えるルナモン。

そう、小百合さんが今もっているのはどう見てもデジタマだ。

前に、デジモンの卵なんて食べようとする人なんていないと思ったけど……

まさかこんな身近にいるとは

「大地君、デジタマって何？」

知香ちゃんが俺に聞いてくる。

デジモンをパートナーに持つ兄がいるのに知らないのか。

「デジモンのタマゴのことだよ、略してデジタマ」

「そのまんまね」

そついつてあきれた表情をする知香ちゃん。

別に俺が名づけたわけじゃないっての。

俺らは、リビングでそのデジタマについて話していると

「母さん！ 知香！！」

マサルが飛び込んできた。その後ろには淑乃さんとトーマさんもいる。

「おかえりなさい」

「どうしたの？あわてて」

知香ちゃんと小百合さんは驚いた表情のまま言った。

デジタマに気がついたマサルはそのタマゴについて尋ねた。

「お洗濯物を取り込んでいたらね、空からふわふわと落ちてきたの。卵焼きをこしらえたらアグちゃん喜ぶんじゃないかと思って」

「いや、だから小百合さん。それ食べれませんから！ アグモンも涎たらすな！」

デジタマをなでながらそういう小百合さんとうまそうだとつぶやくアグモンに俺はそう突っ込んだ。

「ん？ 大地。こんなところで何してるんだ？」

そこで俺に気づいたマサルが尋ねてきた。

俺は知香ちゃんと遊んでいたことを話す。

「そっぴや、トーマさん。帰ってきてたんだ。」

「ああ、つい先ほどね。」

俺の言葉にトーマさんが答える。

トーマさんはそのままDATSに通信で連絡を入れた。

薩摩さんは、孵化する前に本部に運ぶように指示をしたらしい。みんな慎重に行動している。

「デジモンが卵の状態で人間界に現れたケースはこれまで5回確認されているの」

デジタマを囲んで座る俺らに淑乃さんとトーマさんが説明する。

「ララモン、ガオモン、ポーンチェスモン白と黒。それにアグモンだ」

「卵から孵化したデジモンには、そのデジモンに適合したデジソウルを持つパートナーが必要なの」

「僕も淑乃さんも適合者だったからDATSにスカウトされたんだ」

そして、マサルもってことか……

ん？ でも、DATSには全部で7体のデジモンがいるよな？

マサルのパートナー、アグモン

トーマのパートナー、ガオモン

淑乃さんのパートナー、ララモン

薩摩さんのパートナー、クダモン

黒崎さんのパートナー、ポーンチェスモン黒

白川さんのパートナー、ポーンチェスモン白

そして、誰のパートナーか知らないけど、よくお茶くみなどをして
いるカメモンだ。

カメモンとクダモンはデジタマから孵ったデジモンではないってことは、あいつらはまた特別ってことなのか？

そう考えている俺をよそに、淑乃さんはデジタマを運ぼうとする。

しかし、デジタマがいきなり机から落ちた。

「トーマ、落としちゃダメじゃない！」

淑乃さんはトーマさんにそういうがトーマさんは否定した。

それで、デジタマが動いていることに慌てたDATSメンバーは卵を捕まえようするが、卵は逃げるように動き回りなかなか捕まえることができない。

「よし、捕まえた！みんな押さえ込め」

マサルがそう叫ぶとみんな飛び掛り、上に乗った。

「マサル……、それデジタマじゃない。」

俺は冷静にマサルが捕まえているものを指差して突っ込んだ。
マサルが捕まえ、そして今みんなの下敷きになっているのはララモンだ。

ララモンは気絶してしまっている。

「ここにいるわよ」

小百合さんが、そういつてデジタマを指差すとアグモンが飛び掛っていた。

しかし、足を滑らせてアグモンの顎がデジタマに当たってしまふ。

「あ！」

俺らみんなでそう叫んだ。デジタマにヒビが入ってしまったのだ。デジタマはそのまま孵ってしまい、中からデジモンが現れた。

調べてみるとプワモンというらしい。

知香ちゃんはそのデジモンが気に入ったようだ。

今、ミルクを飲ませている。

「よし、とりあえずDATSに運ぼうぜ」

「いや、孵化してしまった以上、このままでは運べない。」

マサルとトーマさんがそう話し合っている。

「どういうこと？」

俺はそうトーマさんに尋ねた。たかが幼年期だ。運べないということでもないはずだが

「デジモンは人の情念に左右されやすいんだ。輸送中に暴れだす恐れがある。」

俺はその言葉を聞いて納得した。

確かに、今までのデジモン、ケラモンやトゲモン、ソウルモンなんかは人間の感情の元、動いていた。

この世界では、デジモンは人の感情に左右されやすいということかなるほどね。

数十分後、マサルの家には大きな機械が運び込まれた。

トーマさんいわく、アンチデザイヤー発生装置らしい。

人の情念を遮断することができるそうだ。

ただ、とてつもなくでかい。

リビングの半分以上を占領している。

「これじゃ飯も食えないだろ！」

マサルの突っ込みも当然のことだと思う。

「そうだ。名前付けないとね。プワモンだから……ぷーちゃん！」

俺がその大きな機械を眺めていると知香ちゃんが言った。

名前ねえ。呼称としてはいいと思うけど進化したらその名前使えるのか？

と思ったが、心の中だけにしまっておく。

「そろそろ帰るか？ルナモン」

俺はそうルナモンに尋ねた。

トーマさんたちも急がしそうでドタバタしているし、長居しても迷惑だろう。

それに、辺りはもう暗くなり始めている。

「もう帰るの？また今度遊ぼうね」

知香ちゃんはそういつて手を振ってくれた。

俺も手を振ってから知香ちゃんの家を出て帰ることにした。

適合したデジソウルを持つパートナー……か。

俺は家に帰ってさっきの話を思い出していた。

そういえば、今までのアニメも後々デジモンを持つ人増えてるんだよな。

『アドベンチャー』ではヒカリ、『02』では賢。

『テイマーズ』では樹里たち。

俺は行ってない世界だけど『フロンティア』でも輝一が仲間に加わった。

ということは、あのプワモンは今後新しいメンバーに加わるのかな？
まだ確定ではないけど、楽しみだ。

………

……

次の日

俺がDATSに行くと、

「勝手なこと言いやがって!!」

マサルは怒鳴るような声が聞こえた。

何かあったのか？ とあわてて入ると、マサルは薩摩さんと対面していた。

「何かあったんですか？」

俺は近くにいたトーマさんに尋ねる。

「実は……」

そういつてトーマさんは昨日あったことについて話してくれた。

昨日、知香ちゃんの家にはプワモンを狙ったデジモンが現れたそうだが、そのデジモンは追い払うことができたが、そのときプワモンがピヨモンに進化した。

薩摩さんは、その急速な進化を知香ちゃんのデジソウルが関係していると考え、検査しようとしたのだという。

あー、確かにそれならマサルが怒るのも仕方ないと思う。

マサルは家族のこと大事にしてるし

「俺は強いやつと戦いたいからここにいるんだ。知香とは違う！
知香にはここは危険すぎるんだよ。それに大地だってDATSには入ってねえじゃねえか！」

そういつてマサルは俺を指差した。

「そのために大地はここでの監視を続けているのだろっ」

隊長は冷静にそういつた。

「なんだと！」

マサルは怒って冷静に判断ができていないらしい。薩摩さんに突っかかるうとする。

「マサル、やめなさい。」

そのときだ。いきなりDATSのドアが開いて、小百合さんが入ってくる。

「薩摩さん、ご無沙汰しております」

小百合さんがそういつた。

薩摩さんはその後、小百合さんと一緒に出て行つた。

知香ちゃんの件に関する話だろうけど”ご無沙汰”って……二人は知り合いなのか？

「ダイチ、知香ちゃんのところ行かない？」

「行つてどうするんだよ」

「知香ちゃんが心配で……」

「気持ちは分かるけどさ。俺らにできることなんて何もないぞ。」

もし、知香ちゃんのデジソウルがピヨモンと適合していたのだとしたら、知香ちゃんもDATSに勧誘されることになるだろう。

適合していなかった場合や、勧誘を断ったらピヨモンと別れることになる。

今俺自身がDATSに入るかどうかの決断をはっきりとできていないっていうのに、そんな俺が知香ちゃんの力になれるわけがない。

俺も知香ちゃんのことを心配ではあるけど、行った所で余計に落ち込ませてしまうことになるかもしれない。

俺は、ルナモンにそう言い聞かせた。

ルナモンは、渋い顔をしていたが、納得してくれたようで、それ以降何も言ってこなかった。

第16話 卵（後書き）

9月いっぱいまでこの忙しさは続きそうです。

1週間以内更新を目標に頑張っていますが、遅れることがあるかもしれない。

ご了承ください。

第17話 究極体

いつものようにDATSでしばらく過ごしたあと、なんだか雨が降りそうだという事で早めに帰ることにした。

その帰り道、河原の近くを通っていると

『ん？』

「どうした？」

『すぐ近くに、アグモンの気配がするんだけど、もう一匹いるみたい。』

「もう一匹？」

『うん。その河原の下のほうだよ』

またデジモンが新しく現れたんだろうか？

アグモンがいるってことは、マサルもいるだろうから大丈夫だと思うけど。

なんとなく気になった俺は、河原の下を見た。

そこには、マサルとピンク色の鳥型デジモンが対峙しているのが見えた。

「あれってピヨモン？」

DATSで話を聞いていたピヨモンがどうしてここに？
よく見てみると、近くにアグモンと知香ちゃんがいる。

マサルとピヨモンは何か話しているようだけど、ここからだよく聞こえない。

「ダイチ、行ってみよう！」

「あ、ちよつ。勝手にディークから出てくるなよ。……はあ仕方ない。俺も気になるし……」

ディークから勝手にできたルナモンの後を追って俺は知香ちゃんの傍に駆け寄る。

「大地君！？」

「これってどういう状況？」

いきなり現れた俺に驚いたようだけど、無視して状況を尋ねた。

話を聞くと、マサルがピヨモンを連れ出したらしい。

マサルは、知香ちゃんがDATSに入ることには反対ということで、ピヨモンをデジタルワールドに追い返そうと考えたようだ。

「率直に言う。今すぐデジタルワールドに帰れ」

「……嫌だといったら？」
「腕ずくで送り返す。」

二人はお互いに譲ろうとしない。
そして、とうとう殴り合いの喧嘩が始まってしまった。

ピヨモンはデジモンだし、人間よりは力があるかもしれない。
でも、マサルのほうが断然経験豊富だ。それに、デジモンの相手だ
って何度もしている。

勝負は一方的な展開となり、ピヨモンはぼろぼろになる。

「お願い！ 大地君止めて！」
「俺が？」

いきなりそう頼まれて俺は驚いた。

喧嘩を止めるって言われても、マサルは絶対とまらないだろうし、
ピヨモンだって知香ちゃんのためと思ってやっていることだ。
どちらかが譲らない限り、この喧嘩は止まらないだろう。

「知香は……ボクが守る！」

ピヨモンがそう叫んで、マサルに飛び出していった。

ピヨモンの拳がマサルの顔面に当たるが、マサルはびくともしない。

「きかねえ、きかねえよ！ そんな拳で知香が守れるか！！！」

マサルは、そう叫んで今度は逆にピヨモンを殴り飛ばす。
ピヨモンを殴ったマサルの拳にはデジソウルが宿っていた。

マサルはそのままアグモンを進化させようとする。

「ちよっ……。そこまでのの!？」

ルナモンが叫ぶ。

俺も、これは流石にまずいかもと思って、止めようとしたが、どこからか手裏剣が飛んできてマサルのデジヴァイスが弾き飛ばされた。

手裏剣が飛んできた方向を見ると、鉄塔の上に忍者のような服装をした鳥型デジモンがいて、こっちを睨んでいた。

「てめえは!!」

マサルが叫び、知香ちゃんも隣で驚いている。

マサルや知香ちゃんの反応から昨日襲われたというデジモンはこのデジモンらしい。

またピヨモンを狙ってきたのだろう。

『ファルコモン 成長期 鳥型 ワクチン種

必殺技は硬質な羽でできた十字型手裏剣を無数に飛ばす>手裏^{しゅりけん}裏^{けん}剣^く』

ファルコモン……俺の知らないデジモンだ。ディーアークに出た情報を読み取り、俺は再びファルコモンのほうを見た。

マサルが殴ろうと拳を振り上げているが、たやすくかわされている。

「ダイチ、あれ見て」

ルナモンがファルコモンとは別の方向を指したのでそっちを見る。そこには、一台の車と、そこから降りた淑乃さんとトーマがいた。

二人はファルコモンを視認すると、デジソウルをチャージして、それぞれのパートナーを成熟期へと進化させた。

「成長期一体に成熟期二体ってひどくないか？」

俺はそうつぶやいたが、ファルコモンは意外と素早く、二人の攻撃をかわしている。

俺も加勢したほうがいいかな？

そう思ってカードを取り出そうとしたが、近くにいたピヨモンが飛び立ったのを見て、手を止めてそちらを見た。

ピヨモンは、そのままマサルを背中に乗せ、ファルコモンに突っ込む。

マサルはファルコモンを殴ってデジソウルが発生。

「よくやった、ピヨモン。後は俺たちに任せろ！デジソウルチャージ」

「アグモン進化！ ジオグレイモン！！」

ジオグレイモンがメガバーストを放つ。

ファルコモンはマサルに殴られたダメージで動くことができない。
これで決着かに思えた。

しかし、ファルコモンに当たる直前、空から雷がおちてきて、メガバーストを打ち消した。

「メガバーストを打ち消した！？」

トーマさんが驚く。

俺を含むほかのメンバーも同様だ。

「ファルコモン、下がれ」

俺らが驚いていると声が聞こえ、巨大なデジモンが現れた。

「な、なんだよあのデジモンは……」

俺は一人そうつぶやいた。

とても威圧感のあるデジモンだ。あのチンロンモン達四聖獣にも匹敵するかもしれない。

俺は、震える手でディーアークをむける。

しかし、

「データが出ない!？」

情報が出てこないのだ。

敵がすごく強いデジモンだったり珍しいデジモンの場合はデータが出なかったり、出るのが遅かったりする。

今回もそうなのかもしれない。

『お前たちのかなう相手ではない。撤収しろ!』

クダモンからの通信が入る。

確かにこの威圧感。勝てる相手ではないだろう。

「へっ、喧嘩番長大門マサル様が下がれて言われて引き下がるかよ!　いくぜ!！」

マサルは通信の声を無視して、そのデジモンに突っ込んでいった。しかし、巨大なデジモンが手を振った風圧で吹き飛ばされてしまう。ジオグレイモンたちもその直後の巨大なデジモンの攻撃が当たって、成長期に戻ってしまう。

どうすればいいんだ……. と思つてるとようやくディーアークからの情報がでた。

『メルクリモン　究極体　神人型　ウイルス種

必殺技は高速で接近し両腕のこぶしから無数の連打を繰り出す>
サウザンドフィスト<』

「やっぱり究極体……」

俺はつぶやいた。この威圧感だ。そうだろうとは思っていた。

「おろかなる人間たちよ」

メルクリモンがしゃべった。

「このメルクリモンが裁きの鉄槌を下してくれる。」

そういつてメルクリモンは何かの攻撃の構えに入る。

「ダイチ、僕たちも戦おう！」

ルナモンの言葉に、震える体を抑えて俺は構える。

相手は究極体だ。こっちも究極体にならなければ勝てないだろう。
俺はディーアークを前に突き出した。

「い、行くよ！ ルナモン！」

「うん」

ディーアークから眩い光が発せられ、その光に包まれる。

……いつもならそうなるはずだった。

「何で……。何で進化できないんだよ！」

ディーアークを何度も突き出すが、何の反応もしない。

「ダイチ、危ない！」

ルナモンが叫ぶ声に反応して、前を向く。

そこには、攻撃準備を終えて、光線を放っているメルクリモンがいた。

「くっ……カードスラッシュ！ <ブレイブシールド>!!」

俺はとっさにカードを取り出して、防御する。

使ったカードはブレイブシールド。ウォーグレイモンが使う盾だ。

その盾をルナモンが受け取り、光線を受け流そうとした。

しかし、体格的にも小さなルナモンが完全に攻撃を受け流せるわけもなく、少し吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。

「大地!!」

誰かが叫ぶ声が聞こえた。

顔を起こして前を見ると、マサルが吹き飛ばされて、ピヨモンがメルクリモンに突撃していくのが見えた。

「ピヨモン！」

知香ちゃんがそう叫ぶ。

「知香は僕が守る！ デジタルワールドに帰れ！！」

ピヨモンがそういつてメルクリモンに体当たりをする。

しかし、成長期と究極体。かなうわけがない

ピヨモンはデジタマに戻っていった。

「ピヨモン！！！！！！」

知香ちゃんの叫ぶ声を最後に俺は意識を手放した。

第18話 絶望

【side マサル】

大地がやられ、ピヨモンもデジタマになってしまった。

『お前たちのかなう相手ではない。撤収しろ！』

通信機からクダモンの声が聞こえる。

だけど、俺はピヨモンと大地を倒したこいつが許せなくて殴りかかろうと突っ込んだ。

しかし、こいつの腕の一振りで吹き飛ばされて全然殴れねえ。

このまま負けてしまうのか……？

と考えたが、メルクリモンは何を考えたか、ピヨモンのデジタマを持ち、ファルコモンと一緒にデジタルワールドへと帰っていった。

俺たちは、気絶している大地を背負ってDATSへと帰ることにした。

DATSで、隊長からメルクリモンが究極体だということを知らされた。

もつとも神に近い存在のデジモンだということらしい。

なぜ、そんなやつが人間界に現れたのか話していると、

「やつの目的は、人間界を滅ぼすことか」

トーマがそういった。

人間を恨んでいるような口ぶりであつたし、ありえないことではない。

「だったら、今すぐメルクリモンをぶつとばさねえと……」

「やめて!!」

俺の言葉に知香が叫んだ。俺は知香のほうを見る。

「どうしてデジモンと人間が戦わなくちゃいけないの？ 私とピヨモンと一緒にすごせた時間はちょっとだったけど、でも私たち友達になれたんだよ。デジモンと人間が仲良く暮らせる方法だってきつとあるはずだよ」

そういつて知香は泣き出してしまふ。俺は言葉に詰まってしまった。

「薩摩さん、なんてことをしてくれましたか!」

そのときだ、DATSのドアが開いて見知らぬ人がやってきた。

「羽柴長官」

隊長がそういった。

「長官？」

「国家機密省のお偉いさんよ。大地がここにいないくて良かったわ。彼のことはまだ上に報告してないの」

俺のつぶやきに黒崎が答えてくれた。

長官とか言っちゃつは、DATSの不手際をぺらぺらと話してくる。

「現場にもいなかったやつが偉そうに……」

俺はその長官が気に食わなくて殴りかかろうとした。母さんに止められてしまい、結局殴れなかったが。

「長官、次こそDATSの使命を果たしてごらんにいれます。」

隊長はそういった。

「いや、もうあなたたちには何もしてもらわなくて結構」

長官はそういった。

どういうことだ？

「DATSには解散してもらいます」

長官は続けてそういった。

「解散だつて!？」

【side 大地】

「ん……ここは……？」

「あ、良かったー。ダイチ、気がついたんだね」

俺がふと目を覚ますと、目の前にはルナモンがいて、俺の顔を見て、飛び掛ってきた。

俺は、そのルナモンを軽くいなして周囲を見渡す。

あまり来たことはないけど、どうやらここはDATSの医務室のようだ。

何でこんな所にいるんだ？ と今までのことを思い返す。

「確か、メルクリモンの攻撃を防げなくて……」

そのままやられてしまったんだっけ。

最後に見たのは……

（知香は僕が守る!!）

そのピヨモンの言葉を思い出した瞬間、俺の過去の出来事がフラッシュバックした。

俺の一番のトラウマともいえる、デビモンとの戦いのことだ。

（丈ー！ 危ない！）

（空は私を守る！！）

（光子郎はん、早く逃げるんや）

（ミミには指一本触れさせないんだから！）

そういつてデビモンにやられデジタマに帰っていったデジモンたち。

「どうしたの？ ダイチ」

ルナモンの言葉に俺ははっとしてルナモンに詰め寄った。

「ピヨモンは？ ピヨモンはどうなった！？」

俺がそう尋ねると、ルナモンは顔を伏せる。

「まさか、ピヨモンは……」

「うん……。メルクリモンにやられてデジタマになっちゃった……。」

「そんな……。それじゃあ……。俺はまたやってしまったのか？」

誰に問うわけでもなく俺は一人つぶやいた。

そのときだ。

「大地。気がついたか。」

扉が開き、薩摩さんが入ってくる。

「無事で何よりだ。どこか調子が悪いところはないか？」

薩摩さんの心配する言葉に俺は首を横に振った。

「……マサルや、知香ちゃんたちはどうしてます？」

自分の体よりも、そのことが気になって、俺は薩摩さんに尋ねた。

「先に帰った。上からDATS解散の命令が出てしまつてな」

「DATS解散！？　嘘でしょ！？」

薩摩さんの言葉にルナモンが驚きの声を発した。

俺も、声には出さなかったが、目を見開いて驚く。

「残念だが、本当だ。今、その件で国家機密省の長官が来ている。」

「……そう、ですか。じゃあ俺がここにいるのはまずいですね。」

以前、薩摩さんと二人きりのときに聞いたことがある。

まだ、俺のことを上の方には報告していないってことを。

理由を聞くと、俺がDATSに入るか決めていないからだそうだ。上に報告すると、俺の年齢から考えて、強制的に記憶を消される可

能性もわずかながらある。さらに、DATSのデータベースに存在しなかったルナモン。研究のためということで、ルナモンだけ連れて行かれるかもしれないと言われた。

俺は、この話を聞いて、俺のことを真剣に考えていることが分かり、本当にうれしくなって頭を下げた。

薩摩さんには謝られたが、俺は傷の痛みを無視して立ち上がる。

そのまま薩摩さんに挨拶をして、こっそりとDATSから出て行った。

……
……
……

家に帰る途中、俺は一言も言葉を発しなかった。

悪いことは続くものだ。

究極体へ進化できなかったこと

ピヨモンがデジタマに戻ってしまったこと

DATSが解散してしまったこと

もしかして、俺が原因なんだろうか？

また、俺が誰かを悲しい目にあわせてしまったのだろうか……

この世界はアニメ……原作がある。

あそこで、ピヨモンが死ぬのは原作どおり？ それとも違う？

分からない……

俺のせいでDATSが解散した？

俺のせいで原作が変わってしまった？

いくら考えても答えは出ない。

俺がこの原作をしらないからだ。

気がつくと、俺は自分の家の前に来ていた。

すぐ近くには知香ちゃんの家がある。様子を見に行こうと思えば、すぐの距離だが、そんな気はまったく起きなかった。

俺のせいで、ピヨモンが死んでしまったかもしれないんだから……

俺は家のドアを開け、中に入った。

【side ルナモン】

家に帰りつくと、ダイチは僕をディーアークから出して、部屋の隅でうずくまってしまう。

DATSから出てから一言もしゃべっていない。

きっと、ダイチはあのピヨモンを見て、あのことを思い出しているんだと思う。

あの、僕がやられちゃったあのことを……

ダイチはこの世界もアニメの世界なんだと思っている。

だからこそダイチは見つからないように行動していたし、DATSに入るのをためらう。

最近、みんなと一緒に戦ったりもしていたけど、ダイチは基本的に関わりたくないと思っている。

自分は、この世界の登場人物じゃないから。

僕にはよく分からない。

ダイチが迷ったときは、いつも、ダイチがやりたいようにやればいいって言ってたし、

今までの世界でも、ダイチがそう決めたっていうならそれでいいって思ってた。

でも……今のダイチは……

僕、こんなダイチ見たくないんだ。

ダイチはいつも笑ってていてほしいんだ。

僕は、ダイチが適当に放り投げたディーアークを手にとってそう強く願った。

第19話 決意

俺が家に帰ってきてからどのくらいだっただろうか。

落ち込んでいても、腹は減るもので、俺はキッチンに立って夕飯を作ることにした。

というより、何かしていないとすぐあのことを思い出してしまいそうで嫌だったのだ。

「ルナモン、飯できたぞ」

皿を食卓に並べて、テレビをつける。

テレビでは、船の上からの様子を映していた。
すぐ近くの海からの生放送のようだった。

俺はルナモンが席に座ったのを確認して、一緒に食べることにした。

しばらくすると、テレビから、なにやら慌てたような声が聞こえる。
何かあったのかと思って見ると、カメラが空そこを映し始め、に大きな鳥が映っていた。

「あれってアキラモン!？」

ルナモンが箸を止め、テレビに食い入る。

「ダイチ！ 行こう！」

「行きたくない……」

俺は即答した。

「どうして!？」

「俺がここから動かなければ、原作が変わってしまうこともない。もう、俺のせいで誰かを悲しませるようなことはしたくないんだ。」

俺はルナモンから目を背け、そう答える。

「DATSも解散してしまったし、もう関わる必要なんてないんだ。これからは一緒に神珠探しに専念でき……」

「ダイチ!!！」

俺の言葉を遮ってルナモンが叫ぶ。俺はびっくりしてルナモンを見た。

いつもののんきな顔と違う、真剣な顔をしている。

「ダイチはいつまでそうやってるの？ この世界がアニメの世界だなんてそんなの関係ない！」

「関係ない……?」

ルナモンは頷いた。

「今までの世界だって、ダイチはそのアニメを知っていたかもしれない。でも、それはただのアニメじゃないか。ダイチがいる時点で

それは現実なんだよ」

「現実……」

俺がつぶやく。

「そうだよ。ダイチだってそこで怪我をすれば痛かったでしょ？
ご飯食べればおいしかったでしょ？ だったら、その世界はアニメ
の……偽物の世界なんかじゃない。本物なんだ」

ルナモンが俺の目を見てそういつてくる。

「ダイチはただ、未来を少し知っていただけ。それでいいじゃん。
その未来を変えたらいけないなんて、そんな決まりはないよ。」

「だけど……」

「もしかして、ダイチは未来を変えたら僕がまた死ぬ。そうしたら
今度は僕が離れていってしまうかもしれないって考えてるの？」

「そんなこと……」

「ない」とは言い切れなかった。確かにそう思っている部分もあったからだ。

ルナモンは続けて言う。

「もっと僕を信じてよ。自分だけで抱え込まないで頼ってよ。僕は
ダイチのパートナー、一番の友達なんだから」

「でも……もしまたそのせいで悪いことになったら？」

俺はつむぎだすような感じで言った。

「そのときはそのときだよ」

そういつてルナモンは笑った。俺も釣られて笑ってしまう。

「ぶっ、なんだよそれ」

「それでいいじゃない。どんな結果になったって僕はずっと君とい
るよ。」

ルナモンはそういつてくれた。

ああ……そうか……

今までが間違っていたのか。

俺はルナモンの言うとおり、今までの世界は偽物なんだと思っ
ていた。

悲しんでいる人がいる……それも決められたこと

怒っている人がいる……それも決められたこと

そう考えていた。ああ、なんだ。間違っていたのか。

俺はルナモンの言葉に一筋の光が見えた気がした。

原作なんて変えてもよかったんだ。別に原作を守る必要もなかったんだ。

アニメはアニメ。俺という存在がいることで、すでにそこは別の世界なんだから。

ごめん。太一たち、選ばれし子供たち

ヒカリが新しい選ばれし子供と知りながら、黙っていた。

アグモンがデジモンカイザーに捕まると分かっているながら見過ごした。

ごめん。タカトたち、ティマーたち

クルモンが十二神将^{デーヴァ}に狙われていると知りながら守らなかった。

レオモンが、死んでしまうと知りながら見殺しにした。

この世界だって元はアニメの世界だったのかもしれない。

でも、この世界だって本物なんだ。

もう迷わない。俺は自分の信じた道を進む。

これ以上、誰も悲しい思いをさせないために。

頼りになる、俺のパートナーと一緒に。

俺がそう決意すると、腰につけているカードホルダーが光りだした。

よく見ると一枚のカードが光っていることに気づく。

「信頼の……紋章……」

そのカードは俺がアドベンチャーの世界からティマーズの世界に来たときにカードに変わってしまった信頼の紋章だった。

「ごめん。ルナモン、俺こんな単純なことに気づかなかったなんてな」

「気にしないでよ、ダイチ。」

そういつて俺らは笑いあった。

笑いあった後、俺たちは、テレビに映っていた海の近くへと走った。

……………

………

デジモンが現れたという海の近くまでやってきた。

遠くでは、沈みかけている船が見える。中には誰も乗っていないようだ。

おそらく、デジモンにやられたのだろう。

「ダイチ、あれ！」

ルナモンが一点を指差す。俺はそっちを向いた。

見たのはさっきテレビに映っていたアクイラモンだった。海の方を見ると、モーターボートに乗ったマサルたちも見える。

（チカ……）

何か声が聞こえた。

「ルナモン、何か言ったか？」

俺の言葉にルナモンは首を横に振った。

空耳か？ と首をかしげていると

（チカ……、ドコニイルノ？ ……チカ……）

「え！？ 今知香って……」

今度は間違いなく聞こえた。それもあのアクイラモンからだ。

「僕も聞こえた！ ってことは……あれって……ピヨモン！？」

ルナモンにも聞こえたらしい。

どうやらあのアクイラモンはピヨモンが進化したようだ。

でも、どうしてだ？ ピヨモンはデジタマになってデジタルワールドに帰ったと聞いていた。

しかも、こんな短時間で成熟期まで進化するなんて……

俺が再びアクイラモンを見ると、アクイラモンはマサルたちのほうに攻撃を仕掛けた。

モーターボートがひっくりかえって、マサルたちは海に落ちる。

「マサル！ トーマさん！！」

俺はそう叫んで、海に飛び込んだ。

【side マサル】

「う……」

俺が目を覚まして、あたりを見回すとトーマとガオモンが倒れていた。

そうか、ピヨモンの攻撃にやられて・・

「アニキ、大丈夫か？ダイチとあのおじさんが助けてくれたんだ」

アグモンは、そういつて指をさした。

その先には、大地とデジヴァイスのおっちゃんがいた。

「ピヨモンは？」

俺の言葉に大地は海の方こうを指す。そこは煙が立ち上っていた。

俺は、あわてて向かおうとするがデジヴァイスのおっちゃんに止められてしまう。

「お前さんが行っても無駄じゃよ」

「なんだと!」

「今のお前さんでは誰に勝つこともできんじやろ」

デジヴァイスのおっちゃんは、俺にそういつてきた。

喧嘩番長のこの俺が誰にも勝つことができないだつて？

どうしてだと尋ねると、今のお前ではこのワシにすら勝つこともできないといわれる。

その言葉にかつとなっておっちゃんのほうに向かっていくが、あっさりとおしらわれてしまった。

「くそ、なぜだ。喧嘩番長のこの俺が」

「分からんかな、己の未熟さが。ならば行け。行ってそして思い知ることじゃ」

俺のつぶやきにおっちゃんはその返す。

「言われなくても行つてやる！大地、トーマのことは任せたぜ」

「あ、ちよつと……マサル!？」

俺は大地の言葉を見無視して煙の見える方向に走つていった。

【side 大地】

「ありがとうございます。助けるの手伝ってくれて。」

俺はマサルたちを助けるときに一緒に手伝ってくれたおじいさんに

礼を言う。

「構わんよ。」

そつおじさんは答えた。

「お前さんが、大地かの？」

「え？ はい。そうですが……」

いきなりおじいさんから俺の名前を言い当ててきたからびっくりする。

マサルにデジヴァイスを渡すときなど見かけたことはあっても直接話をしたことはない。

俺の名前を知ってるわけがないのに

「薩摩からいろいろ話は聞いておるよ。わしは湯島。DATSの所長をやっておる。」

所長……薩摩さんより偉い人ってことか。デジヴァイスを持っていたり、デジモンを見ても驚かないのはそういう理由だったのか。

俺も簡単に自己紹介をした後、俺はルナモンにマサルの様子を見に来るように言った。

「お前さん、薩摩から話を聞いていたのと少し違っておるの」

ルナモンを見送っていると、湯島さんがそういった。

「え？」

「薩摩からは、時々迷ったような目をしていると聞いておったが……。今は強い、いい目をしている。」

「……いろいろありまして。もう悲しむ顔を見たくないんです。」

俺はそう答える。湯島さんは満足そうにうなずいた。

俺は湯島さんとの会話のあと、ディーアークのディスプレイを立ち上げ、ルナモンの視点を映し出した。

映った先には、ジオグレイモンともう一匹、アキラモンではなくガルダモンがいた。

「ガルダモン！？ まさか、もう一段階進化したっていうのか？」

ガルダモンは、ジオグレイモンに攻撃。ジオグレイモンはそのまま倒れてしまう。

それと同時に雨が降ってくる。

「うう……」

うめく声が聞こえてディスプレイから視線をはずす。

トーマさんがおきたようだ。

「トーマさん、大丈夫ですか？」

「大地……か？どうしてここに……」

「テレビにアクイラモンが映ってたんでやってきたんです」

俺はトーマさんにそう返した。

トーマさんはその言葉にはっとしてあたりを見回した。

煙が立ち上るところを見て

「早く行かないと……！」

そういった。

そのときだ、ドン！という大きな音が響き渡り、光の柱が空へと伸びた。

何かあったのか？ とディーアークのディスプレイを見る。

そこには、ジオグレイモンが進化したであろう姿が映っていた。

俺はそのまま情報を出す。

『ライズグレイモン 完全体 サイボーグ型 ワクチン種
必殺技は3発同時に弾を発射する>トライデントリボルバー<と

翼の3連ビーム砲と胸部発射口からビーム弾幕を放つライジン
グデストロイヤーく』

「アグモンが完全体に……」

トーマさんが驚いた表情でそうつぶやく。

「心の成長が新たな進化を呼び覚ます。大切なモノが何か気づいた
ようじゃな」

湯島さんは、そうつて去っていった。

俺らも、マサルと合流し、いったんDATSに戻ることにした。

なんでも、アクイラモンの件で国家機密省の長官を言い負かし、D
ATSの解散はなかったことになったらしい。

DATSに持ち帰ったピヨモンのデジタマからはメルクリモンの反
応が検出された。

「やっぱりメルクリモンの奴が元凶だ。アイツを倒さない限り、本
当の平和は訪れやしねえ。行くぞ、デジタルワールドへ！」

マサルがそうつ叫ぶ。

「俺も……俺も行く！」

俺はそう叫んだ。

「大地、君はDATSの隊員じゃない。こっちでおとなしく待っているんだ」

トーマさんがそういつてきた。

俺はその言葉を見殺して薩摩さんのほうを向いた。

「薩摩さん、いえ、隊長。俺をDATSに入れてください！」

俺はそういつて頭を下げる。

みんなは驚いている。

もう迷わないいつて決めたんだ。俺はDATSで守るために戦いたいんだ。

「……よからう。菅原大地。君のDATS入隊を許可する。歓迎しよう」

隊長は、俺をしばらく見て、そういつた。

第20話 突入

俺もDATSに入り、マサルたちも歓迎してくれた。

士気も高まって、さあ、デジタルワールドへ行こう！ と思ったら、隊長に止められる。

なんでも話があるらしい。

話の内容は、マサルの父親に関することだった。

マサルの父親は、デジモン研究の第一人者だったらしい。

なんでも、10年前にデジタルワールドが発見され、さまざまな分野の人を連れてデジタルワールドに行ったらしい。

しかし、その探検隊はデジモンの襲撃にあったりして危険にさらされた。

その危機を救ってくれたのが、マサルの父親だという。

その人のおかげで、探検隊は無事デジタルワールドから戻ることができた。

しかし、マサルの父親はそのままデジタルワールドで行方不明になった。

そして、今もその行方が分かっていないそうだ。

「マサルのお父さんってすごいんだねー」

ルナモンが関心したようにつぶやいた。

俺も正直驚いた。でも、同時に納得したこともある。

マサルの母親、小百合さんのことだ。

小百合さんは、薩摩隊長と知り合いのようだった。きっと、この探検隊の時に知り合ったのだろう。

「デジタルワールドは未だ謎に包まれた未知なる世界だ。我々の想像を超えた脅威が待ち受けているに違いない。最悪の場合、大門博士のように戻れなくなる可能性もある。それでも行く覚悟があるか？ 気持ちが変わらなければ明日0830時に集合しろ」

隊長は、最後にそういった。

一番の関係者であるマサルは、隊長の話が終わると真っ先に出口の方へと走って行った。

きっと、小百合さんに話を聞きに行ったんだと思う。

「大地、ついてきなさい」

マサルが出て行ったのを見ていた俺に隊長が声をかけてきた。

言われるままに隊長の後をついていく。

ついた場所は、隊長に勧誘されたときと同じ応接室だった。

そこで、隊長から紙袋を渡される。

俺は受け取って隊長のほうを見ると、隊長は黙ってうなずいた。俺は疑問に思いながらも、その紙袋の中を見た。

中には、いつもマサルたちが来ているようなDATSの制服と耳につける通信機が入っていた。

「これは君のものだ。」

俺は驚いて、隊長の方を見ると、隊長はそういった。

その場を少し離れ、着替えてから隊長の所に戻る。

本当にDATSの一員になったという気がして、ドキドキした。

「ふむ。サイズは合っているようだな」

クダモンがそういった。

「よく、ダイチにあったサイズの服があったね」

ルナモンが笑っている。確かに、そのとおりだ。

一応、俺は小学生なわけだし、このサイズの制服があるというのはおかしい。

「大地はいずれ、DATSに入るであろうと思っていた。そのときのために作らせておいたのだ。」

隊長が俺を見てそういった。

……俺はDATSに入るかどうか迷っていたというのに……

隊長は俺を信じてくれてたってことか。

「ありがとうございます。隊長」

俺が隊長にそういつて頭を下げると、隊長は口元に笑みを浮かべる。

「しかし、いいのか？」

「え？」

隊長はさっきの笑みから、真剣な顔になって聞いてきた。俺は聞き返す。

「大地、君はまだ小学生だ。DATSに入ったからといって、デジタルワールドに行くのは危険なことだらけだ。反対する親、親戚がないからといって本当に行く決めていいのか？」

隊長はそう聞いてきた。

「はい。もう、迷わないと決めたんです。それに、メルクリモンが人間界とデジタルワールドの壁を壊しているんだとしたらほっとけません。」

「帰れなくなる可能性があつたとしてもか？」

俺はうなずく。

「……そうか。ならもう何もいっまい。」

隊長は俺の目を見ると、そういつてくれた。

「いざとなれば、ディーアークがありますし。」

俺はそういつてディーアークを取り出す。

「どうということだ？」

クダモンが尋ねてくる。

俺は、ディーアークでデジタルゲートを開くことができると話した。もともと、この世界で自分の思ったとおりに行動すると決めたときから俺は話そうと思っていた。

万が一事故で帰れなくなったとしても、これさえあれば俺は無事に帰りつける。

一人でもこつちとの連絡が取れるなら、救出もずっと楽になるだろう。

隊長は驚いていた。まあ、当然か。

俺は、5年前にたまたまゲートが開いたデジタルワールドでルナモンと出会い、そのときにディーアークも手に入れたことを話した。

ディーアークでゲートが開けると知ったのは最近で、それから何度かデジタルワールドへ行ったことも。

……嘘じゃないぞ。ただ、この世界のデジタルワールドじゃないし、ディーアークだって、デジヴァイス、D-3から変わったものだと

いうことを話してないだけだ。

隊長に、試しに開けてみてくれといわれ、ゲートを開く。

画面には、もう見慣れたデジタルゲートの画面が写っていた。

俺は、ディークをその画面に向けてデジタルワールドへと移動する。

今回は見せるだけってことで、俺はすぐに元の世界に戻ってきた。

「驚いた。まさか本当に開けるとは」

隊長がそつつばやいた。

隊長は、試しにつてことで、隊長自身が持っているデジヴァイスをゲートが開いている画面に向けたが、移動することはできなかった。

「……大地、そのディークを貸してもらえないだろうか？」

隊長はしばらく考えて、そういった。

「何をするんですか？」

俺はそう聞き返す。

「さっき試したとおり、私たちのデジヴァイスではそのディークで開いたゲートを通ることはできなかった。そのディークを解析すれば、私たちのデジヴァイスでもゲートを通ることができるようになるかもしれん。」

隊長の言葉に俺は考える。

このディーアークは、俺とルナモンを結ぶ大切な絆ともいえる。もちろん、こんな物がなくなったらルナモンとの絆が壊れることはないが、それでもとても大切なものだ。

だけど、もし、俺だけじゃなくてマサルたちもこのゲートを通ることができれば、デジタルワールドに残されるという危険性が減ることも事実。

隊長、薩摩さんはすこし見た目怖いけど、実はとても優しい人だ。信用もできるだろう。

「わかりました。」

俺は一人うなずいて、ディーアークを渡した。

「いいのか？ これは命令ではない。拒否することもできるのだが」「いえ、大丈夫です。ただ、壊さないでくださいよ」

「ありがとう。明日には返す」

隊長はそう言ってディーアークを受け取った。

「しかし、ディーアークのことは誰にも言わないほうがいいだろう」「クダモンが俺を見てそういった。

「なんでー？」

ルナモンが俺の代わりに尋ねる。

「デジタルゲートを自在に開けるものがあるなどと、上の者に知られたくないからだ。」

クダモンは答える。上の者っていうと……あのときの長官とかかな？

「本来、デジタルゲートは、DATS管理下の元で開くことができるものとなっている。それが、もしそれ以外の方法で開くことができるとしたらDATSの威信にもつながってくる。」

俺は、このことは言わない、そして、本当に緊急の時以外使用しないということを約束させられた。

………

………

………

ディーアークを薩摩さんに預けたことでルナモンを人目に見られずに帰るということが困難になってしまったため、俺は淑乃さんに送ってもらって家に入った。

「ダイチー、おなかすいたー」

「家に帰っての第一声がそれかよ。」

俺はルナモンの言葉に突っ込んだ。

だが、仕方ないか。飯の途中で飛び出していったわけだし。

俺は家を出る前に作っておいた料理を温めなおすことにした。

「ダイチー。また冒険の始まりだね」

食事中、ルナモンがそういった。

俺はその言葉にうなづく。

今までもデジタルワールドを旅してきたことはある。

でも、今回は今までと違う。

本当に何も知らない状態からの冒険なんだ。

期待と不安が胸のなかで入り混じる。

「この家にもしばらく戻ってこれないな」

俺はそうつぶやいた。

ディーアークを使えばいつでも帰ることはできるが、隊長との約束がある。

神が用意してくれた家だが、しばらく住んでいて愛着もある。寂しいような気分になった。

「大丈夫。ダイチならまた戻ってこれるよ」

ルナモンが笑ってそういった。

「ああ、”信頼”してるぜ。ルナモン」

俺はそういつてルナモンのほうを向き、同じく笑った。

.....

……

次の日、俺がDATSのドアをくぐるとすでにみんなそろっていた。

「よう、大地」

マサルが俺に挨拶をする。

「お前も制服もらったのか。似合ってるじゃねえか」

マサルがそういつて笑った。
ちよつと、照れくさかった。

トーマは、あれからマサルの父親に関することを調べてみたらしい。
しかし、極秘情報となっており、何も分からなかったそうだ。

「デジタルワールドに行けばきつとわかるよ。」

俺はトーマにそういつた。

最優先はもちろんメルクリモンだが、マサルの父親に関することを
調べられるかもしれない。

俺も気合入っているが、マサルはそれ以上に気合が入っているよう
に見えた。

「うわー、すごいお弁当だねー」

俺らが話しているとルナモンの声が聞こえた。
ルナモンの目線をたどると、風呂敷で包まれた5段重ねの弁当があった。

「母さんがよ、みんなのためにって用意してくれたんだ」

マサルがそういった。

「ピクニックじゃないんだぞ」

「アニキ、トーマは小百合の卵焼きいらないってさ」

トーマの言葉に、アグモンがそういう。

トーマは、それに動揺しているようだ。

いや、あの小百合さんの卵焼きは確かに絶品だったけど、そんな動揺するほどのものかな……

そう考えていると、ドアが開く。
隊長がやってきたようだ。

「決意は固まったようだな」

クダモンがそういった。

俺ら全員はうなづく。

隊長は、俺のほうに来て、ディークを返してくれた。

「（解析したが、何も分からずじまいだった）」

隊長は小声でそういつてきた。

受け取ったディーアークを少し操作してみる。
特に変わったところもなく大丈夫なようだ。

「どうしたの？」

淑乃さんが、そう聞いてくる。

俺は首をふって何でもないと答えた。

それから、白川さんたちに一緒に送る機材についての説明がされる。
メルクリモンの居場所が分かるものや、人間界と通信ができるもの。
そして、自分たちの居場所が分かるものがあつた。
俺たちの命綱ってわけだ。大切にしないとイケない。

「ミッション開始だ」

「了解」

隊長の言葉に俺らは全員そいつってデジタルワールドへと飛び立った。

第20話 突入（後書き）

なんとか1週間以内に投稿できました。

来週は用事があって5日ほど出かけてくるのでもしかしたら更新で
きないかもしれません。

第21話 謎の少年

ディーアークで開くゲートとはすこし感じが違ったけど、無事デジタルワールドに降り立つことができた。

降り立った場所は草原だった。近くには森も見える。

淑乃さんは浮いている岩に驚いている。

まあ、初めて見たら驚くよな。

「俺は2度目だからな。何でも聞いてくれ！」

マサルは自慢げにそう言った。

でも、それって淑乃さん以外全員だから。それに、俺は何度もデジタルワールドに来てるし。

そうやって会話をしていると森の中に光の柱が出現した。

どうやら、別口で送った荷物が届いたらしい。

トーマさんが一番に走り出した。

俺もその後が続く。

「なんでもっと近くに送ってこねえんだよ」

マサルの文句が後ろから聞こえた。

「あれがないと連絡も取れないからな」

トーマさんがそういった。

「そんなことって本当は卵焼きが目的なんじゃない？」

ディーアーク内にいるルナモンがそういう。

トーマさんは心なしか顔が赤くなったようにも見える。

……そっちが本音か。

送られたコンテナの近くにつき、無事だったと安心する。

しかし、そのときに何かが飛んできてコンテナに当たってしまう。

「な!？」

コンテナはそのままばらばらになって、データ粒子化して消滅した。

俺らは驚いたが、敵襲だとデジモンたちをリアライズさせる。

「ルナモン、どっちか分かるか？」

俺の言葉にルナモンはしばらく黙って耳を澄ませていたが、ある方向を向いて

「こっちだよ。ダイチ。僕たちから遠ざかって移動する音が聞こえる」

といった。

ルナモンの耳は伊達じゃない。小さな音も聞き逃さない。

「よっしゃあ、行くぜ。」

ルナモンの言葉にマサルが駆け出す。

俺らもその後を走ってついていく。

走っていくと、黒い影が木の上を移動しているのが見える。
あれって……

「人間の子供？」

淑乃さんがつぶやいた。

俺の見間違いではないらしい。大体俺（の肉体年齢）と同じくらいの男の子だった。

そいつが不意に木を蹴ってくる。

「うわっ！」

木が揺れ、頭上からイガイガした実が落ちてきた。

「君、待ちなさい。……きゃあ！」

「淑乃！！」

俺がその実に気をとられているうちに、淑乃さんはあの少年を追いかけようとする。

しかし、後ろから巨大な食虫植物のようなものが現れてつかまってしまった。

「ルナモン！」

俺はルナモンを呼んだ。

ルナモンは俺の意図を察知してくれたのかうなずいた。

「>ルナクロー<！」

ルナモンは闇の爪で植物を切り裂いて淑乃さんを助けた。

「あ、ありがとう。大地。ルナモン。」

淑乃さんは助かって安堵したのか俺たちにお礼を言ってきた。

「ようやく捕まえたぜ！ このクソガキ！」

マサルの叫び声が聞こえて、俺はそっちを向く。
そこにはマサルが少年を捉えている姿があった。

「イクトを離せ！」

別のところから聞き覚えがある声が聞こえてきた。
その次の瞬間には手裏剣が飛んでくる。

「手裏剣！？」

もしかして……と思って辺りを見回すと、案の定ファルコモンの姿があった。

イクトと呼ばれた少年はマサルの手を逃れファルコモンの傍に行った。

「お前たちデジモンの敵。俺、お前たち倒す！」

「てめえもメルクリモンの仲間か！」

「人間、デジタルワールドの平和壊す。俺、人間許さない」

「馬鹿をいうな！ 平和を壊したのはメルクリモンの方じゃないか！」

「メルクリモンの悪口言うな。デジモンたち、みんな従う！」

少年とマサルの会話のあと、少年はブーメランを取り出して投げつけてきた。

俺らがそれをかわすと、少年はブーメランを戻ってきたブーメランを受け取って突っ込んでくる。

俺らも攻撃するが、少年の身軽で木の上を飛び移って移動し、当てることができない。

そこにファルコモンがやってきた。

「>打竹落としく！」

ファルコモンは竹筒に火がついたものを落としてきた。

それらが爆発して、辺りには白い煙が立ち込める。

俺らは少年とファルコモンの姿を見失ってしまった。

ファルコモンの打竹落として発生させた煙が消えたと思ったら、あたり一面には霧が発生していた。

「これじゃ周りが見えないよ」

ルナモンがつぶやく。

霧はだんだんと濃くなっていき、近くにいるマサルたちの姿ですらほとんど見えなくなった。

俺は、ルナモンの姿だけでも見失わないように気を引き締める。

「出て行け」

そのとき、何か声が聞こえた。
ルナモンでも、マサルたちの声でもない。

「ワシの森から出て行け」

また声がする。あたりを見回しても霧のせいで何も見えない。

「誰だ？」

アグモンがそうつぶやいたとたん、霧の中から細い蔓が出てくる。
その蔓は、マサルとアグモンを捕らえてしまった。

トーマさんと淑乃さんはさっきの俺のように指示をする。

その指示に答えて、ガオモンとララモンが蔓を切ってマサルとアグモンを開放した。

「あっちの方向だ！」

俺は蔓が出てきた方向を指さして言う。

全員、そちらのほうを警戒していると、大きな木のようなデジモン、ジュレイモンが現れた。

「愚かで傲慢な人間どもよ。とつとこの森から出て行くがよい」

そのジュレイモンはそういった。

俺らはメルクリモンの味方かと警戒を強める。

しかし、ジュレイモンは誰の味方でもないと答えた。

「誰も味方もしない？」

「デジタルワールドのすべてのデジモンがメルクリモンに従っているわけじゃないということか」

淑乃さんとトーマさんがそういった。

この広大なデジタルワールドをデジモン一体で管理は難しいだろう。だからこそ、今までの世界では東西南北の4つのエリアに分けて四聖獣が管理していたわけだし。

ジュレイモンは、近くの岩陰を見て、そのやつらも森から出て行けといった。

そこには先ほどの少年と、ファルコモンがいた。

「うるさい！ 人間、デジモンの敵。人間、俺が倒す！」

少年は、ジュレイモンの言葉を受け入れなかったようだ。俺たちに対して、戦闘態勢に入る。

「イクト、僕に力を！！」

ファルコモンがさういうと少年は、小型の機械を取り出した。

「あれは……デジヴァイス？」

その機械はマサルたちが持つデジヴァイスと同じ形だった。

どういうことだと驚く俺らの前で少年はデジソウルをチャージさせる。

「ファルコモン進化！ ペックモン！！」

進化した姿はダチヨウのようだった。

実際にはダチヨウは飛ぶことはできない。

しかし、このデジモンは普通に空を飛んでいる。

まあ、デジモンだし、仕方ないか。

そう考えた俺は、とりあえずディーアークを取り出してそのデジモンに向けた。

『ペックモン 成熟期 鳥型 ワクチン種

必殺技は上空ヘジャンプし、体を高速回転させ軸となる足で相手を貫く>スパイラルクローク』

俺がデジモンの情報を読み取ると、トーマさんと淑乃さんは、デジモンを進化させる。

俺も参戦するべく、一枚のカードを取り出した。

「>カードスラッシュ<！ 超進化プラグインS！！」

「ルナモン進化！ レキスモン」

「俺、戦う。デジタルワールドの平和、守る！」

俺が進化させると、少年はブーメランを投げてきた。

そのブーメランはマサルに向かって飛んでいくがマサルは引くことなくそのブーメランを殴り落とした。

殴ったマサルの手にはデジソウルが集まり、アグモンをジオグレイモンへと進化させた。

これで1対4、数では有利だ。

「>ティアアロー<！」

レキスモンは氷の矢を放つ。しかし、相手はそれを難なくかわしてしまう。

ファルコモンのすばやい動きはペックモンでも健在だったようだ。相手がすばやすぎて、こちらの攻撃がまったく当たらない。

「止めんか！>チェリーボム<！！！」

俺らが戦っていると突然赤い実が降ってきて爆発を起こす。

ジュレイモンの>チェリーボム<だ。

その攻撃は、デジモン全員に当たった。ペックモンも不意をつかれたのかその攻撃は当たってしまったようだ。

「止めろと言っているのが分からのか！！！」

ジュレイモンがそう怒って叫ぶ。

その言葉に俺たちはジュレイモンを見た。

よく見ると、ジュレイモンの根元のところには黒い苗のようなデジモンがいた。

「あれは……ニョキモン。幼年期の種子型デジモンだ。」

トーマさんがそういった。

もしかして、ジュレイモンはこれを守ろうとしていたのか？
そうならそうと早く言ってもらえればよかったのに。

そう思っただ俺はマサルたちにこの場を離れようと言おうと思っただ口を開く。

その瞬間、ドンという音と共に、大きな岩が降ってきた。

岩は雨のように次々と降ってくる。

このままでは、ニョキモンやジュレイモンが危ない。
いや、俺らに当たっても大怪我だろう。

「>スパイラルブローく！」

「>サンシャインビームく！」

ガオガモンとサンフラウモンが俺らやジュレイモンたちに当たりそうになる岩を壊した。

「困っているときはお互い様ってな。行け！ジオグレイモン！」

「レキスモンも頼む！」

ジュレイモンが驚いていたが、マサルが笑ってそう言い、ジオグレイモンに指示を出す。

俺もそれに続けて指示を出す。

「>メガフレイムく！」

「>ティアアローく！」

デジモンたちは次々と岩を壊していく。

しかし、成熟期の力で壊せないほどの大きな岩が降ってきた。

「くそ、でかすぎる！」

ジオグレイモンが言った。

「あきらめるな！男が魂こめた拳には不可能なんかないんだ！デジソウルフルチャージ！」

ジオグレイモンの言葉にマサルが叫ぶ。

体全体にデジソウルが溢れ、マサルはそれをチャージさせた。

「ジオグレイモン進化！ ライズグレイモン！！ >トライデントトリボルバー<！！」

ライズグレイモンが放った3発の弾丸は成熟期でも壊せなかった大きな岩をいともたやすく壊してしまった。

しかし、岩はまだまだ降ってくる。

デジモン4体は俺たちや、ジュレイモンへの被害が無いように岩を壊すが、きりが無い

次第に、だんだんと疲れが見え始めてくる。

「一体なんでこんなことが……」

俺がそうつぶやいて辺りを見回すと、飛んでいるヤンママモンの姿が見えた。

ヤンマモンの上にはゴツモンが乗っていて、両手を上げてはこっちのほう目がけて振り下ろす。

その動作に合わせるように岩がこちらのほうに降ってきた。

「もしかして……あいつらの仕業か！ レクスモン、ゴツモンたちを止めるんだ！」

俺はレクスモンにゴツモンを攻撃するように指示を出す。
レクスモンはゴツモンを確認すると、空高く飛び跳ねた。

「>ムーンナイトキック<！」

しかし、ヤンマモンがすばやく移動して攻撃が外れてしまう。
追撃を仕掛けようとするとゴツモンが口を開く。

「人間の、人間の分際でよくも……ゆるしませんよ。こうなったら……いくのです。ディノビーマン！」

ゴツモンがそう叫ぶと、森の中から昆虫のようなデジモンが現れた。

第22話 森の戦闘

俺は現れたデジモンにディーアークを向ける。

『ディノビィモン 完全体 突然変異型 ウィルス種
必殺技は残像を残すほどの素早い動きで相手を切り刻む>ヘルマ
スカレード<』

「完全体が……ならライズグレイモンに任せとけ！」

マサルがそういった。

「待て、マサル。ライズグレイモンの強力な力では森に被害を及ぼ
してしまう！」

トーマさんが止めた。

確かに、ライズグレイモンのパワーならディノビィモンを倒せるだ
ろう。

しかし、ここは森の中だ。さっきの岩みたいに上空に弾を発射する
だけなら被害は発生しないが、戦うとなるとそうもいかない。

加えて、ライズグレイモンは炎系の技を使う。そのせいで森が火事
になってしまったら目も当てられない。

いや、ガオガモンの必殺技>スパイラルブロー<や、サンフラウモ
ンの>サンシャインビーム<でも森を壊す恐れがある。

「ならどうするってんだよ!？」

「森に被害を与えないよう、物理系の攻撃でダメージを与えるしか
ない。」

トーマさんはそういつてガオガモンに近接攻撃するように指示する。

「>ダッシュダブルクローク！」

ガオガモンが両手を振りかざし飛び掛かるが、攻撃が当たる瞬間にディノビーマンは消えてしまった。

「どこだ！？」

ガオガモンが叫ぶと、ディノビーマンはガオガモンの目の前に現れる。

とつさのことにガオガモンは反応できず、ディノビーマンの爪で切り刻まれ、吹き飛ばされた。

これが相手の必殺技>ヘルマスカレードなのだろう。

「ガオガモン！」

トーマさんは吹き飛ばされたガオガモンを見て叫ぶ。

ガオガモンは後ろにある木にぶつかってガオモンに戻ってしまった。

残りは、レキシモンとライズグレイモン、そしてサンフラウモンだ。ライズグレイモンはパワーがある分、すばやさでは劣る。

サンフラウモンも、近距離の攻撃は苦手だ。

それならば……

「俺に任せて！」

俺の言葉に、3人は驚いてこっちを向いてきた。

「一人じゃ無理よ！たださえ相手は完全体で力が上なのよ。力を合わせないと勝ち目はないわ！」

淑乃さんが叫んだ。

俺は笑って、大丈夫と言って一歩前にでる。

「レキシモン！」

そういつて、俺は一枚のカードを取り出した。
レキシモンはそれを見てうなずく。

俺が取り出したカード、それはティマーズの世界に来たときに変わってしまった信頼の紋章のカードだ。

完全体以降の進化は、すべてこの紋章の力を使っている。

究極体に進化できなかったから、もしかしたら完全体にも進化できないんじゃないかという不安が頭をよぎった。

（大丈夫。絶対進化できる！俺は、ルナモンを信じているから！）

俺は、この不安を拭うために深呼吸をする。そして、敵であるディノビーモンのほうを睨み付け、ディークを構えた。

「行くよ、レキシモン！>カードスラッシュ<！ 信頼の紋章

マトリックスエボリューション！！」

「レキシモン進化！ クレシェモン！！」

俺はそのカードをディークを通して、レキシモンを完全体、ク

レシェモンへと進化させた。

「レキスモンが……完全体に!?!」

後ろでマサルたちが驚いているのが分かる。

俺はそれを気にもせず、前を見る。

ディノビーマンは持ち前のスピードを使ってクレシェモンを切り裂こうとする。

しかし、クレシェモンも素早さには自信があるほうだ。

両手の武器を使って相手の攻撃を防ぐことができた。

どうやら、ディノビーマンとクレシェモンの素早さはほぼ互角のようだ。

それならばこっちは一段階素早さを上げてやればいい。

「>カードスラッシュ<！ 高速プラグイン<！」

カードの力でディノビーマンの素早さを上回ったクレシェモンはディノビーマンの攻撃を掻い潜って、後ろに回った。

「今だ！」

「>ルナティックダンス<！」

クレシェモンはそのまま踊るようなステップで相手との間合いを詰め、両手に持つ武器で相手を切り裂いた。

ディノビーマンはその攻撃をくらって、デジタマへと戻っていった。

俺がクレシェモンの近くに行くと、クレシェモンはルナモンへと戻った。

「お疲れ、ルナモン」

「やったね、ダイチ」

俺とルナモンは、そういった。

そうしていると、マサルたちも近くまで来た。

「大地、やるじゃねえか」

「あなたってルナモンを完全体に進化できたのね。知らなかったわ」
「僕もだ。だが、これは大きな戦力にもなりそうだ」

マサルたちは口々にそういった。

「まさか、愚かで傲慢な人間どもに助けられるとはな」

俺らが話していると、ジュレイモンがやってきてそういった。
そういえばいたね。

ディノビーモンとの戦いですっかり忘れてた。

「いいってことよ。確かにあんたの言うとおり、人間ってのは馬鹿
なやつばかりだ。馬鹿だからこそ熱くなれる。見ず知らずのデジ
モンを助けたりもできる。」

マサルがそういった。

俺は、ディノビーモンとの攻撃で森が少しだけ傷ついてしまったこ
とを謝った。

「いいのだ。お前たちは、ワシやニヨキモンたちを守ってくれた。森が傷つかぬよう注意して戦ってくれた。感謝しておる。」

ジュレイモンはそういつてくれた。

「しかし、イクトって少年。何者なんだろうか？」

トーマさんが不意にそう言った。

「知るか！今度俺の前に現れやがったら叩き潰してやるぜ」

マサルはそういった。

確かに、何者なんだろうか？

マサルたちと同じデジヴァイスを持ち、ファルコモンを進化させることができる。

分かったのは、メルクリモンの仲間ということだけだ。

イクトはどう見ても人間だった。

それならば、なぜこのデジタルワールドに？

訳が分からない。

「そんなことよりどうするのよ！」

俺がそんなことを考えていると、淑乃さんが言った。

「持ってきた装備全部無くなっちゃったのよ。どうやってメルクリ

モンを探すの？ どうやって人間界に帰るのよ？」

淑乃さんは続けてそういう。

「ニヨキモンたちを助けてくれた礼に一つだけ教えてやる。」

淑乃さんの言葉にジュレイモンが話しかけてきた。

「メルクリモンのすむ宮殿にはデジタルゲートがあると聞いた。」

その言葉にマサルがメルクリモンの居場所を尋ねると、ジュレイモンはある方向を指差した。

その方向にある山を越えた無限氷壁と呼ばれるところにメルクリモンの宮殿があるそうだ。

ようするに、メルクリモンのいるところに行かないと人間界には帰れないということらしい。

厄介なことになったとトーマさんたちはつぶやくが、マサルは平気な顔をしている。

「メルクリモンをやっつけなけりや人間界には戻れないって事だろ？ 分かりやすくていいじゃねえか」

マサルらしいといえばそのとおりだが。

まあ、いざとなれば俺がゲートを開いて隊長に連絡をすればいい。俺が開いたゲートは俺しか通れないが、俺らがいる現在地さえ分かれば向こうもゲートを開くことができるし問題はない。

それに、俺だってメルクリモンには用がある。

ピヨモンをやつつけたことは許せないし、本当にピヨモンを進化させ人間界を襲わせたのだとしたらもつと許せない。
だから、俺はマサル 의견には賛成だった。

「よし、出発だ！」

マサルはそう叫んだ。

「当然……歩きよね？」

淑乃さんが暗い表情でそういった。

「足太くなっちゃう」

「ララモンは浮いてるから大丈夫だろ」

ララモンのつぶやきに俺がそういった。

「ん？」

ルナモンがいきなり止まって空を見る。

「どうした？ルナモン」

俺がそう尋ねるとルナモンは空を指差した。

その方向を見ると、いつの間に戻ってきたのかヤンマモンとゴツモンがいた。

2体のデジモンはあわてた様子で俺たちが向かう方向に飛んでいっ

た。

もしかしくなくても、メルクリモンの仲間なんだろうな……

なんか厄介なことになりそうだな……

2体のデジモンが飛んでいくのを眺めながら俺はそう思った。

第23話 満月の夜

森を抜けたところで、夜になった。

まあ、覚悟はしていたが野宿決定だ。

一応野宿用に寝袋とか用意してたんだけど、イクトとかいうやつに全部壊されてしまったしな……

まあ、前の世界で何度もデジタルワールドに行ってるんだ。野宿には慣れている。

俺以外のやつはやったことすらないだろうけど

アグモンに火を起こしてもらって、その火をみんなで囲む。

「無限氷壁まであとのくらいの距離があるのかしら？」

ふと、淑乃さんが言うてきた。

「まだまだだと思えますよ。まだ雪山にすらたどり着いてないんですから。」

俺はそう答えると、淑乃さんは大きなため息をついた。

「なあ、大地。お前さ、せっかく同じDATSの一員になったんだからよ、そういう固いしゃべり方やめねえか？」

マサルがそういつてくる。俺が首をかしげていると、

「マサル、君が言うことではないだろう。」

トーマがマサルにそういつた。その後、俺のほうを見て、

「おそらく、マサルは僕や淑乃さんに敬語を使わなくてもいいと言っているんだと思う。」

そういつた。マサルはうなずいている。そういう意味か。

「そうね。今までは、別に気にしなかったけど、同じメンバーになったんだもの。もっとフランクな感じで話してくれて構わないわ。年齢なんか気にせずにな。」

淑乃さんがそういつた。トーマもその意見に賛成のようだ。今までは、マサルには敬語無しで話していたけど……

「わかりま……分かった。これからよろしく。トーマ、淑乃。」

これでいいのかと尋ねると、二人は満足したようだ。笑ってこちらもよろしくと言ってくれた。

火を囲んで雑談していると、ルナモンが急に立ち上がった。

「ルナモン、どうした？」

俺はルナモンに尋ねた。

「月が綺麗だから、よく見えるところに行ってくるー」

ルナモンが空を見上げてそういった。

確かに綺麗な満月だ。人間界の月とも違った感じがする。

マサルが月？ と疑問顔だったので、俺はルナモンが月光浴が好きなことを説明する。

トーマが一人（一匹？）でいくのは危険だといって渋ったため、俺と一緒にについていくことにした。

別に遠くまで行くわけじゃないし、大丈夫だろうと言って無理やりトーマを納得させた。

すこし、マサルたちから離れて月がよく見える位置に移動する。

ここならこっちからも向こうからも位置が確認できるから問題ないだろう。

「ふう……」

月を見上げているとルナモンがため息をついた。

俺がルナモンを見ると、

「どうして、この世界のデジモンは人間を愚かとか傲慢とか言うのかな……」

そうつぶやいた。

「そりゃ、人間にだって悪い人はいるけど、ダイチみたいにいい人もいる。それはデジモンだって同じ事なのに……」

ルナモンは続けてそういった。

今までの世界だってそうだった。

デジタルワールドの平和を乱そうとするデジモンだった。でも、俺とルナモンのように、デジモンをパートナーに持ち、無二の親友と呼べる仲になっている人だっている。

「大丈夫。みんな分かってくれるさ。あのジュレイモンみたいにな」

俺はルナモンの頭をなでてからそういった。

ルナモンは俺を見上げて、

「僕ね、メルクリモンを見たとき、メルクリモンからものすごい人間に対する憎悪のようなものを感じたんだ。あそこまでの憎悪を持つ理由が僕には分からないよ」

そういった。

ルナモンの言葉に俺は考えた。

ルナモンは他人の気持ちに敏感なところがある。ルナモンがそう感じたのなら間違いないだろう。

でも、そうだとすると、そこまで人間を恨むのなら何かしら理由が

あるはずだ。

いくら考えても予測の域を出ない。

それが正しいのかどうかも分からない。分かるわけがない。

「メルクリモンに会えば何か分かるかもしれないな。ここで考えていても仕方ないし、そろそろ戻ろっぜ。明日も早いしな」

俺はルナモンにそういった。

ルナモンもうなずいて、マサルたちのいるところに戻ることにした。

【side ルナモン】

次の日、僕たちはメルクリモンのいる無限氷壁に向かっている途中、大きな谷の前で立ち止まっていた。

谷の下を除くとビルなどの建物が生えていた。

「さすがデジタルワールド……。何でもありだな」

ダイチがそつつぶやくのが聞こえた。

マサルたちは驚いているけどダイチは驚いていないみたい。

今までだって、海岸にある電話ボックスとか見てきたから耐性でも

ついたのかな？

僕はもともとダイチが言う『アドベンチャー』のデジタルワールドに住んでいた。

だからそういったものには全然違和感とか感じなかった。
ダイチに普通じゃないと教えられて逆に驚いたことは今でも覚えている。

みんなはこの谷をどうやって越えるかで話し合っている。

僕がダイチに白い羽を使ってもらえば飛んで谷を渡れるが、一人ずつになってしまう。

いつ、敵に襲われてもおかしくないのに、そうやって分断された状態になったらまずい。

進化させたらいいという案もあったんだけど、同じ理由で無駄にエネルギーを消費しないほうがいいということで却下された。

結局、しかたがないので面倒だけどみんなが谷を降りることにした。

谷を降りて生えているビルの上を降りながら移動していると、何かの足音が聞こえた。
それも大勢の足音だ。

それは僕以外のデジモンも聞こえているみたい。
さっきから辺りをキョロキョロとしている。

「どうした？」

「マスター、何かいる！」

「いつぱいの足音が聞こえるよ」

トーマの問いにガオモンが答え、それを僕が補足する。

その言葉にダイチたちも警戒態勢を取った。

足音がだんだんと近くなってくる。

僕たちのすぐ傍に来たと思ったら、たくさんのデジモンが現れた。

「なんだこりゃ！？」

「ドクグモンだ！」

マサルが叫び、ダイチが答えた。

辺りを見回すと大量のドクグモン。僕たちはドクグモンに囲まれてしまった。

ダイチはすぐさまカードをスラッシュして進化させようとしたんだけど、周囲のドクグモンが一斉に糸を吐き、動きを封じられてしまう。

「しまった！」

「ダイチ！>ルナクロー<！」

僕はとつさにダイチを縛っている糸を切り裂こうと闇の爪を作り出した。

そのままダイチのところに向かったんだけど、その前に僕もドクグモンの糸につかまってしまう。

「大地！ルナモン！」

トーマが僕たちを呼ぶ声が聞こえたんだけど、身動きが取れない。

僕らが何とか糸から抜け出そうと体を動かしていると、ドクグモンは僕らを連れて谷の下のほうへとジャンプした。

僕らはなすすべなくそのまま落ちていった。

どのくらい谷を落ちたんだろう。

僕が気がつくと、他のみんなも捕まっていた。

僕たちデジモンはドクグモンの糸で作られた網に閉じ込められ、ダイチたちは生えているビルからつるされ宙吊りの状態になっていた。

「畜生、俺たちをどうするつもりだ！」

マサルは暴れて糸を切ろうとしているが、糸は切れそうにない。

どうやって脱出しようか考えていると、谷のさらに深いところから何か声が聞こえた。

「人間め……呪うべき人間め……。眠れ。そして己が悪夢の中をさまようがいい……」

その声がそういうと、谷に不思議な音が響き渡る。その音のせいか、ダイチたちは眠ってしまった。

「まずい……」

ガオモンがつぶやいた。

「あれは……メタルファントモンだ」

ガオモンがそういうと、谷の奥から全身を金属で覆われた死神のようなデジモンが現れた。

第23話 満月の夜（後書き）

来週、行事があつて、その準備が忙しいため、
更新遅れます

第24話 過去の悪夢

【side 大地】

「あれ？ここ……どこだ？」

俺は一人つぶやいた。

確か、谷を渡ろうとしたんだけどドクグモンにつかまってしまつて……

そこまでは覚えているんだけど、そこから思い出せない。

目の前には大きな山がある。なんとなく見覚えのある山だ。

「この山って……ムゲンマウンテン……だよな？」

俺は一人そうつぶやいた。

どういうことだ？ この山が本当にムゲンマウンテンだとすると、ここは『アドベンチャー』の世界ということになる。

「ダイチー、急ごう！ 皆がまつてるよ！」

その時、すぐ近くでルナモンの声が聞こえた。

周りを探してみると、すぐにルナモンは見つかった。

「ルナモン、無事だったか。」

俺はルナモンに声をかける。

「ここって、ファイル島だよな？ どうしてこんな所にいるんだ？
俺はまったく覚えていないんだが……」

俺は続けてルナモンに質問をぶつけた。

しかし、ルナモンは答えてくれるどころか、俺の方を見向きもしない。

「なあ、ルナモン」

俺はルナモンにこっちの方を向かせようと、手を伸ばす。
しかし、その手はルナモンの体を突きぬけてしまった。

「え！？」

何度もルナモンの体に触れようとするが、俺の手は突き抜けてしま
う。

「ダイチってばー」

ルナモンは俺とは別の方向を見ながら、俺の名前を呼ぶ。

「ああ、分かってるよ。ここで絶対にデビモンを倒すんだ。」

「うん。僕頑張るからね！」

ルナモンが向いている方向から、声がした。俺もその方向を見ると

……

「お、俺？」

俺にそっくりな男の子がいた。

どういうことだとそいつの方に駆け寄ると、そいつが腰につけているデジヴァイスが目に入った。

そのデジヴァイスは、俺が昔持っていた初期型のデジヴァイスと同じ形をしていた。

このデジヴァイス……そしてさっきのデビモンという言葉……

「もしかして……ここは過去の『アドベンチャー』の世界？」

ますます分からなくなってきた。

どうして、俺はこんなところにいるんだ？

分からないことが多すぎて混乱してくる。

しかし、こんなところで立ち往生していても仕方がない。もしかしたら、何か分かるかもしれない。

俺は、そう考え、過去の俺の後についていくことにした。

過去の俺は、どうやらムゲンマウンテンのほうに向かっているようだ。

さっきから何度か試したが、俺の声は届かず、触れることすらできない。

「絶対、タケルを守るんだ。でないとパタモンが……」

過去の俺はさっきから同じようなことをぶつぶつと言っている。

「どうしたの？ ダイチ」

「……いや、何でもない。」

ルナモンは、首をかしげる。

そういえば、まだこの頃の俺は、ルナモンにすら何も話していなかったっけ。

俺が異世界から来たことや、この世界がアニメとよく似た世界だということすら話していない。

だから、自分ひとりで全てを背負っていたんだ。
パートナーであるルナモンを頼りもせずに……

そのときだ。いきなり、ムゲンマウンテンの山頂が爆発し、そこから巨大な黒いデジモンが表れた。

「デ、デビモン……」

それは、黒い歯車の力で巨大化したデビモンの姿だった。

「行くよ、ルナモン！」

「うん！」

デビモンが見えると同時に、過去の俺とルナモンは、デビモンのいるところへと駆け出した。

俺も慌ててその後を追う。

デビモンの近くに着くと、そこには太一たち選ばれし子供とそのパートナーがデビモンと対峙している姿があった。

【side ルナモン】

「ダイチ！ ダイチ！！」

僕はダイチに呼びかけるけどダイチは全然目を覚まさない。

ガオモンの話では、メタルファントモンは悪夢をみせ、心の精気を吸い取ってしまうらしい。

心を奪われたら生きているとはいえない状態になってしまつとか。なんとかして起こさないと……

【side 大地】

選ばれし子供達とデビモンの戦いが始まった。

パートナーたちは必死でデビモンに攻撃を仕掛けるが、黒い歯車の力を得て巨大化したデビモンにはまったくといっていいほど効いていない。

「小ざかしい虫けらどもが……>デスクロー<！！」

デビモンはレクスモン目掛けて手を伸ばした。

「レクスモン、避けて！」

過去の俺は、そう指示を出すのが、レクスモンの行動は遅れてしまい、デビモンの攻撃を受けてしまう。

7体の成熟期が束になってもデビモンにはほとんどダメージを与えられずに、苦戦する。

「今の俺とルナモンなら簡単に倒せるのに……」

俺は悔しさのあまり、唇を噛みしめる。

まだ、この頃の俺は、ルナモンと強い信頼関係を結べていない。

今だったら、阿吽の呼吸で、息を合わせて戦うことができるのだが、この頃の俺はそれがまだできない。

そのため、俺が指示を出してからレクスモンが行動に移すまでに、大きなずれが生じてしまうのだ。

「それだけじゃない……」

俺はそうつぶやいて過去の俺をにらみつけた。

過去の俺は、レクスモンの方を見ているように見えるが、さっきから何度もタケルの方に視線が向いている。

いつタケルが襲われても守れるようにと、タケルの方に気を配っているんだ。

そのため、レクスモンの方の指示が遅れてしまい、さらにレクスモンの行動が遅れてしまう。

これでは勝てるわけがない。

第三者の目になってから初めて分かる事実。

俺がもつとしっかりしていれば、デビモンを倒せたのかもしれない。レクスモンともつと息を合わせて戦えば、余計な犠牲なんて出さずに済んだのかもしれない。

俺はこんなひどい戦いをしていたのか……

「戦いに集中しろ！」

俺は無駄だと分かっているけど、叫ばずにはいらなかった。
自分の無力さに涙さえ出てくる。

デビモンは、向かってくるデジモンたちを衝撃波で吹き飛ばす。
そして、そのままタケルの方を向き、ニヤリと笑みを浮かべた。

「これで終わりだ。 >デスクロー<！」

デビモンの手がタケルへと向かう。

過去の俺は待つてましたとばかりに飛び出した。
倒れている自分のパートナーを見向きもせずに。

デビモンとタケルの間に割り込んで、タケルを助け出す。

助けられたことに笑みを浮かべる過去の俺。

対象に俺は、これから起こる惨劇を頭に浮かべ、絶望する。

そこから先は見たくないと言を閉じ、両手を耳に当てて塞いだ。

しかし、頭の中にその時の光景が浮かんでは消えていく。

デビモンは、デジモンよりも人間の方に狙いを定め攻撃を仕掛ける。
デジモンたちは、自分たちのパートナーを守ろうと必死で戦うが、
戦いに敗れ、デジタマとなってしまった。

初めはゴマモン、そしてピヨモン、テントモン、パルモンの順で倒

されていった。

俺は恐る恐る目を開ける。

そこには、絶望の表情を浮かべた俺の姿があった。

「ダイチ、危ない!!」

レクスモンが叫ぶ。その声で過去の俺ははっと前を向くが、そこにはデビモンの手があった。

一瞬の出来事だった。

間一髪レクスモンがデビモンと過去の俺の間に割り込んだ。

「ダイチ、怪我はない? よ………かった………」

「レクスモン!!!」

過去の俺が叫ぶと、レクスモンはデジタマになってしまった。

ルナモンが死ぬところを見るのは、これで2回目だ。

俺は目の前が真っ暗になった。

【side ルナモン】

トーマが一瞬青白い光に包まれたと思ったら、ドクグモンの糸が解け、トーマが開放された。

目を覚ましたトーマからは激しい怒りを感じる。

「人の心をもてあそぶものはその報いを受けるがいい。」

トーマはそういうと、全身からデジソウルがあふれ出した。
これって……もしかして……

「行くぞ、ガオモン！ デジソウルフルチャージー！」

「ガオモン進化！ マツハガオガモン！！」

ガオモンが進化したことで、僕らを捕らえていた糸が切れる。

「>ハウリングギャノンく！」

マツハガオガモンはメタルファントモンに攻撃を仕掛け、ダイチたちを解放した。

僕はすぐダイチの元へと駆け寄る。

「ダイチ、大丈夫？」

「う……ここは……。さっきまでは……夢……だったのか」

ダイチの顔色が悪い。

「ルナモン……ごめんな。」

「え？」

ダイチが何かつぶやいた。

「いや、なんでもない。ん？あれは……ガオモンの完全体と敵デジモンが戦っているのか？」

ダイチは首を振って答えたあと、マツハガオガモンたちに気づいたみたい。

ディーアークをマツハガオガモンたちへと向ける。

『マツハガオガモン 完全体 サイボーグ型 データ種
必殺技はサイボーグアームから渾身の一撃を放つ>ウィニングナツクル<』

『メタルファントモン 完全体 サイボーグ型 データ種
必殺技は怪奇音を発し相手の魂を刈り取る>グレイブストリーム
<』

「メタルファントモンはマツハガオガモンに任せて俺らはドクグモンをなんとかしよう」

ダイチはディーアークから情報を読み取るとそう言っ僕をレキスモンへと進化させた。

アグモンとララモンも進化して、ドクグモンと戦った。

進化さえできればこっちのものだ。

ドクグモンたちをあっさりと倒してしまった。

「>ウイニングナツクル<！」

倒したあと、マツハガオガモンの技を叫ぶ声が聞こえた。

その声に顔を向けるとマツハガオガモンがメタルファントモンにとどめをさしているところだった。

【side 大地】

俺たちは戦いのあと、谷を上って反対側まで来ることができた。俺を含めてみんな疲れているようだ。

「はあ、今日は疲れたな……」

俺はそうつぶやいた。

「無駄な時間をとった。先を急ごう」

トーマがそう言って立ち上がる。

みんなも同意して先へと進もうとする。

俺は一旦立ち止まって谷を見た。

「あんな悪夢は二度とごめんだな。」

でも、自分の過ちを知ることができたことは……少し、ほんの少しだけ感謝してもいいのかもしれない。

「どうしたの？ ダイチ」

ルナモンが俺を見上げてそう尋ねた。

俺は首を振って何でもないと答えると、前を向いて歩き出した。

そのとき、後ろで何かが倒れる音が聞こえた。

「淑乃、どうしたの！？ 淑乃！ 淑乃！！」

ララモンの叫ぶ声もする。

俺が後ろを振り向いてみるとそこには倒れている淑乃の姿があった。
一体何が起こったんだ！？

第24話 過去の悪夢（後書き）

活動報告のほうに書きましたが、まだPCが復活したわけではありません。

こんな小説でも待つてくださっている方に、申し訳ないので学校で少しずつ書いていました。

だから、次回の更新は未定となっています。

週一の更新に戻るにはまだ、時間がかかりそうです。

第25話 不測の事態（前書き）

お久しぶりです。

まずは、更新が遅くなったこと謝罪します。
申し訳ありませんでした。

ようやく新しいPCが購入できたため、続きを投稿することができました。

この小説を待ってくださった方、ありがとうございます。
これからも、この小説をよろしくお願い致します。

第25話 不測の事態

「淑乃!!」

急に淑乃が倒れたから俺たちは驚いた。

淑乃の元に駆け寄ると、息も荒く、顔にも赤みがかっている。

「摂氏38・8度」

ララモンが淑乃の額に手をあててそう言った。

ララモン、手を当てるだけで体温分かるのか………すげえ。

………ってそんなこと考えてる場合じゃない。

すごい熱だ。

「少し、安静にできる場所に移動しよう」

トーマが淑乃に言った。

「大丈夫。急がなくちゃ……。無限氷壁………に………」

淑乃はそう答えると気を失ってしまった。

「おい、淑乃!淑乃!!」

「マサル、あまり淑乃さんを動かすな。体に響くだろう」

マサルが気を失った淑乃の肩を持って揺らしていたためトーマがそれを止める。

「俺、安静にできる場所探してくる！」

「待て、俺も行くぜ」

俺とマサルがそういうとトーマはうなずいた。

トーマとガオモン、ララモンに淑乃のことは任せて俺らは手分けして安静にできるような場所を探すことにした。

「僕、空から探すよ」

ルナモンがそういった。

俺はドクグモンとの戦いで疲れてるんじゃないかと尋ねたが、大丈夫だそうだ。

その言葉に俺はうなずいて白い羽をディーアークに通した。

ルナモンは白い羽が生えるとそのまま空へと飛び立っていった。

「ダイチ、あっちのほうに洞穴が見えるよ！」

ルナモンは空から辺りを見回すとこちらのほうを向き、そういった俺は、ルナモンが指差したほうに行ってみることにした。

すこし進むと、ジュレイモンがいた森とは別の森の中に洞穴があっ

た。

ルナモンが見つけた洞穴のようだ。

「誰か住んでるのかな……？」

俺は恐る恐る中を覗いてみたが、誰もいない。
ここならゆっくりと休めそうだ。

「ルナモン、トーマたちにこの場所のことを伝えてくれ」

ルナモンはうなずくと、もう一度空へと飛び立って、俺たちがさっきまでいたところへと向かっていった。

俺はその間に、近くに落ちている葉などを集めて簡単な寝床を作る。
硬い床の上だとゆっくり休むこともできないからな。

十数分後、淑乃を背負ったトーマがここについた。

淑乃を俺が作った寝床に寝かせると、トーマは診察をするからと、俺に洞穴から出るように言った。

言われるままに洞穴をでると、そこにはトーマとララモン、淑乃を除く全員がいた。

マサルは洞穴の入り口をせわしく行ったり来たりしている。

「お、大地！淑乃はどうだった？」

洞穴から出てきた俺に真っ先に気づいたマサルが尋ねてきた。

「とりあえず寝かせはしたけど、まだどうなるかは分からない」

俺は首を振ってそう答えた。

「くそ、何で俺は外にいないといけねえんだよ！」

「ミス淑乃は女性、気を使うのは当然だ」

マサルをつぶやきにガオモンが冷静に答える。

「だったらトーマも同じだろ」

マサルはその言葉に言い返す。

「ララモン一人じゃ病人の世話するのは大変だよ」

「だれか一人面倒見れる人間はいたほうがいいと思うよ」

ルナモンと俺はマサルにそういった。

だったら、俺でもいいじゃねえか！ とマサルが言い返すが

「マスターは医師免許を持っている」

とガオモンが答える。

マサルとトーマならトーマのほうが病人の世話できると思ってのにとだったけど、まさか医師免許を持ってるとは……

たしかマサルと同じ年だったよな。

その上、飛び級で大学まで出ているとか。

オーストリアの貴族って話もあるし、うらやましい限りだ。

「むかつく完璧超人め！！」

マサルの叫ぶ声が響いた。

気持ちはわかるけど、あまり大声で叫ばないほうがいいと思うよ。
淑乃の体に響くかもしれないし。

「くそっ、何かしてねえと落ちつかねえ。水でも汲んでくる!」

マサルは、頭を掻き篦ると、そう言って、アグモンと一緒に森の奥へと向かった。

「川の場合……分かるのかな?」

ルナモンがポツリとつぶやいた。

俺はさあ? と肩をすくめて答え、トーマが出てくるのを待った。

………

………

……

しばらくして、診察が終わったのか、トーマが洞穴から出てきた。

「あ、トーマ。淑乃はどう?」

「さっき眠ったところだ。それよりもマサルはどうした。」

トーマは俺の問いに答えると、辺りを見回して尋ねてきた。

「川のほうへ言ったみたいですが……」

俺の代わりにガオモンが答える。

マサルのことだから、トーマにだけいい格好をさせられないか思
つての行動なんだろうけど……それにしては帰りが遅いな。
迷ったのか？

「まったく……。ララモン、淑乃さんを頼む」

「あ、俺も行く」

トーマとガオモンがマサルの様子を見に行くようだ。

俺もちょっと気になるからとついていくことにした。

俺たちは、ルナモンの耳を頼りに水が流れる音が聞こえる方向へ向
かった。

洞穴から近い所に、川は会ったようで、すぐ見つけることができた。

川について見たものは、マサルとアグモンが水を掛け合っている姿
だった。

トーマがマサルの名前を呼んでもマサルは水遊びに夢中で気づかな
い。

もう一度大きな声で呼んでみると、こっちを向いて、あ、と気まず
い表情になった。

「この二人に休息は必要ないみたいだな……」

「ですね……」

「まったく、何やってるのさ。こんなときに」

トーマ、ガオモン、そして俺はそう言って呆れた表情を浮かべる。

まったく、水を汲みに行くと言っていたのにまさか遊んでたなんて。

「この馬鹿たちはほつといて、水を汲もう」

トーマがそういったため、俺らは水を汲む。

マサルが馬鹿と言われたことに反応したが、仕方ないことだと思う。

「そっぴゃ、淑乃は大丈夫なのか？」

馬鹿といわれたことから立ち直ったのか、マサルが尋ねてきた。

「水分を取ってゆっくり休めば直るだろう。すごい熱だから、氷があればもっと違うのだろうか……」

トーマはそう言った。

ここは森の中。氷なんて手に入るはずがない。
いや……待てよ……

「そうだ！マサル、アグモン。川から離れて」

俺はマサルとアグモンに川から離れるように行った。
その言葉に二人は疑問顔でこっちのほうに来た。

「何をする気だ？」

トーマも疑問顔で俺に尋ねる。

俺はそれに笑顔で返してカードを1枚取り出した。

「ルナモン、行くよ。＞カードスラッシュく！ ユキダルモン 絶対零度パンチ」

俺はユキダルモンのカードをディーアークに通した。
ルナモンの手に雪でできたようなグローブが装着される。

「＞絶対零度パンチく！」

ルナモンは、その拳を川めがけて打ち込んだ。

その拳のおかげで、川はたちまち凍ってしまった。

「氷、できたよ」

俺は後ろでポカーンとしているマサルたちにそう言った。

「まったく、大地にはよく驚かせられる」

俺の言葉にハッとしたトーマがそういった。

その後、ガオモンが氷を砕き、水と氷を手に入れたため、淑乃のいる洞穴に戻ることにした。

「ダイチ、洞穴からデジモンの気配がする」

洞穴の近くまで来るとルナモンが急にそういった。

そりゃ、ララモンが面倒見ているんだし、当たり前だ。俺はそういうと、ルナモンは首を振った。違うのか？

「デジモンの気配が二つするの！」

一つはララモンだとして……もう一つ？

「まさか、淑乃がデジモンに襲われているんじゃない？」

マサルはそう言って、洞穴の中に走って入っていった。俺らもその後を追う。

中に入ると、寝ている淑乃の近くにファルコモンとイクトがいた。

「てめえ、病人に手を出すとは……それでも男か！」

そういつてマサルはイクトのほうに向かっていく。

イクトもそれに対してブーメランを取り出そうとすると、淑乃に止められた。

淑乃がイクトの手を掴むと、淑乃とイクトの体が光り始めた。

すぐに光は収まったけど、あの光はなんだ？

なんとなく、イクトの周りにまとわりつくように光っているようにも見えた。

「お前、何した……うつ」

イクトは淑乃に問い詰めようとしたが、ふらついて倒れてしまう。

ファルコモンがあわててイクトの体を支えると、こちらを向いて

「お前ら、イクトにウィルスをうつしたな!？」

そう叫んだ。

何か知っているのか？

俺らはそう聞いたが、ファルコモンは聞く耳持たず

風を起こし、砂埃で俺らの視界をさえぎると、その隙に洞穴から出て行った。

マサルとトーマはイクトを追って外に出るが、相手は空を飛べる。捕まえるのは無理だろう。

それよりも、淑乃だ。さっきの光の後から、さらに症状が悪化しているように見える。

「体温上昇中」

ララモンが淑乃の額に手を当てて言った。

これ以上、体温が上がると危険だ。持ってきた氷もすぐに解けてしまう。

「そういうことが……。僕としたことがどうして気づかなかったんだ」

いつの間にか戻ってきたトーマさんがつぶやいた。

「淑乃さんが倒れたのはただの疲れじゃない。デジタルワールドの未知なる病原体に侵された可能性がある。」

「何だって!？」

マサルの驚く声が洞穴内に響いた。

第26話 病の特効薬

【side トーマ】

淑乃の具合は悪くなる一方だ。未知なる病原体ということは、治療法も分からないということだ。

「おい、トーマ。お前、医者なんだろ！早く治せよ！」

マサルが僕に対して怒鳴ってくる。

「治療するにはワクチンが必要だ。しかし、ウイルスの正体がわからなくては作りようがない」

「もし、そのワクチンがなかったらどうなるんだ？」

「……」

マサルの問いに、僕は答えることができなかった。

「淑乃は、助からない。そうでしょ？」

僕の代わりに大地が答える。僕は口を閉ざしたまま首を縦に振った。

「てめえ、いい加減なこと言つなよ！」

マサルは僕の胸倉を掴んで揺さぶる。

僕はマサルから目を背ける。

自分の力ではどうしようもない。

ここは病院でもないため、しっかりとした検査を行うこともできな

い。

しつかりとした検査もできなければウィルスの正体が分からない。

「こうなったら……」

大地がポツリとつぶやく声が聞こえた。

僕が大地の方を見ると、大地は急に立ち上がって、洞穴から飛び出していった。

「おい！ 大地どこいくんだよ！」

マサルが呼び止めるが聞こえたが、大地は振り向かずそのまま森の奥の方へと走って行った。

ルナモンは慌ててダイチの後を追った。

マサルもその後を追うが、しばらくして帰ってきた。

「くそ、見失っちゃった。まったくこんな時にどこに行っちゃったんだよ。」

マサルは開口一番にそう言った。

「大地のことだ。きっと何か考えがあるんだろう。」

僕は、マサルにそう言って、淑乃さんの看病を続けることにした。

……
……
……

【side 大地】

「……というわけなんです。」

俺は今人間界にいる。

マサルたちがいる洞穴から出てきた俺とルナモンは、人目につかないところでこっそりとゲートを開いて戻ってきた。

隊長からは緊急時以外はゲートを開くなという命令だったけど、今はその緊急時だと思つての判断だ。

デジモンの研究などもやっているDATSだったらもしかしたら淑乃のウィルスについても何かわかるかもしれない。そう思つて俺は隊長に連絡を取った。

俺は今デジタルワールドにいるということになつていたので、隊長とクダモン、そして俺とルナモンの2人と2体でこっそりと話合つている。

「そうか。まさか淑乃が……」

「はい。それでDATSなら何とかならないかと思ひまして。」

「病に関しては心当たりがある。しかし、肝心の薬がない。」

「そんな……なんとかないんですか？」

隊長の言葉に、あきらめきれずに俺はそう言つた。

「薬の調合なら可能だが、3日はかかるだろう。」

「そんな……」

3日間、あの様子の淑乃が絶えることができるだろうか。今でも症状は悪化する一方なのに。

「だったら、こっちに淑乃だけ連れて帰ったらいいんじゃない？」
「大地の開くゲートは通ることができないだろう。こちら側でゲートを開こうにも、現在のお前たちの座標が分からないことには……な」

ルナモンの案も、すぐに却下される。

俺が、発信機を持っていけばいいんだけど、新たな発信機を用意するのも時間がかかるそうだ。

打つ手なし。イクトに発信機を壊されていなかったらこっちの座標も分かって、ゲートが開けたのだけど……

「可能性は低いが……」

落ち込む俺とルナモンに隊長は声をかけてきた。

「私たちがデジタルワールドを探検していたとき、ある岬でそのワクチンを作成した。もしかしたら、その岬にサンプルが残っているかもしれない。」

「それじゃあ、その岬の場所さえ分かれば……」

「ああ、可能性としては低いが、ワクチンを手に入れられるかもしれません。」

ほんのわずかな可能性だが、今はこれに賭けるしかなかった。

その岬の場所は分からない。もしかしたら俺らがいる洞穴からものすごく離れた場所かもしれない。

でも、何もしないで淑乃が治るのを待つよりはずっとましだ。

俺は、隊長から、覚えている限りのその岬の特徴を聞き出すと、すぐにゲートを開いてデジタルワールドへと戻ることにした。
隊長から、

「こちらで薬の調合を急がせる。3日後、取りに来い。」

と言われた。俺とルナモンは頷いて、ゲートをくぐり、マサルたちがいる洞穴へと急いだ。

「マサル！ トーマ！」

俺が洞穴の中に入って二人の名前を呼ぶ。

トーマは、人差し指を立て、口のところに持っていていき、そして淑乃の方を見た。

淑乃は、ぐっすりと眠っている。

起こしてしまうから静かにしろってことだろう。

「大地、こんな時にどこに行ってたんだ？」

俺は、マサルからそう尋ねられる。

「もしかしたら、淑乃を治せるかもしれないんだ。」

「なんだと!？」

俺は、隊長から聞いた、どこかの岬にあるかもしれないというサンブルワクチンについて話した。

二人からどこでその情報を手に入れたんだ？ と聞かれたが、人間界に戻ったと言うわけにはいかなかったので、近くにいるデジモンから聞いたということにした。

「じゃあよ、その岬が見つければワクチンがあるかもしれないんだな？」

「だが、デジタルワールドは広い。岬の場所もわからないのでは、見つけるのは困難だぞ。」

「こんなところで何もしないよりはましだろ？ 大地だってそう思うよな？」

マサルは俺の方を向いてそういった。俺は首を縦に振った。

「まずは、岬の場所を調べないといけないから、また近くのデジモンたちに聞いてみよう！」

俺の言葉に、マサルとトーマはうなずいた。淑乃の体調もあまりよくなる兆候はないので、急がないといけない。

「……その岬なら僕が知ってる。」

そのときだ。いきなり洞穴の入り口から別の声が聞こえた。

俺たちが驚いてそっちのほうを見るとファルコモンがイクトを背負って立っていた。

とっさに身構えるが、向こうから戦闘する意思が感じられなかった。とりあえずということで、きつそうにしているイクトのために寝床をもう一つ作りそこに寝かせた。

トーマが診察すると、イクトは淑乃と同じ症状だということが分かった。

「当然だ！ こいつがイクトにウィルスをうつしたんだから！」

「それで、ファルコモン。岬を知ってるって……」

トーマに怒鳴るファルコモンに俺は問いかける。
ファルコモンは、俺の質問にゆっくりとうなずいた。

「多分、その岬は流れ者の岬のことだと思う。……できればついてきてほしい」

「場所がわかるの？」

俺の言葉にファルコモンは再度うなずく。

まさか、敵だと思っていたファルコモンから情報を得られるなんて思わなかった。

「本当なんだな？」

「僕だつてイクトを助けたいんだ。嘘なんてつくものか！」

マサルが尋ねるとファルコモンがそう答える。

嘘についているようには見えない。でも、それならどうして自分だけでは行かないんだ？

俺は疑問に思つて尋ねてみた。すると、ファルコモンは言葉に詰まつて俯いた。

「穢れた場所だから……」

俯いたままファルコモンが答える。

その流れ者の岬は昔人間が住んでいたという噂があり、そのため、デジモンたちは気味悪がつて近づかないらしい。

ファルコモンは、同じ人間である俺らならその流れ者の岬に行つても問題ないはずだと言う。

「どこまで信じていいものか……」

トーマがつぶやく。敵であるファルコモンの情報であるため信じられないのだろう。

「私は信じるわ。彼が嘘をついているようには見えないもの」

ララモンがそういった。

「俺も、ファルコモンが嘘をつく意味なんてないと思う。」

俺もララモンの後にそういった。

隊長が言っていた岬と同じところなのかはわからないが、人間が住んでいたということは、その可能性も十分にあり得る。

それに、ファルコモンとイクトはパートナーなんだ。

そんなパートナーが危険だからこそ敵である俺らに頼みに来たんだろう。

ララモンと俺の言葉に、マサルとトーマもうなずいた。

ファルコモンに道案内を頼み、明日の朝早くからその流れ者の岬に行くことになった。

第27話 岬の搜索

流れ者の岬の場所を聞くと、幸いなことにそこまで遠い場所にはないようだ。

ここからなら5〜6時間あれば着く距離にある。

噂がでたらめだったときのことを考えると、早めに真偽を確かめたほうがいいだろう。そう判断した俺たちは、ララモンに淑乃とイクトを任せて朝早くに洞穴を出た。

.....

.....

.....

「あそこが流れ者の岬だ。」

ファルコモンがそういつて指した指の先には崖があり、その崖の下に一軒の建物があった。

「よし、じゃあ中に入るぞ」

マサルがそういつて扉を開ける。

中を見ると、洋館のような構造をしていた。

「ダイチ、デジモンの気配がしないよ」

ルナモンが俺にそういつてくる。

「だから言つたろ。デジモンたちは気味悪がつてここには近づかないつて」

ファルコモンはルナモンの言葉にそう言った。

「だが、油断は禁物だ。」

ガオモンが俺らにそう言ってくる。

階段を上って二階に上がるが何の気配もしない。

埃っぽい部屋もたくさんあり、何年も誰も来ていないようだ。

「マスター、あれを」

ガオモンがそういつて指をさした先には一台のパソコンが置いてあった。

「かなり型の古いパソコンのようだ」

トーマがつぶやく。

「人間がいたのは間違いないようだ。しかし動くかどうか……」

トーマはそう言つて電源をつけた。

起動音がして、画面が明るくなる。

「これってDATSのマークじゃない!？」

画面が明るくなって一番に表示されたのはDATSのマークだ。

やはり、これはデジタルワールド探検隊の誰かが使っていたものなのだろう。

トーマはマウスを操作し、ログインしようとするが、パスワード入力画面が現れる。

「パスワードか……厄介だな」

トーマがつぶやいた。

このパスワードを突破できれば、ここに住んでいた人間について何か分かるかもしれない。
もしかしたら、マサルの子供に関することも……

「解析できそう？」

俺がトーマに尋ねると、時間がかかりそうだと答えられた。

仕方ない、ここはトーマに任せて、俺たちはワクチンを探すことにしよう。

そう決めた俺たちは、俺・ルナモンとマサル・アグモン・ファルコモンの2組に分かれて探すことにした。

俺とルナモンがひとつのドアを開けるとそこには本がたくさんあった。

どうやらここは書庫のようだ。

「ここにはワクチンありそうにもないな……」

俺はそうつぶやく。

だが、この住人についての情報がなにか分かるかもしれない。

とりあえず、俺は書庫の中を探索してみることにした。

それにしてもすごい埃だ。

誰も使っていないのだから当然だけど。

ここにある本もぼろぼろでまともに読める本は少ない。

まともに読める本もあまり関係のある情報に関しては書いていなかった。

趣味や暇つぶし用に持ってきた本なのかもしれない。

この調子だと、役に立つ情報は得られそうにもないな。

俺はそう考え、今持っている本を棚に返す。

最後にと、一番奥にある本棚を調べてみることにした。

なんとなく、他の本棚と違った雰囲気を感じたからだ。そこにある本棚から一冊抜き取って表紙を見て驚いた。

今までの本と違い、この本棚にある本のほとんどがデジモン文字で書かれていたからだ。

ルナモンに読んでもらおうと、辺りを見回したが、いなかった。

俺も一度ルナモンからデジモン文字を習おうとしたことがある。

ただ、似たような文字ばかりで覚えにくく、途中で断念してしまった。

まあそれでも少しだけなら読めるけど……

「おい。ルナモンどこいるんだ？」

俺はやや大きめな声でルナモンを呼んだ。

そのとき、近くで何かが崩れる大きな音が聞こえた。

あわててその場に駆け寄ると、本の山ができていた。

「ふええ……。ダイチー、助けてー」

中からルナモンの声がする。

本棚から本を崩してしまったのだろう。

俺は本をどかすと、中からルナモンがでてきた。

しかし、埃まみれになっていて、立派な白ウサギになっていたが。

「ふう、ひどい目にあった。ここには何もなさそうだし、別の場所に行こうよ」

ルナモンは被っていた埃を落とすと、そう言って、書庫入り口のほうに歩いていった。

俺も行こうと立ち上がると、手に持っていたさっきの本のことを思い出す。

「ダイチー、早く早くー!」

ルナモンがせかすようにそういつてくる。

デジモン文字で書かれているこの本に関してはすごく気になるが、ワクチンを見つけるのが先決だろう。

俺はそう考え、本棚から数冊本を抜き取ってリュックにしまうと、ルナモンと一緒に書庫を出た。

2階の部屋はすべて探したが、ワクチンらしきものは見当たらないか

った。

仕方ない、マサルと合流するかと考えると

「危ない、ダイチ！」

ルナモンが俺に体当たりをしてくる。

何するんだと、文句を言おうとすると何かが飛んできて、俺の頭上を通り過ぎた。

「デジモンだ！」

ルナモンが俺にそういった。

俺に攻撃仕掛けたって事はおそらく敵だろう。

そのデジモンは入り口の大広間にいるようだ。

俺らはその大広間まで走った。

大広間に着くと、ブロッサモンとマサルたちがいた。
マサルとアグモンはブロッサモンの蔓につかまっいて、何か叫んでいる。

よく状況はつかめないが、とりあえず、マサルたちを助けられないとな。
俺はルナモンのほうを見る。

ルナモンはうなずいてブロッサモンのほうへ飛び出した。

「>ルナクロー<！」

ルナモンの作り出した闇の爪がマサルたちを捕まえている蔓を切り裂いた。

「大地、ルナモン！」

「マサル、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。ワクチンを見つけたんだが、こいつに邪魔されてよ」

マサルがそういつてファルコモンの方を見た。

ファルコモンは手に小瓶のようなものを持っていた。
おそらくあれがワクチンだろう。

「ここは俺たちに任せて早く行け！」

マサルはファルコモンに向かって叫ぶ。

ファルコモンは少しの間考えていたが、うなずくと出口に向かって走り出した。

ファルコモンが出ようとするのをブロッサモンが妨害しようとするが、ガオモンが飛び出して止めた。

「すまない。パソコンを奴に破壊された！」

そう言つてトーマが部屋から出てくる。

なんだって！？　せつかくの手がかりだったのに……

俺、マサル、トーマはそれぞれのデジヴァイスを手に取り、パートナーを進化させようと構えた。

「うわあああ！！！」

そのときだ、外からファルコモンの叫び声が聞こえた。
窓から外を見ると、ブロッサモンがもう一体いてファルコモンを捕まえている。

「もう一体だと!？」

マサルが叫んだ。

「うふふ、残念だったわね。」

そういつてブロッサモンは笑う。

一刻も早く淑乃にワクチンを届ける必要があるのに……

ここからどうにかしてファルコモンを助けられないといけない。

ルナモンでは、ここから外にいるブロッサモンにまで攻撃できないだろう。

いや、できてもこっちのブロッサモンに邪魔をされてしまう可能性が高い。

それならば……

そう考え、俺はカードを取り出して、ルナモンをクレシエモンへと進化させる。

「>アイスアーチェリー<！」

クレシエモンは両手の武器を組み合わせボウガンのような形に変えると氷の矢を放った。

その攻撃を防ごうとブロッサモンは蔓を出す、その蔓を吹き飛ばし、矢は窓を突き破って外にいるブロッサモンに命中した。

矢が当たり、ファルコモンはブロッサモンから開放されたようだ。

「ファルコモン、ここは俺たちに任せてワクチンを届けるんだ！」

俺はファルコモンに向かってそう叫んだ。

ファルコモンは俺たちを見て頷くと、淑乃たちがいる方角へと飛んでいった。

「僕たちも行くぞ、ガオモン！」

「イエス、マスター」

トーマもガオモンをマツハガオガモンへと進化させて洋館内にいるブロッサモンを外へと吹き飛ばす。

そのブロッサモンはそのまま海に落ちていった。

「残りは一体か。」

俺がそうつぶやいたとき、海の中から先ほどのブロッサモンが飛び出してきた。

ブロッサモンは顔の花びらをプロペラのように回して空を飛んでいる。

うそお！？ ブロッサモンって飛べたの！？

驚いたが、そのブロッサモンはファルコモンが飛んだ方角に向かっていているようだ。

ファルコモンが危ない！

「こっちのブロッサモンは俺に任せて、トーマたちはあっちのやつ

をお願い！」

マツハガオガモンのスピードならすぐに追いつけるだろう。
クレシエモンもそれなりに早いが、それは地上に限ってのことだ。
白い羽を使ってアシストしないと飛ぶことはできない。

それに、白い羽で飛んだとしても、もともと飛べるマツハガオガモンには勝てないだろう。

トーマたちは頷いて、マツハガオガモンに乗ってブロッサモンを追いかけた。

「あら、あなた一人でいいの？」

ブロッサモンは俺に問いかけてくる。

「相手がブロッサモンならクレシエモンだけで充分勝てるよ」

俺はその言葉にそう返し挑発する。

「生意気な人間ね！　>スパイラルフラワー<！」

ブロッサモンはそういつて花を手裏剣のように飛ばしてきた。

クレシエモンは両手の武器でそれを叩き落す。

ブロッサモンなら前にも戦ったことがある。対策ならばうちりだ。
空中戦ならまだ分らないが、地上でなら負けるわけがない。

「>ソーンウィップ<！」

ブロッサモンは自分の蔓で攻撃してくる。

「クレシエモン、今だ！」

俺がクレシエモンにそういうと、クレシエモンはうなずいて、ブロッサモンに突っ込んでいく。

「>ルナティックダンスく！」

クレシエモンはブロッサモンが伸ばしてきた蔓を切り裂くとそのまま本体に攻撃する。

ブロッサモンは倒れ、デジタマに戻っていった。

その後、トーマたちと合流する。

トーマたちもうまくブロッサモンを倒せたらしい。

もう少し、流れ者の岬で手がかりを探してみたかったが、今は淑乃のことが優先だ。

俺たちは淑乃がいる洞穴に向かうことにした。

.....

.....

.....

「おかえりなさい」

洞穴につくと、ララモンが出迎えてくれた。

淑乃は眠っているようだ。

熱も下がっているみたい。

「あれ？ イクトは？」

俺はララモンに尋ねる。

「ファルコモンが連れて行っただわ。治るまでいたら？ って止めたのだけど……」

ララモンの話では、ファルコモンは淑乃に一番に薬をくれたらしい。

「言っただろ。あいつは男だってな」

マサルは自慢げにそういう。

「まったく、君ってやつは……」

トーマはあきれているようだが、心なしかうれしそうだ。

ファルコモンには少し話を聞いてみたかったんだけど……

まあ、メルクリモンのところに向かう途中でまた会えるだろう。

トーマの診察によると、一晩安静にしていれば明日からは行動できるだろうとのこと。

俺たちは、明日に備えて寝ることにした。

第28話 雪山の戦闘（前書き）

急に寒くなったせいか風邪を引いてしまいました。

なんとか書き上げましたが、次遅れるかもしれません。

第28話 雪山の戦闘

「……と、いうわけで淑乃も無事に治ったようです」

俺は、こっそりと人間界に戻っていた。

マサルたちに内緒で来るのは大変だったけど、ディーアークでゲートを開けるとするのは内緒だし、仕方ないことだと思う。

「そうか、それはなによりだ。」

隊長はそういつて安堵の表情を浮かべた。

「そうだ。大地、これを渡しておこう」

隊長はポケットから小型の機械を取り出してそういった。

「これは発信機だ。これがあればデジタルワールドでのお前たちの位置が分かる。近々、こちらから一人デジタルワールドに送ろうと考えていてな。お前たちと合流するときに必要なものだ。くれぐれもマサルたちには内緒にしておくように。」

俺は、発信機を受け取ると、頷いた。

デジタルワールドに行ったときに渡された発信機はイクトに壊されてしまったし、俺が持っていると言えば、疑問に思われてしまうからだろう。

俺は、その発信機をポケットにしまうと、再度ゲートを開いてデジタルワールドへと戻った。

「（……それにしても、一人送るって誰を送る予定なんだろうか？）」

言い方からして、隊長自身じゃないだろうし、オペレータの二人とも考えにくい。

マサルたちと合流した俺は、どこに行ってたんだ？ という質問をうまくごまかしつつ、そのことばかり考えていた。

……

……

……

「やっと雪山についたな」

俺たちは今、雪山のふもとにいる。
ここを超えれば無限氷壁だ。

「朝からずっと歩きっぱなしで腹へって疲れたよ……」

さつきからモタモタと歩いていたアグモンがぼやく。

「じゃあない、ちょっと休憩しようぜ」

それを見たマサルが提案する。

「ダメよ、ここじゃ隠れるところがないでしょ。敵に襲われたらどうするの!」

「うつ、……でもよ、大地ならなんとかなるんじゃないか？」
「へ？ 俺？」

マサルが返答に詰まったかと思うとこちらに話を振ってきた。

「お前のカードスラッシュとかでよ、ここらに横穴作ったりできないかなと思ってよ」

マサルは俺のカードスラッシュの動作を真似てそういつてきた。
俺はため息をつく。

「俺のカードを何でもできる便利屋とか思ってたない？ まあないこともないけど……」

あきれた表情でマサルに返したあと、俺はカードホルダーから一枚のカードを抜き取ってマサルに見せた。

「お前……！ これドリモゲモンじゃねえか！」

マサルからしたら強く印象に残っているカードだろう。
初めてデジタルワールドに来たときに戦ったデジモンだし。

「このカードを使えば、ルナモンの手をドリルみたいにすることが
できるよ。それで掘れば、一応穴掘ることも可能だけど……止めと
く。」

「なんでだよ！？」

「そりゃそうよ。」

淑乃さんが話に参加してくる。

「もし穴とか掘ってその振動で雪崩が起きたらどうするの？」

淑乃さんの意見には俺も頷く。だからこそ使おうとは思わなかったんだし。

「なるほど……、お前結構考えてるんだな」

マサルは感心したように淑乃に言った。

俺から見たら、マサルはもう少し考えて行動するべきだと思うけど。

「当然でしょ。ここからはリーダーである私の指示に従ってもらわ。いいわね？」

マサルの言葉に淑乃が答える。

淑乃の迫力に負けたか、マサルとアグモンは姿勢を正して返事をした。

淑乃はその返事に満足したのか再び歩き出す。

「……いつから淑乃がリーダーになったんだ？」

「少なくとも、キミじゃなかったのは確かだね」

「確かに」

マサルの問いにトーマが返し、俺も同意する。

マサルのような猪突猛進タイプがリーダーだったらDATSはもう終わっているな。

マサルの暴走を抑えるようなストッパーがリーダーにふさわしいと思う。

そっという意味では、淑乃は最適だと思う。

このチームの中でも最年長だし。
言葉に出して言ったら怒られそうだけど。」

.....
.....
.....

「ここから先、通さない！！」

「.....ここまでは順調に来れたんだけどなあ」

俺はぼそっとつぶやく。目の前にはイクトとファルコモン。
突然現れて行く手を阻んできたのだ。

「大地、言ってる場合かよ。イクト、止めれるもんなら止めてみる
！」

マサルが俺につつこんだ後、イクトのほうへ駆け出していった。

イクトも病気はすっかりと治ったみたいだ。
治ったばかりの相手で少し戦いにくいが行く手を阻まれたらやるし
かない。

俺らも戦闘態勢に入る。

「>クナイバネく！」

イクトがファルコモンをペックモンに進化させて攻撃してきた。

しかし、その攻撃はまったく当たらない。

「へっ、どこ狙ってるんだ」

アグモンが挑発をする。

そのとき、ペックモンが飛ばしてきたクナイのような羽が爆発する。爆発するなんて聞いてないぞ！？

俺らは必死で避けた。ペックモンは次から次へとクナイを飛ばしてくる。

「くそ、これじゃ進化する余裕がない」

俺がそうつぶやくと、いきなり地面が揺れだした。

「うわぁ、地震だぁ！？」

ルナモンが慌てる。

「地震なんかじゃない、あれをみる！」

トーマがそう言って指をさす。

その先には雪が崩れてきているのが見えた。

あれって……雪崩じゃん！？

さっきの爆発のせいかな？ 何が原因にせよ、やばいことに変わりはない。

「ルナモン！ >カードスラ……駄目だ！間に合わない」

空を飛んで回避しようとしたが、間に合わず、雪崩に巻き込まれてしまった。

「ダ、ダイチー……うわああ!!」

ルナモンも同じく巻き込まれてしまう。

「大地、ルナモン!」

遠くからマサルが呼ぶ声が聞こえた。

……

……

……

「いてて……、死ぬかと思った。」

「僕たち、運はいいよねー」

俺は自分の上に積もっていた雪を退けて立ち上がった。

目の前には岩壁があった。どうやらこの高さを落ちてきたらしい。

「大地、ルナモン! 無事だったのね」

ふと声が聞こえ俺はそっちのほうを向く。

向いた方角から、トーマと淑乃、そしてララモンがこっちに向かってくるのが見えた。

トーマは足をくじいたらしく、淑乃がトーマを支えていた。

「なんとかね。他の人たちは？」

「ここにはいないわ。大地たちと一緒にじゃないの？」

ララモンが答える。

俺とルナモンは首を横に振った。

マサルたちも無事だといいいんだけど……

「淑乃、なにか来るわ！」

ララモンがそう言った。まさか、敵！？

俺たちは近くにあった岩の窪みの中に隠れることにした。

「おかしいですね。確かこの辺りに落ちたはずなのですが……」

窪みから様子を見ると、ゴツモンがヤンマモンに乗って現れた。

「あれってジュレイモンのときの……」

「やっぱりあれもメルクリモンの仲間なのね」

淑乃はそういった。

「なんとかあいつを倒してマサルたちと合流しないと」

俺は頷いてディークを取ろうと腰に手をやった。
しかし、そこには何もついていなかった。

「……ごめん。雪崩に巻き込まれたときディークを落としたみたいだ」

「だったら私と淑乃の出番ね」

「私！？ 無理よ、あんなの私たちだけじゃ倒せっこない」

淑乃は首を振って答える。

なにやら様子がおかしい。いつもなら勇んで前に出ていくはずなのに。

俺がそう思ったとき、淑乃はぽつりぽつりと話始めた。

敵はだんだんと強くなる一方。

他のみんなは平気みたいだけど自分にはついていけない。
うすうす気がついていて。自分が足を引っ張ってるって。
病気で倒れた時だって……

話はそんな内容だった。俺らの間に沈黙が流れる。

「もしかして、私だけ完全体になれないことを気にしているの？」

ララモンが尋ねる。

「大丈夫よ、淑乃ならすぐ私を完全体にできるわ。だって淑乃には才能があるもの」

「やめて！！ 私には才能なんてないわ」

ララモンの言葉に淑乃は耳をふさぐ。
完全に心を塞いでしまっているみたいだ。
まるで、この間までの俺のように……

「ダイチ！ 外！」

急にルナモンが叫んだ。そっちのほうを見るとクラモンが外からこ
つちを見ていた。

「見つかってしまったか。仕方ない、進化はできないけどルナモン、
行くぞ！」

「待って、私が行くわ。トーマと淑乃のことお願い」

ララモンが俺にそう言ってくる。俺は黙ってうなずいた。
その後、ララモンが一人で窪みから出て行った。

さっきのララモンからは強い意志を感じた。
今の弱気な淑乃を立ち上がらせようと考えているのだろう。
ここはララモンに任せてみることにしよう。

俺がそう考えると、突然地響きがおきる。

何かあったのかと外を見るとララモンとマンモンが対峙していた。

「マンモン、完全体か……」

俺はそうつぶやいた。

成長期であるララモンには厳しいかもしれない。

かといって俺もディーアークがないから進化できないし……

「マスター！」

突然、ガオモンが現れた。

ガオモンはトーマにデジヴァイスを渡す。

そのとき、トーマが怪我をしていることに気がつき、トーマを支えた。

「ガオモン、俺のディーアークは知らないか？」

俺がそう尋ねると、首を横に振る。

そうか、と俺は首をうなだれた。

「マスターたちは私が見ます。ミス淑乃はララモンの援護を」

ガオモンがそういった。

「私はもう戦えない。戦うのは嫌なの！」

淑乃はそう答える。

「ララモンは一人で戦っているのですよ。あなたを守るために」

ガオモンがそういうと、淑乃はうつむいた。

「ララモンが……自分のパートナーが必死で戦っているのに何も思

わないの？」

俺は淑乃に言った。淑乃は黙ったままだ。

「ララモンが戦っているのは淑乃を守るためなんだよ。たとえ進化できなくても、成長期と完全体で勝ち目がなかったとしても、自分にできることを精一杯やっているんだよ。」

外からは、ララモンが必死で戦っている音が聞こえる。

「自分に……できること……」

「俺は今、デイーアークを持っていないからルナモンを進化できない。でも、淑乃は違う！ララモンを進化させられる……パートナーを支えることができるじゃない。ララモンがやっているように、自分にできることがあるならそれをやるべきなんじゃないかな？」

俺は、そう言って笑顔を見せる。

「ダイチ、僕たちも行こう。」

ルナモンが俺を見てそういった。

俺はうなづく。

「じゃあ、俺たちも戦ってくるね。デイーアークがなくても、ララモンを……仲間を守りたいから」

そう言って俺は窪みの外へと歩き出す。

外へ出たとき、歌が聞こえた。

これってララモンの>シング・ア・ソングく？
でも前に聞いたときと歌が違っている。

【side 淑乃】

「この歌は……」

私はつぶやく。

この歌は、私とララモンが出会ったとき、私がピアノで弾いていた歌。

弾き終わると同時にデジタマが現れてパートナーになったんだっ
たわね。

それからずっとララモンと一緒にだった。

私は、窪みから飛び出し、ララモンの近くに駆け寄る。

マンモンは>シング・ア・ソングくを受けて眠っている。

「ごめんね。私忘れてた。どんなに苦しいときにも私の傍にはあな
たがいたことを」

大地に言われたことを思い出す。パートナー、支えあう存在。

私はずっとララモンに支えられてきたのにそのことを忘れていた。

「うん。でも私だけじゃない」

「え？」

私が首をかしげるとマサルが崖を滑り降りてくるのが見えた

「淑乃！大丈夫か？今助けに行くからな」

「あなたには大勢の仲間がいる」

後ろを振り向くと、大地たちもいる。

私は一人なんかじゃない！

さっきまで一人で悩んでいたなんて馬鹿みたいに思った。

【side 大地】

淑乃も元気になってこれで安心かな？

やっぱりパートナーの力って偉大だな。

俺がしみじみとそう感じているとどこからともなくゴツモンが現れた。

「生意気、生意気です。あなたたち、もう許しませんよ！>アン
グリーロックく！」

そう言ってゴツモンは岩を飛ばしてマンモンに当てる。

その攻撃でマンモンは起きてしまった。

せつかくいい空気だったのに……

邪魔をしゃがって。

ディーアークさえあればこっちも空を飛んであいつをやっつけるのに。

ひとまず、まずはマンモンを何とかしなければ。

俺はそう思っただけマンモンのほうを見ると、淑乃からデジソウルが噴出しているのが見えた。

あれって……。

「行くわよ、淑乃！」

「ええ。デジソウル フルチャージ！」

「ララモン進化！ ライラモン！！」

ララモンが完全体！？ どこかリリモンにも似ているような……いつもなら、ここでディーアークを向けるんだけど今持っていないからなあ。

「>ビューティースラップ<！」

ライラモンは両手でマンモンにビンタをかまして、吹っ飛ばした。

「ララモンにあんなパワーが秘められていたなんて……」

後ろでトーマがつぶやくのが聞こえた。

俺もちょっと驚いた。マンモンのあれだけの巨体を吹っ飛ばすなんてな。

吹き飛ばされたマンモンが起き上がる。

「今よ！ ライラモン！」

淑乃が叫ぶ。

「>マールブルショット<！」

ライラモンは両手から弾を発射した。

マンモンはその弾に当たってデジタマに戻っていった。

「おのれ！覚えておくのです！」

ゴツモンはそう言って飛び去っていった。

逃げたか。でも、今はそんなことどうでもいい。

俺は淑乃のほうに駆け寄った。

「やったな！淑乃」

マサルとトーマも集まる。

「これで完全体4体そろい踏みだ」

「ライラモンもかっこよかったよ」

俺たちは集まって笑いあった。

「ああ、大地。お前のデジヴァイス、崖の上に落ちてたぜ」

マサルが唐突にそういつてディアークを取り出した。

「ありがとう、マサル」

俺は礼を言つてディアークを受け取る。

俺はそのままライラモンの方へとディアークを向ける。

『ライラモン 完全体 妖精型 ワクチン種

必殺技は葉の様な手先から無数の細いビームを放つ>ライラシャ
ワークと

伸縮自在の両手で連続ビンタする>ビューティースラップ<』

壊れているか心配だったけど、問題なく情報が表示された。

今回は、全然戦いに参加できなかったけど、もう無限氷壁はすぐ近くだ。

そこで、メルクリモンと戦うことになるかもしれない。

俺はディアークを握り締めて無限氷壁がある方向を見た。

第29話 目的の場所

俺たちは、やっとの思いで無限氷壁についた。
今までのデジタルワールドの冒険に比べたら短いけどそれでも大変だった。

「あのどこかにメルクリモンが潜んでいるってわけだな」

マサルがそうつぶやく。

さて、どうやって探すかな……

俺がそう考えているとチャプと水の音が聞こえた。
その方向を見てみると

「おぬしたち、困っているようじゃな」

釣りをしている湯島さんがいた。なんでこんなところに？

「デジヴァイスのおっちゃん!？」

マサルも驚いて湯島さんに駆け寄った。

そういえば、隊長が一人送るって言ってたっけ……

まさか湯島さんだったとは予想だにしていなかった。

「まったく、一匹も釣れなんだ。餌が悪かったのかのお」

そういつて湯島さんは、釣竿をしまい始める。

「ここって魚いるの?」

「ここの生き物全部デジモンだしなあ。魚型デジモンならいるかもしれないけど・・・」

ルナモンに俺はそう答える。さすがにデジモンはつれないだろう。

「まったく、神出鬼没なおっちゃんだぜ」

マサルが言った。

「なんであなたたちはそんなに親しげなのよ」

「俺にデジヴァイスをくれたおっちゃんだからな」

淑乃の問いにマサルが答える。

トーマも疑問顔だし、誰もこの人がDATSの局長ってこと知らないのか？

俺はそう思って湯島さんのほうを見た。

湯島さんは茶目っ気に人差し指を口に当てた。

……内緒ってことね。

俺は黙って頷いた。

「さて、おぬしらついて来い。メルクリモンのところへ行きたいんじゃない？」

そっいつて湯島さんが立ち上がる。

知っているのかと尋ねると、だからついて来いと言っている、と返される。

トーマと淑乃は湯島さんのことを信じていいのかどうか迷っていたが、

「俺は信じるぜ。どっちにしろメルクリモンのところには行かなくては行けないんだ。だったら、俺はおっちゃんを信じる」

マサルがそう言っただけで湯島さんの後を追ったのを見て、ついていくことにした。

なんで、メルクリモンの居場所を知っているのかは疑問だけど、DATSの局長だし、嘘ではないんだろう。

俺も、そう考えてマサルたちの後を追った。

湯島さんについていく途中にはたくさんの空洞があった。いろんな場所につながっているようだ。

湯島さんが来なければ迷っていたかもしれない。

「ここが入り口じゃ」

湯島さんが一つの洞窟の前で立ち止まる。

ここからメルクリモンのところへいけるのか。

俺がそう思って気を引き締めると湯島さんが急に振り返って釣竿を振った。

釣竿の先には針じゃなくて吸盤があり、そこには吸盤にくっついたデジモンの姿。

「あれはクラモン？」

「ひょっとして見張られていたのか？」

「そうかもしれん。」

俺とトーマがつぶやくと湯島さんがそう返す。
全然気がつかなかった……

洞窟の中に入ると中は氷でできているようで滑りやすい。
俺たちは気をつけながら歩いているとルナモンが立ち止まって辺りを見回した。

「どうした？ ルナモン」

「何かの足音がする！」

俺が尋ねるとルナモンはそう答える。

足音？ と首をかしげると

「早速来おったか・・・」

湯島さんがつぶやいた。

上のほうを見るとそこにはツメモンの大群がいた。

「へっ、かかってきやがれ！」

マサルはやる気満々のようだ。

「待って、マサル。メルクリモンのところに行くまでにエネルギーを使うのはよくないよ」

「大地の言つとおりだ。ここは目の前の敵だけを倒して先に進むべきだ」

俺とトーマはマサルにそういった。

マサルは逃げることに不満を持っていたようだが、今の目的はメルクリモンに会うことだ。

しぶしぶとうなずいた。

俺たちは、逃げることを優先に、目の前の敵のみを倒して走り出す。氷でできた床は走りづらく、何度か滑りそうになったけど無事、ツメモンの大群から逃げる事ができた。

洞窟を抜けると氷でできた大きな建物が見えた。

綺麗で、まるで氷の宮殿のようだ。

淑乃たちも同じことを思ったようで、トーマから

「ここは敵の腹も同じなんだ。いつ攻撃されてもおかしくない」

と注意を受けていた。

「ダイチ、ディーアークが……」

ルナモンが俺にそう言うてくる。

そのとき、初めてディーアークが何かに反応しているのに気がついた。

「なんだ、これ？」

俺がディーアークを手にとってみると、その反応は消えてしまった。なんだったんだ？さっきの反応はもしかして雪崩のときにおかしくなったかな？

「大地、どうした？」

俺が首をかしげているのに気がついたマサルがそう聞いてきた。俺は首を振ってなんでもないと答えた。

いぎ、メルクリモンのところへと、歩き出そうとしたとき、ヒュッとブーメランが飛んできた。

慌ててそのブーメランを避けてブーメランが飛んできた方向を見る。そこには、予想通り、イクトとファルコモンの姿があった。

「人間ども、俺、必ずお前たち、倒す！」

「おもしれえ、決着つけてやるぜ！」

イクトとマサルはそう言ってお互いのいる方向へ駆け出した。

ファルコモンもこつちの方向に手裏剣を飛ばしてくる。

「>ロップイヤーリップル<！」

ルナモンは発生させたシャボンで手裏剣を相殺した。

「ダイチ、少し下がってて」

ルナモンに言われるままに下がる。

そして、何が起きてても対処できるようにディーアークとカードを構えた。

ふと、マサルのほうを見るとイクトと取っ組み合いをしている。

「止めるんじゃ、イクト！ お前は……」

「イクトー。手を貸しますよ！」

湯島さんが何か言いかけたがそれを遮って、ゴツモンが現れた。またこいつか。今度こそ逃がさない！

俺はそう思っでルナモンにゴツモンを倒すように指示を出そうとした。

「>アングリーロック<！」

ところが、ゴツモンが大きな岩を飛ばしてきて、氷柱に当たる。当たった氷柱が俺の真上に振ってきて慌てて避けたため、指示を出せなかった。

ゴツモンは何度も岩を飛ばして氷柱を崩す。

さっきまで戦っていた俺たちだったが、氷柱を避けることで必死だ。でも、これってイクトまで巻き込んでいるんじゃ。

「アニキー！」

アグモンがマサルを呼ぶ声が聞こえる。

そっちのほうを見ると、氷の地面に亀裂が走っている。

もしかしてマサル、落ちたのか!?

亀裂は攻撃がひどくなるたびに大きくなって、アグモンとファルコモンも落ちてしまった。

くっ、助けに行きたいけど、今は自分のことだけで精一杯だ。俺たちが、岩に埋もれてしまうと、ゴツモンの攻撃は止んだ。ルナモンに岩をどかしてもらい、立ち上がる。

「ダイチ、大丈夫?」

「あまり大丈夫じゃ……ないかな」

大きな怪我こそしていないけど、体中が痛い。後ろを見ると、トーマと淑乃も起き上がっていた。

「マサルとアグモンは?」

トーマが起き上がって辺りを見回して言った。

「亀裂に落ちたみたい……」

俺はそう答える。

すぐ助けに行かないと、とトーマが立ち上がると、

「そのまま、そのまま動かないでください。皆さん。」

ゴツモンが現れた。見ると湯島さんが捕まっている。

俺たちは、デジヴァイスを向けて、進化させようとするが、ゴツモンは湯島さんを人質にとり、デジヴァイスを捨てるように命令した。仕方なく、言われたとおりにデジヴァイスを手放す俺たち。

「最悪なんですけど」

淑乃さんがつぶやく。

どうやって挽回するか……俺がそう考えていると

「ふっ、お前さんでは話にならんの」

湯島さんが言った。湯島さんはそのまま、奥にある氷の建物のほうを見て

「メルクリモン、見ておるんじやろ。あんたに聞きたいことがある。ここは一つ腹を割って話さんか？」

そういった。

ゴツモンは無礼だと怒るが、メルクリモンの声がして止められる。

「ゴツモン、その男を連れて来い」

メルクリモンの声が洞窟に響く。

ゴツモンはしぶしぶといった感じではあったが、メルクリモンの命令には逆らえないのだろう。

湯島さんを解放し、

「こっち、こっちです。ついてきなさい」

そういつて、氷の建物のほうへと歩き出した。

俺、トーマ、淑乃は顔を見合わせると、うなずいてゴツモンの後について行く事にした。

マサルのことにも心配だが、あとできっと合流できる。そう信じるこ

とにした。

氷の建物にはいり、しばらくすると大きな広間にでた。
そこには大きな椅子があり、そこにメルクリモンが座っている。

「久しぶりだな」

「10年ぶりか。覚えていたようじゃな、わしの事」

メルクリモンと湯島さんがそう話したのを聞いて俺たちは驚いた。
まさか湯島さんとメルクリモンが知り合いだなんて思ってもいなかったし。

「そうか、この人は10年前のデジタルワールド探検隊のメンバーなんだ」

トーマがそう言った。

だから、湯島さんはメルクリモンのいる場所のこと知っていたのか。

「イクトはどうした。」

メルクリモンがゴツモンに尋ねるとゴツモンはあせり始める。
まあ、自分の攻撃で巻き込んだと言えないよな。

「人間の子供を育てていたのか」

湯島さんがそういった。

「イクトは我が子も同然、人間は親子の絆を教えてくれた」

「ならばなぜ、人間界を攻撃する！」

「黙れ！ 先に攻撃してきたのはお前たち人間ではないか！」

「なんじやと……。確かに10年前我々人間はデジタルワールドへ乗り込んだ。じゃが、侵略するつもりがなかったことはお前が一番よく知っているじゃろ」

「よくもそんな嘘を！！」

メルクリモンは拳を握り、震わせながら

「あの男は我々と約束した。デジタルワールドと人間界の平和のため、お互いどちらの世界にも手出しはしないと。」

といった。メルクリモンは続けて怒りで声を震わせながら

「だが人間は約束を破った。なんの前触れもなく大勢のデジモンたちを殺したではないか！」

といった。

「本来ならデジモンは負けるとデジタマに戻る。しかし、そのデジモンたちはデジタマに戻らなかった。人間は手当たり次第にデジモンを消し去って、二度と生まれ変わることができないように。……以前イクトを育てていたユキダルモンもそれで殺されてしまったのだ。我々はだまされたのだ」

「馬鹿な……。そんな話信じられるか。我々は人間とデジモンどちらも平和に暮らせるようにと……」

湯島さんのその言葉にメルクリモンは拳を振り上げる。

「黙れ！ もう我慢ならん。罪を認めようとしなない人間どものその口、永遠に閉ざしてくれる」

そう言つてメルクリモンは拳を振り下ろす。

衝撃波が生まれ、俺たちを襲う。

慌てて避けるが完全に避けきれず、足にダメージを受けてしまった。

「今度は逃がさん！」

そういつてメルクリモンは再び拳を振り上げる。

絶体絶命かと目をつぶったら、

「待ちやがれ！！」

マサルがそう叫んで2階のほうから飛び降りてきた。

マサルは飛び降りた勢いでそのままメルクリモンを殴る。

「その拳の熱きデジソウルは……」

「忘れたとは言わせねえぜ。この大門マサル様をな！」

「大門……？まさか大門スグルの息子か」

メルクリモンはマサルの拳に宿るデジソウルを見て驚いているようだ。

どうやら、マサルの父親のことを知っているらしい。

マサルが父親のことについて尋ねると、

「答えて何になる！」

メルクリモンはそういつて、拳を振り下ろした。

「くそ、それなら力ずくで聞き出すまでよ！」

マサルはその拳を難なく避けると、俺たちに向かって、おいてきたデジヴァイスを投げてきた。

マサルからデジヴァイスを受け取り、マサルたちはパートナーを完全体へと進化させる。

俺も、信頼の紋章をディーアークに通して完全体、クレシエモンへと進化させた。

俺たちが進化させると、イクトがちょうど部屋に入ってきた。
メルクリモンはイクトに下がっているように伝え、椅子から立ち上がった。

メルクリモンはこちらの言葉にまったく耳を貸そうともしない。

マサルじゃないけど、一度倒さないと話を聞いてくれそうもなさそうだ。

俺は、いつでもクレシエモンの支援ができるようにとディーアークを構えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9942t/>

デジモンセイバース /SLASH/

2011年11月12日15時19分発行